



風
立
つ
村

第2刷

田
辺

た
な
へ

井

せ
い

エッセー
風立つ村

田
辺
井

目次

第一章	息吹	—
第二章	望郷	一五
第三章	胎藏の音	四六
第四章	形なき浸食	六四
第五章	悠々「田舎人」	八九
第六章	新しい時代へ	一三三
第七章	黄砂ふるる街	一三三

第八章 樟のこと 一五七

第九章 心の山河 一七四

第十章 鮫鱧鍋と真砂女さん 一八八

あとがき 二二三

第

一

章

息

吹

菜の花のちららほららに涅槃道

二度目の東京生活もほぼ二年となった平成九年の三月、久しぶりに郷里の両子に帰った。懐かしい気分で道を歩くと、川原や田圃の畦道には、もう菜の花が咲いていた。風もいくぶんやさしかった。

田舎に生れ清らかな山河に育った僕は、大人になって街に汲々と住むようになってから、いつか大事な心を忘れてしまっていた。

月日はすべてを過去の出来事に変えて流れる。でも、いつも未来へ継ぐものを育む周到にあるのも確かだ。

春風は川原に菜の花、夏の風は渚に熱い詩とメロディー、秋風は路傍に白粉の実。

詩人たち、人麻呂や西行、山頭火や暮鳥、茂吉や佐太郎も、みな心の行人で、月日の周到のなかに生きた。

そして、未来へ継ぐべき心を路傍、紙片あるいは人の心そのもののなかにとどめて逝った。彼らはきつと、風のような涵養と自在を担うべき時代の申し子だったに違いない。

暮鳥に「雲」と題する詩がある。

おうい雲よ
ゆうゆうと

馬鹿にのんきさうぢあないか

どこまでゆくんた

ずつと磐城平の方までゆくんか

何とおおらかな言葉の響だろつか。

かつては僕も、よく大空に行く雲を仰いだ。雲を運ぶ風を感じた。
いま僕は、再び真実在に帰ろうと企図した。

過去を一つびとつひもといて、これから進む道を探そうと思う。

旅遠く来てたんぼぼの穂絮吹く

昭和五十八年の春、東京事務所に転任せよとの内示が出た。一回目の東京赴任になるわけだが、直属の上司に朝方呼ばれて前に行くこと、
「東京に行くことになるが、いいのか」と言うのだ。僕は即座に、

「少し検討させて下さい」

と応え、席に戻った。しかし、よくよく考えてみると、通常より時期が早いものの、どうも正式な内示らしい。

再度その上司のところへ行つて、

「それは内示なのですか」

と訊くと、

「そうだ」

とだけ返事があつた。すぐに、

「内示ならば検討も何もないので東京に行きます。ありがとうございました」

と返答して引き下がった。この日のこの会話こそが、組織人として本格的にスタートしてい

た僕にとつての、初めての大きな節目だつた。

赴任は五月一日付けということだつたが、僕は妻子よりも何日か前に別府を出発し、引つ越

してくる家族と荷物を待った。というよりも、先ず千葉県柏市の豊四季団地に高校以来の親友

である大介君を訪ね、妻子が来るまでのしばらくの間、居候をお願いしたのである。

彼は快く迎えてくれ、草花の本や登山用具や身のまわり品のずっしりと堆積したアパートの

一室に僕を泊めてくれた。彼は独身で、何でもヤツ（八ヶ岳）の主となつていて、その時

知つた。

居候の間は、夜は酒を飲んで高校時代の思い出や登山の話などに花を咲かせ、昼間は何日か会社の休暇をもらった彼が、僕を団地の近郊にある田園地帯などへと案内してくれた。僕は心の中で、

「とうとう都会へ出て来てしまったのか」

と、不安にかられていた。だから田園地帯の長閑さは格別に心にしてみた。田圃の傍らには小さな水路があつて、子供たちがザリガニ釣をしていたのがとても印象的だった。

釣といえは魚だ。食べられるはずのないザリガニなどを熱心に釣っている子供たちの姿は、不思議に映った。

季節は、ちょうど晩春から初夏への移り変りの頃。道や畦のいちめん、花を終えたタンポポが穂わたを風に揺らしていた。一つを摘み取り、そつと息を吹きかけてみた。すると、わたが風に乗つてどこへともなく飛んでいく。旅に出た自分と同じだ。何日かして、引越の荷物とともに妻子らも来て、僕たち家族は横浜市港北区にある宿舎に落ちついた。

荷車のガラガラと街炎天下

四階建ての宿舎に暮らし始めていた。初めて住むアパート、それも四階。高所恐怖症気味の僕は、妻の信子に、火事に備えたロープの所在などを詰問するほどだったが、住み慣れてくる

と風はよく通うし、結構見晴らしはいいわで、段々に気に入ってきた。窓の外には赤い屋根の小さなアパートが見える。

ベランダには、二歳になったばかりの風太のために緑亀を飼い、プランターにはミニ大根などを植えて、生長と葉っぱの緑を自然の代用として楽しむ工夫もした。ベランダは風太との憩いの場であり、信子にとつては仕事場でもあった。

ベランダからは街のさまざまな様子が見てとれた。夏は朝から、水色の尾長鳥がガーガーと鳴いて、故郷の九州と全く様子が違っていた。

新しい生活のなか、荷車の行く固くて明るい音さえ都会を、夏の到来を感じさせた。

喰はれたる鈴虫のこと子に言はず

東京で働くようになって初めての秋、出張で帰庁した僕は合間を利用して両子の生家に立ち寄った。ひさびさに帰った田舎は秋も深まつていて、相変らずの静けさだった。

玄関に入るといきなり鈴虫の声が聞こえた。どこで鳴いているのだろうと見回すと、玄関の靴箱の上に置いてある虫かごの中からだった。

親しく思いつつ覗き込み、しばらく眺めていた時のことだ。
鈴虫が共喰をしているところだった。間近で見ると、大人の僕にもかなりの驚きだった。

何と残酷な生の縮図だろう。

自然の冷酷をつぶさに見た僕は、横浜に帰っても風太には内緒にしておこうと思った。

二歳になる風太、彼はこれから成長し大人になり、自ら厳しい社会に踏み出していくことだろう。人間の社会も鈴虫に似た弱肉強食のサバイバルゲームだから、大人になれば思い悩むこともあるに違いない。

彼には、真実をいつか自ら知り、受容し、強く生きられる大人に育ってほしい、そんな思いが頭に浮かんだ。

もの干す女陽の彼方から夏燕

転居した年は暮れ、すっかり東京の勤にも横浜の生活にも慣れた。そして翌年の昭和五十九年を迎えて、季節は夏に入っていた。

この頃は、隔週の土曜日にきまつて、葛飾お花茶屋の、索嶺さんの経営するスナックスタンド・山に遊びに行くようになっていた。

大介君が昭和五十四年頃紹介してくれていた店で、マスターの索嶺さんが歌人であり、俳句や歩こう会や登山もしている全く異色の店だった。

店の屋号でわかるようにマスターは大の山好きで、経験から草花や昆虫などにも博識だっ

た。僕の酔がまわるに連れ話に熱が入り、俳句談義など楽しい話の尽きることもなかった。

店には歌人で葛飾短歌会に入っている人たちが、大介君の勤務する会社の同僚など、マスタ

ーの人柄に魅かれた人たちが集まって来ていつも賑やかだった。
いまは故人となられたが、古い歌人の風格を備えておられた歩道の深山さんやいまもご健在
で相変わらず喋りにド迫力のあるT誌の沼田さん、また大変実直で温厚な谷内さんや昔気質の歌
人といった雰囲気の中塾さんなどにお逢いできたが、ときおり気分が盛り上ると朗詠の始まる
こともあった。いまもまざまざと思ひ出されて懐しい。

俳人では、当時からH誌において活躍していられる若手有力者の茅子さんも訪れて、僕も
加わって簡易な即詠句会をしたこともある。

当時は僕も段々と俳句の世界にのめり込み、一方で短歌も少しずつ作り始めていた。

横浜のわが家では、「もの干す女」という主人公の信子がせつせと家庭を守っていた。ペラ
ンダに出ると街の風景は輝いていて、燕がいきいきとひるがえって飛んでいた。都会の生活が
日増に充実していくのを感じていた。

山越ゆる村人もなく蒼清水

帰郷時に両子の久保殿山の上り口にあつた水呑場が目についた。久保殿山への道は、むかし

から隣村の丸小野まで通じていて、小学生の頃みんなと連れだつて野苺採りに出かけた。野苺に夢中になり、いつの間にか丸小野の、神の化身の白い蛇が出るといふ小さな社の前まで来ていたり、秋になると山芋掘に行った道だ。

当時は何度か丸小野から越して来る人たちを見かけた。道沿の杉山や雑木や櫟の林は、祖父の学がよく山芋を掘つた所で、一日に優に二、三貫目は掘つて帰つた。よほど条件がよかつたのだらう。

久保殿山は祖父が椎茸作りに成功して近所の人から買い受けた山で、椎茸にまつわる思い出が多い。

短材にした櫟の原木を肩に担いで運ぶのを手伝つたこと、父がシユラという馬糞を雇つて櫟を運んでいた附近で兄と山芋掘に苦戦し、子供の手には負えない代物を不器用な父が持ち前の手堅さで掘り一メートル三十センチほどの大物を手にしたこと、数十キロもある雨茸を軽々と天秤に担ぐ小さい母の後ろ姿を、兄弟で見ながら山を下つたことなど、きりもないほどの思い出がこの山に眠っている。

水呑場は、久保殿から里へ下り着いた道路端にあり、大人も子供も葛の葉を四つ折にして掬つて飲んだ懐しい場所だ。

僕は思い出を確かめるように、冷たい清水を掌に掬つて飲んでみた。ほんのり苔の匂のするむかしのままの水だが、いまこれを飲む人はほとんどいない。また、

ここから丸小野の村まで山越しをする人もいない。しばらくそんな感慨に浸った。
世のなかはほとんど便利になり、むかしのことは忘れ去られていく。しかし、西武蔵の谷に
いくつもあった水呑場のことには誰かに憶えておいてほしい。むかし、杵築の松平侯が両子寺に
詣でた折、もしかしたら飲んだかもしれない苔の句のする岩清水とともに。

朝まだき曇天のふと冬隣

文芸人を志して十五年、いまは短歌誌の同人として歌論の執筆などもしてる僕だが、初期の頃というと、索嶺さんにもらった山口誓子句集や中村草田男句集などを読んで、もほとんど理解出来なかった。

ただ漫然と通読して、一種独特の文芸世界に入ったような感覚を楽しんでいたくらいだ。

僕は当初、作句のスタンスとして心象と実景の中間くらいのところを捉えたい。ウイツトと格調から言えば、格調の方を重視する方向に進みたいと目標をきめていた。

俳句に対する理解がそんな程度だったので、小題の作がまとまった時には、わりと巧くいつたと喜んだ。それは、夜の明けきつていない曇天の様子に、

「これは冬の兆だな」と感じ、うまく表現できたと思っただからである。

朝まだき曇天という実景と、ふと冬隣という心象は、拙かろうとも「心象と実景の中間」という僕の企画書に、ひとまず合っていた。
こんな句でも分析すれば、俳句の技法上の虚実（虚が主観で実が客観）のことや、石川県での哲学セミナーにおいて受講したこともある上田閑照先生の理論、二重世界内存在にまで関係しているだろう。ただ小題の作は、その芽生え程度に過ぎないだろうけれど。

羽ばたきて水輪の中の鴨となる

昭和六十年の歳晩の頃、近しくお付合をさせていたただいていた俳人の茅子さん、憲司さんや啓介さんらと浜離宮庭園に遊んだ。この頃はとにかく物を観ようとしていたので、遊ぶといつても必死だった。

茅子さんは純客観写生を実践していて、何か標的を見つけると、それに食い入るように時間など気にせず見つめていたのが、つよく印象に残っている。彼は根っからの素十の信奉者で師事していた鞍田氏からも深い信頼を得ていた。

当時、茅子さんからいただいた句集の中で、次の句が彼の為人をよく表していると思う。
炎天や別れてすぐに人恋ふる

秋霖にうしろ淋しく暮れてをり

憲司さんは、東大の大学院生らしく飄々としていて、しかも感受性が鋭く、誰も思いつかないような把握をしていた。彼の当時の俳句では、

三伏の大鯉ふかくすれちがふ

灯籠の中へしづかに入る火かな

などが、いまも僕は好きだ。

啓介さんは、鳥のことについて詳しく、僕に教えてくれた。安定感のある心持で着実に詠んでいくタイプで、当時は、

厨房の母美しき立夏かな

黒雲となりて棕鳥渡りけり

のように清新な感覚の句を詠んでいたが、いまも頑張っているだろうか。こうした仲間に僕は触発され、写生の大切さを学ぶことができたことを、いまも感謝している。

小題の作は、「水輪の中の鴨となる」のところのみが捉えどころで、ほかには何の意味もない。

この作の動機は、自らたてた水輪の中にいる鴨の姿を美しくとおしく思った、ただそれだけのことだ。

この類の句を普通は純客観写生句と呼ぶのだが、言い換えれば、客体である鴨に主体である作者の心が呑み込まれてしまった形の作である。

人によれば、純客観写生句は単なる叙景にすぎなく、作者の心情に乏しいと指摘することが

ある。しかし、観方を換えれば、純客観写生句と言っても全フレーズが没入された主体、つまり作者の心から発された心情なのだから、全部が主観だとも言える。夏目漱石が「文芸の哲学的基盤」という論文の中で、
「文芸は感覚的な或物を通じて、ある理想をあらわすものであります」と言っているように、この場合の「水輪の中の鴨」はおこがましくとも、僕の真実在の一つの象徴概念だと言いたい。
少し難しい言い方だと、人間は、
世界内存在として常に世界に働きかけながら、しかもあくまでも世界によって生かされている存在として生きている。それが存在の实体すなわち真実在である。俳句の一句一句は少なくともその証である。
ということになるだろう。作品は、巧い拙に関わらず作者に関して大切な価値のあるものだということになり、すべての人がこれからの創作活動に勇気をもってあたれる一つの拠所ともなるのではないだろうか。

冬晴や泡も芥も水脈の中

浅草から隅田川下りの遊覧船に乗って楽しかった思い出がある。

「その日は快晴で、隅田川の水でもかなり青く美しく見えた。僕は例によって、物を観よう、何かを捉えよう」

と、内心を昂らせていた。ひたすら船の曳く水脈を見つめていたのだが、辛うじて得たのが小題の作だ。「冬晴や」の清々しい実感が、以下の泡やら芥やらの美的感覚上対立する句の配置によっていくらかでも臨場感を伴っているならばそれでいい。

当時やつと、俳句の技法である二句一章の意味がわかりかけていた。切字の「や」には提示の「や」・転換の「や」があるのだということなども。

この作で「船」という語句を使わずに表現できたのは、ささやかな一つの成果だったといまでは思っている。

都会の生活が創作活動により多くの貴重な経験を付加されながら充実しつつあった頃で、観る物すべてが面白く、独特の感受性が自己の内に育まれつつあった。

第

二

章

望

鄉

日溜りの土堤大いなる街見ゆる

昭和五十八年からの初めて東京勤務では、街のとてつもないでかさに吞まれていた。どこに行っても、同じ街並に見えてしまうのである。

都会に生れ育った人には、街の大いさなど知る由もないだろう。大いさは相対において生じる感情であるはずだから。

僕にとつて「大いなる街」という感覚のルーツは、格別に根深い。

思春期の頃、僕は訳もなく都会に憧れていた。テレビに見る都会の映像。アパート生活の様子、土管の転がっている空地で楽しく遊ぶ子供たちの姿や都会弁、店が立ち並んだ街の風景、机で電話するワイシャツ姿のサラリーマンのしぐさ、そのどれもが僕にとつて手の届かない未知の世界であり、そう思えば思うほど、いつか必ず都会へ出てみたいと心に秘めていた。

小題中の「大いなる」は、過去につながる思いでもあり、また街に住むようになった当時の境涯でもあった。

あの頃の憧れはいつたい何だったのか。都会に住んでみても、明るく輝いていた街の光景はいまどこにもない。もしかしたら未知の世界を経験したい僕の心が都会を妄想してただけではないのか。ただ、自己の内に息づいていた若い生命力が自己の殻を破ろうとする助走だった

ことには違いない。

初回の東京勤務も三年目となった昭和六十年の歳晩、僕は日溜りの土堤でそんな感慨に浸っていた。

あの日からまた忽ちにして十余年が過ぎ、この間、昭和時代が幕を閉じ平成の時代も九年を数えた。いま、二度目の東京在任で世田谷の奥沢に住んでいるのだが、街に大いさを感じるなど全くない。人は時の流の中で変化しているのだとつくづく思う。

いつたい、これから僕はどこに行こうとしているのだろう。かつて街に抱いた憧憬など二度ともつことのない僕は、いま故郷に根を張る時期を迎えたのかもしれない。

ゴム長の敷藁温し雪遊び

国東半島のほぼ中央、両子山麓の旧西武蔵村両子に僕は生れ育った。この村は、わが国の自然哲学の草分である三浦梅園（本名・晋、一七二三—一七八九）生誕の地だ。

西武蔵でもずつと両子山寄りの払という聚落に幼少を過ごしたのだが、九州といっても標高

がかなりある方なので、冬は大変寒かった。冬休みが近づくと、子供たちはみんな自力で木馬という構を作るのが習わしだった。どこか

らか板片を探し集めて来て、大人の手を借りることなく鋸で切り、釘を打つこともすべて自分の力でやった。左右の両脚部分によく滑るように割竹を取り付ける最後の仕上げの時は、先輩たちからの見よう見まねで誰に習うともなく青竹を割り、前部を火で炙り油抜きをして曲げ、水に浸けて焼入れをし、錐で適当に釘止めの穴をあけ、釘を打ち込んで丹念に取り付けた。竹の油抜きの際の生えぐいような匂が、いまでも懐しく甦る。

こうして雪の降る日を心待にした。

ゴム長を穿く日は、雪が積もり、木馬の出来具合を試せる日でもあった。

全き銀世界。いまのような上等な靴下があるわけなし、納屋から藁を取り出して来て、ゴム長の底に敷き込み足の冷えをしのいだ。

朝早くから子供たちが近所の坂道に集まってきて、大人の目を気にしつつもみんな雪を固めた。そして、一日じゅう滑りに滑った。ものすごいスピードで滑り降りる時の爽快さをいまでも思い出す。

木馬で夢中になつて遊んでいるうちに、最初は靴底にこわごわとしていた敷藁も適度にほぐれて、軟かく暖かくなってくる。足の冷えも吹っ飛ぶ。

足袋が主流だったが買ってもらえなわけなし、暖かい敷藁の感覚がつよく僕の印象に残っている。

いまでは、この里も過疎化が進んで子供たちの数も減り、近頃よく耳にする地球温暖化現象

の所為か雪があまり降らなくなった。自然、木馬や竹馬の遊びも廃れてしまった。近頃の子供たちは、冬は暖かい電気ごたつに入ってテレビを観て過ごすことが多いと聞く。

四十一年の歳月は、氣候を変え、經濟を変え、僕たちの生活環境全体を変貌させた。そして当然にして、この里の生活風俗を一変させてしまった。

「ゴム長の敷藁温し」という事實は、ますます過去の方へ押し流されていくことだろう。しかし、これからは、あの頃の素朴な心を何かに託すべく、新しい文化の流れを探さなければならぬだろう。

蒲公英の絮飛んで過去また一つ

最初の東京勤務も三年目を迎えた昭和六十年、路傍に見かけたタンポポのわたに特別の感懐をもつた。子供の頃からよく野原や山や川に親しんで育つた僕は、その年の二年前横浜に転居してすぐの頃、望郷の念を、

旅遠く来てたんぼの穂絮吹く

(草笛所収)

と詠んだが、小題もその延長上の作である。

「ああ、タンポポは穂絮となり季節が移りゆくんだ。時の流はとめどもなく、また一つ過去を積み重ねていくのか」

との心情だ。時の流に格別の感懐を抱くのは古くからの性癖で、いつも心のどこかに刻まれている故里の山野への思いが、時折顔をのぞかせてくる。

「いつか故里に帰って暮らしたい。だけど、一生帰住できないかもしれない」

こんな気持が心の底流にあつて、俳句や短歌を続けてこられたのもこのことがずっと源泉になつていたのだろうとそんなことも思う。

ここで、小題の作に即して文芸における「虚と実」について考えてみたい。俳句を作り始めた頃、漠然と「実景と心象の中間」のところを目指そうと考えていたのも、いまに思えば虚実の問題そのものだとわかる。

短歌においては、例えば茂吉が「実相に観入して自然自己一元の生を写す」と言い、弟子の佐太郎は「主客均衡の観入」に言及したことは周知のこと。両氏ともにこれを写生の基本と考へた。僕は、数年前西田哲学を学び始めて以来、主客均衡とは實在論としての主客合一に相通じるもので、自己の存在の本質に関わる基本的な理念だとみている。

虚は自己の感慨で、実是一般に言う対象の事実と考へてさしつかえないと思うが、要は二つの要素がバランスよく融合したとき自己の存在感につながる作品になると、両氏は教示したの

だろう。詩人が、詩を詠ましめる本体を捉え得たと感じるのは、そんなときだと思う。佐太郎はまた別の言葉で、主客均衡して作者の生命の律動の込められた作品になる、という主旨のことを述

べている。

虚が大きくなりすぎれば、観念的で独我的な詩となり、一方、実のみに心を奪われるならば、事実報告的なものや、よく言われる「絵はがきの」な詩となる。その点が俳句や短歌を作る上で最も難しく、よく虚実皮膜の間を追求すべきとも言われる所以ではないかと思う。

具体的に分析するならば、蒲公英の絮（対象 実）が意識（自己 虚）を限定し、意識をとりこにし、それに対して意識は逆に「過去また一つ」と対象を限定（自己の全境涯をかたむけて能動的に感情を統一）する。いわば相互限定の状況が、存在（生）の実体であり、写生は「対象の把握」から一歩進んで「生の把握」へと昇華されると言っている。虚実の理論は、自己はすなわち、いかにして生を捉え写すかという写生の理論にほかならず、究極の目標は、自己の存在 §33 を表現することにあると言っている。少なくとも僕の内では永遠の生命を得て、ザインと合流している。小題の作は、その意味において、少なくとも僕の内では永遠の生命を得て、ザインと合流している。

ひなげしの蕾の裂けて炎見ゆ

昭和六十年五月に都内の深大寺植物園に遊んだ。そこは芍薬など種々の草花が咲き乱れていたが、なかでもひなげしの花群には心を洗われる気がした。

紅鮮やかに咲いているものや、緑色の蕾のほぐれてなく頭を垂れているもの、少し開きかけのものなどがとりどりにあつて、僕は夢中になつて観察した。

そのうちの一つ、まんなかから縦に割れてまさに開こうとしている大きな蕾の割目をそつと覗いてみた。

すると、何と真紅に色づいているではないか。炎のような真紅の花が織り込まれているひなげしの蕾の不思議。僕はその時、花の命の神秘をかいま見たような感動に浸つた。

散策のあと、付近の喫茶店で同行の数人と即詠句会を開いたのだが、小題の作には賛否両論があつた。特に茅子さんが、

「なぜこの句をとらないのか。僕は問題なく特選なんだけどなあ」と推してくれたのがあるがたかつた。

両論に分かれた原因は「炎見ゆ」の暗喩だったかもしれない。この程度では全く普通の把握にすぎないと思われたのかもしれない。

しかし、僕としては作品よりも何よりもひなげしの生命力というのか、熱情のようなものに感動して、ともかく作品に成し得たことを喜んだ。

この時から、ひなげしは僕にとつて魅力的な花の一つに加わつた。俳句を始めた頃の自分の心の中にあつた純粹な感情が懐しく思い出されるからである。

それに、この花にはどことなく異国情緒があつて、どこの国とはしらないがルーツを辿つてみたいという感情が不思議に湧く。最初に出逢つて以来なぜか渚を、海をこの花に感じる。

蒲田にて味噌ラーメンを食ふ薄暑

地方育ちの僕に、東京で親しみを感じている町が二箇所ある。一つは葛飾で、もう一つが蒲田だ。

葛飾は、昭和四十六年の学生だった頃から親しく思うようになった。学生の頃は、親からの仕送りで生活している身とはいえ、家が農業で生計をたてていたため仕送りの一箇月二万円での生活の大半を過ごし、決して楽ではなかった。下宿代の一万三千円を差し引いた残りの七千円を、学校の昼食代も含む一月の小遣いに充てるわけで、相当に苦しかった。

僕は古い映画館で時間を潰すのを覚えた。スバル座といって、二百円で、上映の映画を何度も繰り返し観ることができた。

金が底をつき始めると、きまつて僕はスバル座へ逃げ込んだ。

よく観た映画の一つに渥美清主演の「男はつらいよ」があった。この映画のよさは、俳優の渥美清氏の演技はもちろんのこと、東京の下町において繰り広げられる心こまやかな人情話や町の風情などに、いまの日本になくなってしまった素朴な心や生活習慣などがさりげなく込められていたことだった。感銘した僕はすぐに寅さんのフアンになった。

この頃から、柴又帝釈天とその裏手の江戸川土手ののんびりとした風景や、寅さんの演じる

「粋な男のさすらいの旅」のことなどが、心にすっかり焼きついていた。

昭和五十四年の初めての東京出張の時、大介君の紹介で葛飾区堀切に住む索嶺さんを知り、以後お付合をするようになったのも僕の葛飾熱に拍車をかけるきっかけとなった。

五十八年に東京転任になるとすぐ、索嶺さんの経営していたお花茶屋近くのスナック・山を中心に、葛飾との結びつきを深めていった。

休日には、マスター、大介君やその仲間たちとともに、柴又や矢切や野菊の墓文学碑さらには蕁菜池、弘法寺、真間の池周辺などをたびたび歩き、葛飾はすっかり忘れがたい地になった。

先ごろ、渥美氏の訃報が突如テレビ等で伝えられたのには驚いた。あまりにも控えめな死にざまの清廉さと潔さは、まさに粋な旅人・寅さんに相応しい最期だった。この訃報を知り、「僕の一つの時代が終ったな」と思った。

もう一つの町、蒲田は、僕がグループサウンズやフォークソングに熱中していた頃から親しく思い始めた所なので、年代はもつと遡る。

蒲田を親しく思うようになったきっかけというところ、もともと自分にも定かではない。確かスパイダーズの堺正章や、かまやつひろし、それに浅田美代子の共演によるテレビドラマの「時間ですよ」が大いに流行った時期があって、グループサウンズを通しての東京への憧れに加え

て、ドラマの蒲田周辺（と勝手に思い込んでいた）を中心に繰り広げられた下町人情物語に共鳴したからだろうか。

東京在任中は前回の時もいまも、羽田空港まで行く時はいつも蒲田まで目蒲線、そこから京急バス、帰りはその逆コースなので、ますます親しみが増す。けれど、蒲田の町中にそんなに詳しいかというところではない。いつも通過をするだけで、いまだに好きな不思議な町だ。

東京にしては珍しい小さな商店や、町工場の並んでいるこの町は、バスの中から見てもいつも親しい。そこにはまだ、人々の人間くさい生活が残っていると思えるからだ。

小題は昭和六十年の五月頃、蒲田駅構内の立食いラーメン屋で味噌ラーメンを食べた時のものだが、僕はこんな些細な行動にさえ、この町の「この町らしさ」を思い、夏の近づく気配を感じていた。

来し方を顧みる夜の野分かな

子供の頃、わが家は建ててから十年ほどしか経っていなかったからか、台風の前など近所の人々が家族ぐるみで避難してくることがあった。

台風が近づくと、父は木製の雨戸を戸袋から引き出して家を完全に閉め切り、風に飛ばされないように、雨戸に外から板を釘付けしてしっぴかりと固定した。

また、家の畳を一部残して取り上げて雨漏に備え、むきだしになった床板の上には自転車を運び込み逆さまに据えて灯をとれるようにするのも、わが家が台風に備えるいつものパターンだった。

仕上げは蝋燭と燭台、それにカンテラとマッチの各部屋への用意。すべてが完了する頃、近所の家族が避難して来る。

家族のなかには友だちがいたので、僕たち子供としては一晩じゅう友だちと過ごせる楽しさが台風の怖さを忘れさせた。

やがて日も暮れて風雨が激しくなると、一気に雰囲気は緊迫し、心が昂ってくる。気象台の職員になることを目指していたという父は、ラジオをかけっ放しにして台風情報を取り、

「いま、大隅半島の南南東を北上中」

などと、みんなに教えてくれた。そんな時の父の口調はまるで気象台の職員そのもので、常になく威厳に満ちていた。

友だちとは一晩じゅう幽霊の話などを語り明かした。

しかし、運悪く雨漏が始まつたりすると大変だった。一つを洗面器で防いだかと思うと次の雨漏が始まり、それをバケツでカバーする。するとまた別の雨漏が始まるといった具合で、時にはバケツなどが不足して、どんぶり茶碗まで持ち出して何とかしのいだ。こんな時は、まる

で家じゅうが「雨漏の大合唱」だった。

次第に風雨も次第におさまってきて、やがてけだるさの中で夜が明け始める。朝、そこには美しい光景が現れる。雨戸の小さな節穴を通して入る日光がその内側の障子に映し出した、山々の逆さまの映像である。何とも神秘的で、台風の去った後の虚脱感とともに、いまでも僕の脳裡に鮮明に刻まれている。

すっかり朝が明けると、喜び勇んで外に出てみる。全くの晴天。何とも言いがたい天候の段差で、気分は爽快。朝御飯を有り合わせで食べて近所の家族が帰っていくと、僕たちには大きな楽しみがあった。梨拾いだ。

竹籠を持って、川向いのマ스婆さんの家の裏道を久保殿へと上っていくと、わが家の貴重な梨の古木があった。そして、その木の下の道にも藪にも、いたるところに梨が落ちて転がっていた。

普段は高い木なので手が届かないだけに、この時ほど心の弾んだことはない。まさに自然の恵みだ。梨は形が上品ではなかったが、水分が多くて甘く、味が一級品だった。

いまでも、台風が来ると子供の頃に帰ったようで心がときめいてくる。それにしても、あの頃から随分と年月を経てしまったものだと思う。

野分はもともと、徒然草の「野分のまたの日」のように昼間晴れた時に吹く疾風を言うそうであるが、小題は台風を指していて、それは俳壇でも認知されている。

梨拾いの思い出は、徒然草の「またの日」の気分に通うものだとひそかに思っている。

水の帯解きゆく秋の河口かな

僕は川が好きだ。大きな川でも小さな川でも、また水路のようなものでも、水が流れていさえすればかまわない。

六十年の秋、葛飾に本社のある玩具会社で設計士をしている大介君が、霞が関の事務所をひよっこり訪ねて来た。土曜日のお昼頃のことだ。

彼は、

「田辺よい、どこかに遊びに行かんか」

と言うので、

「多摩川を見に行かんか、土手で日向ぼっこをしながら川を見るのもなかなか楽しいぞ」と提案すると、すぐさま話はまとまった。

その時、会話を側で聞いていた上司が、

「どこかに行くの」

と訊くので、

「多摩川へ行くんです」

と応えた。すると彼はまたまた、

「何をしに行くの」

と畳みかけるように訊くのだった。僕は少々うんざりしながら、

「川を見に行くんです」

と応えたのだが、上司との会話はそこでとぎれて、自分たちの意思が上司には少しも伝わらないな、と感じたのを思い出す。

世間の人の多くは、どこかへ行く時必ず目的をきめてから行く。例えばゴルフだとか、キャッチボールをするとか、あるいはテニスの練習にとか……。しかし、僕たちは何もしないでただ川を見ているのが好きなだけだ。

幅を広げながら海に帰っていく水の流（小題中の 帯）に秋を感じた記憶は、いまでも鮮明だ。

河口は、なぜかいつも自由な感じに満ちている。水の循環系の一つの節目が自然の偉大さを思わせるからなのか、それとも人体の中の海 羊水 に生れた命に回帰を促す力を、海は湛えているのだろうか。

小題に掲げた作の取柄というものはとりたててないが、冒頭に述べた安らかな情景が少しでも伝わるならば、僕はそれでよしとしたい。

これからも、二次的な計らいにとらわれることなく、なるべく川や野山そのものを楽しむた

めにそこへ出かけたものだ。

二つめを食べて種無柿と知る

人間とはよほど、自分の生活の利便を中心に行動したがる動物のようだ。

冬は暖かい暖房機器、夏は涼しい冷房機器に始まり、ボタンを一度押すだけで洗いから脱水までしてくれる全自動洗濯機、炬燵に入ったままテレビチャンネルを自在に選択できるリモートスイッチ。また、近頃流行の携帯電話や人工衛星を利用したパソコンネットワーク等々。

利便の向上は科学技術の発達に伴い日進月歩、とどまるところを知らないようにみえるのだが、ときに自らがふりかえり、功罪を考えてみることも必要ではないか。

人類が、科学技術の恩恵により随分と助けられてきたことは事実だ。しかし、技術が自然の生態系にまで及んでくると、大きな問題を生じる。種無柿くらいなら、

「ああ、食べやすくいいな」

ですむのだが、いまの時代は試験管ベビーがすでに定着しつつあるし、遺伝子(DNA)の組替で、すでに絶滅した太古の動物マンモスまでも復活させようかという時代である。

植物の品種改良など人間社会に役立つことも随分と多い一方で、冷凍保存した他人の精子を何年か後に譲り受け、解凍した精子をあらかじめ保存していた自分の卵子と試験管の中で受精

させ、自分が体が弱いからというので他人の胎内に着床し出産してもらうなどとなると、何が何だかわけがわからなくなってくる。

人間は、これまでタブーだった神の領域にまで足を踏み入れつつあるのかもしれない。種無柿もこのような社会の延長上の一つの出来事である。便利な世のなかになつた反面、重大な誤りも進行している気がする。

逆立てる尾は菱喰の何をくふ

菱喰はガンカモ科の渡り鳥で、秋から冬にかけて沢や湖にやってくるという。僕は実際にはこの鳥を見たことがないのだが、何時だったかテレビのドキュメンタリー番組で、この鳥が晩秋の装いを深める沢の中で、水中に顔を浸し垂直に尾を立てて餌をあさる姿を見た。

その姿に、自然のなせる妙技と生命の営みをかいま見た気がし、しばらくその映像に見入っていた。

「ああ、冬に近づいたな」

との思いと、

「宿舎と事務所の往復ばかりの日々、時には清浄な自然のもとに身を晒したい」
そんな願望を心の中に錯綜させながら。

短歌においては、映像に見たものは、

沢水の光の中に尾を立てて菱喰ふ鳥を映像に見つ

など、実際に即して詠むのが普通だが、何せ俳句は短いので小題のような形に省略せざるを得なかった。「逆立てる尾」という菱喰の生の営みの象に「何をくふ」と言つて、人には見えない所で得ようとしているのは何かとの疑問形を取り合わせ得たのが、少し満足した部分だ。生命は種々の形で営まれるのであるうが、菱喰の自然にふるまうさまに感銘し、作品に残そうと思つた。

生の営みの一断片に、自己の生から湧く心情を重ね合わせて一句の生れたことは、単調な生活のなかでの救いだつた。

返り咲く姫踊子や石廊崎

初回の東京生活最後の冬、昭和六十年の十一月頃だつたらうか。確か職場内の旅行かで伊豆の石廊崎を巡つた。

平塚市に叔母夫婦が住んでいたこともあり、伊豆にはよく行つていたのだが、何度行つても飽きない所だつた。

特に下田須崎の居酒屋は、石段をかなり上つた見晴らしのいい高台にあって、土地の漁師が

いまに伝えている「いけんだに味噌」なる魚の鍋料理が価格も手頃、それに舟形に盛られた魚の刺身も豪勢で印象深い。修善寺の割烹旅館・あさばに泊まった時は野天風呂がよかった。晩秋の頃で、湯に杯を乗せた盆を浮かべて、はらはらと楓紅葉の散るなかで飲んだ日本酒の味に気分も最高だった。

伊豆は、海はもちろん川という川はどこも鮎釣ができるほどの清流で、半島の尾根伝いに走っているスカイラインがこの上ない景観を見せてくれる。

もちろんこの日の伊豆旅行もよかった。

海沿いをバスで行く時、アロエが赤く沿道に咲き並んでいたのも伊豆半島らしかったし、夕べの礁にぼつねんととまっていた海鷗のことも忘れがたい。

その日、灯台に向かう岬の小道には、小春日和の所為か姫踊子草の花が返り咲いていた。

安らかな気分で道を歩きながら、ふと、川端康成の小説「伊豆の踊子」のことを思い出し、

それを踊子草にかけて小題の作は成った。いま、二度目の東京勤務で世田谷の奥沢に住んであの日からはや十二年余の歳月が経った。須崎の居酒屋も改築してホテルになつたのだが、今回の流はますます加速しているようだ。

一枚の半ば日当たる冬田かな

高浜虚子の有名な句に、

遠山に日の当たりたる枯野かな

というのがあり、一見単純な写実にみえて実は奥深い内容を秘めた作品の一例とせずと心にとめてきた。その句には僕なりの思入れがあり、目指している短詩型の存立基盤をなしていると思うので言及したい。

僕はここ数年間、斎藤茂吉直系の歌人・佐藤佐太郎の研究をし、特に「主客均衡の観入」に関連した論文を歌誌に発表してきたが、此の頃は、短歌に限らず詩のすべてにおいて主と客の均衡あつてこそ、作品が生命を得るのではないかと考えている。

枯野の句の場合、虚子の心が枯野の景に吸収され尽くして、均衡し同一している。すなわち虚子の存在に昇華していると思ふ。

虚子の過去から現在に至るまでの全体験が、「遠山に日の当たりたる枯野」を捉えすなわち限定し、下五の「かな」で感動、詠嘆しているのだと思う。

さらに穿った深読みをすれば、過去への回帰願望とそれが叶えられない現実とのギャップからの悲しみ、

「過去には戻れない」

との、心の深層から発する悲しみのような響さえこの句はもつ。

虚子の詠み上げた自らの生命、それが写生句たる所以だろう。デッサンの意味からの写生ではなく、自己の命を写す写生である。

ところで小題も、虚子には遠く及ばないものの精神は同じのつもりである。

昭和六十年のある小春日和の日に、僕は大介君が新しく移転していた千葉の花見川団地を訪れた。

団地の近くに田圃があるというので、ふたたび畦道を歩こうと出かけた。冬の田園風景はいつ見ても懐しく、うら寂しい。子供の頃遊んだ郷里のことを思い出させるからだ。

ふたたび畦道を歩きながら、僕は、もはやサラリーマンの生き方しか残されていない自己の境遇を思い郷里を思った。

それでも、寂しさだけではなかった。畦道を歩けることの幸せも感じていた。

畦道の何ともいえない懐しい土の匂、うらうらと日の照っているありがたさ、こんな感情が心の中で消滅してしまうなど到底考えられない。それは自己の根幹をなすもので、僕を冬田に魅きつけた僕の血肉そのものなのだから。

大海鼠水吐き出して捌かれぬ

姿がグロテスクでもどこか愛嬌のある海鼠。祖父が酒好きで、冬になると好んで食べていたのを見て育った所為か、僕にとつても大の好物だ。

料理法はいたって簡単である。丸々と太った海鼠の、お腹を縦に開けると、中にばんばんに詰っていた水が抜けてしまう。わずかに付いている内蔵を取り除いたあとは二、三ミリくらい厚みで刺身にし、醤油でも三杯酢でもつけて食べれば最高だ。冬場のは特別に寒海鼠と珍重され、身もひきしまっていて美味い。

それにしても、何と奇妙な象なのか。

動物らしくない動物の海鼠。人間の手にかかると何でもすぐに食物にされる。海鼠もあわれなら、生きていくためには何でも食べる人間の本性もまたあわれである。

いともたやすく捌いたその固体は一つの命だった。

冬が近づくと頃、僕はまた性懲りもなく妻に一つの命を要求する。

なお、小題の作は、平成八年十月に角川書店から発行された「第三版俳句歳時記・冬の部」に収録された。

坐禅して祈れば寒夜女兒生まる

僕の坐禅は正式なものではないが、以前から興味をもっている。最初に禅に触れたのは昭和五十二年のこと、少林寺拳法の道院で修行を始めた時である。

道院は、正式には金剛禅という宗教法人の開いた道場で、原始仏教を根幹に置いて禅としての拳法を教えている。その教え「拳禅一如」を僕はいまでも大事に思っている。心身一如ということと同義で、拳はすなわち身、禅の方は心を表し、両者の統一を目指し努力しようとの教えだ。

身体が頑丈でも精神が伴わなければ善をなし得ないし、その逆もまた然り。佐太郎の主客均衡論にもつながるものだと思う。

その後坐禅を直接に経験したのは、昭和五十八年、啓二君が応募した坐禅教室に参加の誘いを受けた時のことだ。

八王子から約一時間ほどバスに乗り山の方に入って行くと、狐塚という所に、懐しい童謡の一節「夕焼小焼で日が暮れて、山のお寺の鐘が鳴る」のモデルといわれる興慶寺がある。そのお寺は、山間の家も疎らな集落の高みにあつて、宗派は臨済宗の南禅寺派とのことだ。そこで初めて伝統の古い臨済禅を体験した。

三十分と四十分程度の禅を合せて三回体験し痛感したのは、無心になることの難しさと、何よりも沈黙することの苦しさだった。頭の中で、

「何も考えちゃいけない、ああ、そのことも考えちゃだめなんだ、そのことも……」

というふうにとりとめもなく思考が循環したのを思い出す。あせつて意識を無にしようとする、隣にいる人のちよつとした咳払や小鳥の鳴き声にさえ動揺する。

といった具合だ。しかし、坐禅を終えた後は、少林寺拳法の鎮魂の時と同じく爽快だった。昭和六十一年、二番目の子が生れるというので妻子を別府に帰し、僕は単身赴任の形となつ

ていたが、出産も間近となつた一月十日の夕方、信子の実家から横浜の宿舎に電話が入った。「生れそうなんで、たったいま入院させました」

僕は、逆子であることを心配していて、機会あるごとに寺であろうが神社であろうがおかまいなしに安産祈願をしてきたのだったが、この連絡を受けて、自分にもできる何かをしようとして坐禅を思い立った。

すぐさま、三十分間の坐禅を続けて二回行った。その直後、間髪を入れず今度は両子の実家

から電話が入った。「無事生れたで。女の子じゃったで」

との母の声だった。長女葉菜子誕生を知った瞬間である。

この時ほど僕は不思議な感覚になったことはない。自分の意思が胎児に、信子に、そして神にまで届いたのかと思つたほどだ。

この件以来、前よりもずつと敬虔な自分になれたと思つている。いま、葉菜子も十二歳に成長し、一方自分は禅とも関係の深い西田を学びつつ佐太郎短歌を追尋しているなど、人の生き方はつくづく何か目に見えない糸のようなものでつながつていると思えてならない。

写生短歌における直観ということも、上田閑照先生のいう二重世界内存在のことも、すべて禅につながるものと思う。これからも僕は、与えられるすべての機会を大事にして生きたい。

連風の昇りて天地思ふまま

昭和六十一年、葛飾柴又の寅さん映画で有名な江戸川の河川敷に遊んだ。

この頃は俳誌「沖」に所属していたのだが、沖には若手会員だけで作っている「舵の会」なるものがあり、有力メンバーだった道夫さんから、会に出てみないかと電話で誘われたのである。下総中山の発行所分室へ出かける途上、江戸川周辺散策ということになった。

舵の会は午後にあることになっていて、午前中は索嶺さんや大介君らと隅田川河畔の桜餅で有名な長命寺や、言問団子で世に知られている言問橋附近を散策した後に、柴又の河川敷へと足を伸ばすこととした。

索嶺さんらとそこで別れて、長命寺で買った桜餅などを手土産に舵の会に臨んだ。会には、能村登四郎主宰のご子息の研三さんをはじめ、僕を誘ってくれた中原道夫さん、ほかに梅田津さん、安居正浩さん、猪村直樹さん、渡辺鮎太さんといった、沖の誇る若手論客の面々が顔を揃えていた。アウトサイダーとして鷹羽狩行主宰の「狩」から遠藤若狭男さんも来ていた。

句会は緊迫した雰囲気にも包まれていた。批評には聞き慣れない片仮名の芸術用語が頻繁に飛び交うなど、最初から圧倒されっぱなしだった。

小題の作は「歴史とは皿に載りたる桜餅」、「日を受けて蠟梅いよよ造花めく」などの句とともに提出したのだが、いずれもあまり評判がよくなかった。

「天地おもふまま」で連風の伸びやかさと雄大さを言おうとしたのだが、当り前すぎる表現と思われたのか一向に受けなかった。

しかし、そのこと自体僕には気にならなかった。俳句は人により良否の判断の差が大きいものであるだけに、作者としての捉え所が一つでもあると自ら確信できれば、それはそれでいいのではないかと、ひとり納得していたからである。

天地を制圧したような、連風のスケールとおおらかな姿が人にまで伝わるかどうかは、いまだにわからない。

しかしこの作とともに、この日の出来事がいまも懐しい。

歴史とは皿に載りたる桜餅

歴史といえは、コヒゴロノ・ヤシントゲテ 一五六八年一信長天下統一ヤコヒナワクスブル・バステイーユ 一七八九年 フランス革命、コイヤデゴザルペリーサン・シカシカイコク 一八五三年 黒船浦賀来航 などという、受験勉強の中で習った史実を思い浮かべる。

しかし、最近ではこの言葉により深い意味を感じるようになった。小題の作に盛り込んだと思っている次のような歴史観だ。

歴史とは、武將の天下取りの物語や戦争の記録ばかりのように教えるけれど、よくよく考えてみると、実はこの皿に載っている桜餅だつて立派な歴史そのものじゃないか、永く人に親しまれ味の工夫を積み重ねられてきた桜餅、何と堂々たる歴史の産物だろう。

こんな感受だ。
桜餅へのこの時の感受は直観だつたけれど、いまではこの歴史観は僕の思考を完全に占めていると言つていい。

桜餅は人の心と物との融合の産物で、いわば歴史的に進展する世界の生み出したものにほかならないからだ。

どんななさやかなとるに足りない物にさえも、人のあたたかな心がこもっている。それを敷

行すれば、人は一人として独力で生きているわけではないということになる。

宗教じみた言い方をすれば、人は世界によつて生かされているのだ、とも言えるのだ。歴史、それは単なる静的な史実などではなく、いま誰もがその中の主役であるところの、動的で血の通つたものだと思ひ始めた。

沈丁の十日もすれば匂ふべし

幼い頃から香りを大切にしてきた花がいくつかある。なかでもケマンとジンチヨウゲとコスモスが好きだ。

ケマンとりわけミヤマケマンは、僕の郷里では珍しくない花だ。

子供の頃、よく石垣をよじ登つたりして遊んだが、そんな時たまその花茎を手で押し潰したりすると、つよい香りが手にしばらく残つた。何とも春らしい清々しさを含んだ香りで、僕に最も春を感じさせる花となつた。

いまでも野辺に見つけると、可哀相だとは思ひながら、一本だけは摘み取つて切口の香りを楽しませてもらう。

春にさきがけて咲くジンチヨウゲも、特に親しい香りの花だ。ジンチヨウゲの蕾がふくらむ頃は、寒さのなかに春の趣が段々と満ちてきて、気分も高揚し

てくる。日毎ふくらんでくる蕾を日々の往反に楽しみながら開花を待つ。

小花が一つ、二つと開いてほんのりと香りが漂うようになると、春を実感できてひとり嬉しくなってくる。

秋にはやはりコスモスがいい。

コスモスと風はワンセットのもので、爽やかな秋風は先ずコスモスに吹く—と言っていいだろう。

風に細身の茎がしなりながら揺れ、一斉に薄紅の花がそよぐさまは、疲れた心をも忽ちに癒してくれるほど優しい。郷里にときに帰省してこの光景に出合う時、懐しさの反面寂しさが湧く。

郷里を出て三十年が過ぎたいま、変りなく花の咲くさまを見れば見るほど、幼い頃といまの自分の乖離を思い知らされるから。

それにしても、どうしてみんな田舎を出て行ったのか。

秋はこのほかに、葛の花の、甘くて食べたくなるような香りも好きだ。

冬は何といても菊の花である。「りりと咲く」という清廉な感じとともに、香りにも独特の緊張感がある。

小題は、いまの職場に近い霞が関の三年坂の傍らに昭和六十一年当時に見かけたジンチョウゲで、仕事の往反に楽しんでいた花である。外勤の多い任務で冬場が辛かっただけに、この花

「が香つてくると、
「いよいよ春が来たのか」

との感慨をもった。

「この作は、舵の会に出詠したところ、いまでは俳壇の有名になつた道夫さんが、
「単純にみえる句だけれど、未来のことを言つてるのは先例がなくて面白いんじゃないの」
との評をくれた。そんな懐しい思い出がある。」

早春の豆腐に暗き桶の底

昭和六十年の六月頃別府に帰省していた信子は、翌年の一月に葉菜子出産し、それからずつと育児に追われていた。

僕の方は仕事があるので、ほぼ半年の単身生活を余儀なくされていた。自炊は不得手ではなかつたが、ときおり家庭の空気に飢えたような気分になることがあつた。そんな時、せめて食物だけでも家庭の味にしようとなつて、豆腐入りのみそ汁などを作る。日吉本町の宿舎の近くに僕が行きつけの八百屋があつて、パツク詰めでない豆腐をむかし風に桶の水の中に浸して売つていた。注文すると、水の底に暗く沈んでいる豆腐を手で掬つてくれる。それが何とも新鮮だつた。

早春の趣は、むしろこんな些事にある。「暗き桶の底」からみずみずしい真つ白な豆腐が掬い上げられる。桶の底の暗さも、沈んでいておぼろに見える豆腐も、掬い上げた豆腐もそしてその雫も、またそれを掬ってくれる華奢でないおぼろの手もみんな早春そのものだ。

佐太郎は短歌に関して、「歌は意図ある如く、意図なきが如くにして作者の影あるを要す」と言ったが、俳句やすべての詩にもあてはまると思う。

小題中「暗き」という部分が、作者の影に該当するものだ。

「桶の底」は客観部分、通して「暗き桶の底」という主客融合体が、「早春の」という感情を引き出した形になっていて、結果的にその感情も「作者の影」ということになると思う。

第
三
章

胎
蔵
の
音

子燕の一つ口あけみな開くる

初回の東京勤務をようやく終えて、昭和六十一年の三月に単身で別府に帰郷した。帰ると、典子と五歳の風太は生れて間もない葉菜子とともに市内鶴見町の実家に寝泊まりしていた。

早速、葉菜子に初対面しようと思案の中二階の部屋へ上った。そこには触ればまるで壊れそうな、人形のような嬰兒がすやすやと眠っていた。

彼女は肌が白くて僕の眼には眩しくみえた。三箇月も顔を見ずに放っておいたという引け目が、よほど溜まっていたのだろう。

僕たちは何日か実家に過ごした後、ようやく東荘園のわが家に帰った。

一箇月あまり経って、葉菜子の顔見せもかねて両子に帰ることにした。生家には、屋敷のある敷地より一段低い道路に接した場所に車庫があつて、車庫の壁には何年も前から燕が巢をかけていた。毎年雛を育てるのだ。

いまでは老け込んで外出しなくなつた父も、以前はよく附近を散歩したりしていて、燕の親子を可愛がっていた。

燕が、燕がと、よく口にしていたのを、なぜか親しきをもつて記憶している。巢は、車庫のそんなに高くない天井のすぐ下隅の壁にかけてあつて、子育ての様子は手に取

るようによく見えた。

親燕も、危害を加えないのを知っていて、少しも恐れることなく、しょっちゅう出かけては餌をもつて帰り、子燕に与えた。子燕は確か三、四羽いて、餌を乞う姿がとても可愛らしかった。

一羽が口を開けるとその他のもつられたように一斉に口を開ける。それも結構大きく開けて餌をせがんでいる。

そんな子育ての様子は、まるでわが家とそっくりじゃないか。かくして、帰郷後の生活が子育てを中心に動きだしていた。

雨ふるや落の葉蔭に山頭火

東荘園の生活がようやくしっくりとしてきたのは、帰郷の年の梅雨の頃だ。それでも、まだ横浜、東京に暮らした強烈な影響が体に残っていて、ときおり寂しくなったり、懐しくなったりもした。こんな感情は、時差ぼけのようなものかもしれない。

刺激がない、時間がのろい、夜が静かすぎる、だから寂しいのだ。

わが家の居間の窓のちょうど外側になる所には、狭いながら菜園を作っていた。両子からわざわざ運んできた土を入れ、両子で掘った落や茗荷の苗を移植してはびこらせていた。

梅雨の雨が大きく茂った蔭の葉に音を立てて降っていた日、僕は蔭群を見ながら思いをめぐらしていた。

飽きることなく見つめていると、蔭群自体が一つの世界になる。すると、葉蔭に放浪の旅を続ける山頭火が雨宿りでもしていそうなイメージがふくらんだ。

心の中に湧いた旅情そのものだ。山頭火がいつかどこかで雨宿りをしただらう時も、きつとこんな雨音がしていただらうと……。

とめどもない雨音。幼い頃によく聞いた音だ。学校からの帰路、小さなバス停のトタン屋根に、雨の日も遊ぼうとして籠った近くの山神社の屋根にもよく響いていた、寂しさを少し帯びていても全く陰鬱ではない静謐な雨音だ。

こんな雨音は、陽に傾きすぎた心を静かな状態にひきもどしてくれる。
まだまだ止みそうもない雨。山頭火の雨宿りも当分続きそう。

一　ところ雷雲の鋭き壁を見つ

自然はときに荒々しい素顔を見せる。街に暮らす僕たちは、あまりにも手を加えた世界に埋没して、普段は自然の中に居ることさえ忘れてしまっている。
そんな中でかいま見る自然には、ふとしたはずみに人の本性を呼び起こす働きがある。

くろぐろとして雄々しい雷雲、雷雲の雷雲たる一面。

それを、鋭い襷に見た。やがて、どろどろとしていた日々の感情はいつか影をひそめて、清々しい気分浸ることができた。

感動の機会などどこにでもある、誰も出合おうとしないだけだ。

ここで話は写生論に向かう。

俳句や短歌で写生ということをよく論じているが、どうも二通りの意味があるようなのだ、歴史的に。

一つは、正岡子規が俳句と和歌の革新のために唱えた写生だ。これは厳密には写実というべきである。写実は、なるべく自分のことは言わず、自分の周りにある対象をありのまま描写する、つまり絵画にいうデッサンとほぼ同義だ。

自分を主体、対象を客体というなら、客体をできうるかぎり忠実に緻密に模倣しようとする。

この徹底した技法は、子規から虚子へ、虚子から素十へと受け継がれ、現在では素十系列の鞍田氏に、さらに若手俳人で最近S誌を創刊した茅子氏などへと系譜を広げている。

もう一つが、文字どおり生(命)つまり作者の存在 ソウ を写すものだ。

後者は、前者より一層の主観的深みを希求するものである。素十が純客観写生を信奉し、

萱草の芽のとびとびの一とならび

にまで進んだのに対し、対極表現として純主観写生とでも呼んだらいいだろうか。いや、それだと、主体が客体を現象化した形つまり独我論に陥る危険性を孕んだ表現なのでよくないだろう。僕の先師・佐太郎の「主客均衡論」を借りて、「主客均衡写生」とでも呼ぶ方が少しはよからう。これは、

「ザインがもとも主客同一である」

との立場をとる理念だと言えよう。

この系列の伴人で僕を知るかぎりでは、山口誓子、中村草田男、水原秋桜子、加藤楸邨などかつて人間探究派と呼ばれた伴人たち、後の石田波郷もこれに入ると思う。

この考え方は、当然に短歌にもあり、茂吉と佐太郎が双璧である。佐太郎のいわゆる主客均衡は、仏教思想における「無我」や西田の「主客未分の真実在」に相通うものであることは間違いない。

さてさて、拙題は主客均衡しているのか定かでない。

去るものをつくづく惜しと法師蟬

洒落つ気のない僕に珍しい一句が、小題の作だ。これでは駄洒落と言われても仕方がないかもしれない。

ツクツクホウシは、蝉のなかでも鳴き方に断然味があつて、しかも情緒ある声だ。この蝉が盛んに鳴くようになると空が澄んできて、夏の過ぎた感じがいよいよよつよくなる。

それでも、季の移ろいに伴う一抹の寂しさのなかにも、鳴き方が面白いので少しの救いがある。僕はその鳴き声を、

「つくづく惜し」

と鳴いているのだと擬声的に言つた。「去るもの」はむろん夏である。

幼い頃、蝉捕は楽しい遊びの一つだつた。蝉のなかには、五月頃鳴く松蝉もあるが、この蝉は全く捕りに行かなかつたので、どんな姿かしらない。

やはり、蝉捕はいいいい蝉からだ。いいいい蝉にはほとほと感心させられる。梅雨が明けるまでは絶対にといつていいいほど鳴かないからだ。この蝉の声を聞くと、

「梅雨が明けたんだなあ」

と思ひ、嬉しくなつた。その時分になると、小学校では学期末の部落会というのがあつて、

概ね小字単位の各部落ごとに全校生徒が分かれて集まる。そこで夏休み中の注意事項など、特に川のどの場所で水泳をするかとか、朝の体操の場所となる各家の輪番などを決める。

いよいよ夏休みが始まると、みんな先を争うようにして泳ぎ場へ急ぐ。先着順に自分の一夏占有する石が決まるからだ。

泳ぎ疲れた時にはその上に寝ころんで体を温めたり、周りに小さな池を作つて補つた魚を生

かしたりする。僕たちの泳ぎ場だった払橋の上流にはドンコや二ナスイ、八エヤドロバエ、エテク口やセドンなどが補れた。だから、大きな石の確保は一夏の楽しみを左右した。

自分の石を中心に展開する夏休みの楽しい思い出。

僕は水泳が好きで、一日に何時間も川で過ごした。川上の堰堤と川下の大きな石の間を、足が川底に着かないようにターンして、何回も何回も泳いだ。距離は片道十五メートルはあったので、かなりの運動量だった。

その頃までは、普通の、片手でタッチして全身を壁に寄せ両足で壁を蹴る方式のターンしかなかったのだが、当時、トンボガエリという新式のターンが流行り始め、子供たちに入気が出ていた。僕たちもそれを覚えようと、川の側面の岩盤に対つて何度となく回転の練習をした。鼻から水を吸い込むことはしよつちゅう、ときには回転時に頭を岩盤の突起にぶつけ、危うく気絶しそうになったこともあった。

蝉補は水泳が終つてからというのが常だった。仕掛作りが大変だ。

山に竹を切りに行き、竹竿を作る。竿の先の穴に針金や割竹を細く削ったヒゴを掌ほどの輪になるよう差し込み固定する。この、輪の部分が肝心だ。当時工バと呼んでいたクモの巣を巻き付け粘性の網を作った。

工バ探しはなかなか大変で、隣近所の便所の裏から谷川の上流の藪の中まで、それはそれは汗だくになつて駆けずり回つた。

粘さはでかいクモのほど強く、ときにオニヤンマをくつつけているエバなどは最高だった。いよいよ仕掛ができる、勇んで近くの御弘法様の小堂や山神社の境内へ出かけて、蝉を捕った。

別府のわが家の神棚に一枚の板片をいまも大切に保管している。昭和六十二年に山神社を近くの信徒が修復した時に、偶然にも僕の書いた落書を見つけ届けてくれたものだ。

板片には、

「昭和四十三年八月三十日、弘さんといっしょに来た、静かだナア。田辺 井」と書かれていた。僕は郷里の人たちの親切にたく感動し、わが家のまさに御神体とした。落書をした時、秋蝉が遠く鳴いていたのがいまでも鮮明である。

葛咲いて川に遠のく思ひかな

子供の頃、夏の間じゅうは朝から夕方まで川で遊びどおしだった。そんな僕だから川にはいまでも言葉では言い尽せない愛着がある。その愛着は、夏が終りに近づく頃寂しさ変わる。山に路傍に葛の花が目につくようになる頃、僕は季節の移ろいに従うように川遊びをやめ、川を離れた。道や神社に遊び場を変えた。幼心にふつと秋の気配を感じ、それまで自分の心のほとんどを占めていた川音がたちまちに

よそよそしく聞こえ始めて、寂しさを感じたものだ。
いまでも、その頃の習性が残っていて、葛の花を見ると何となくもの寂しくなる。
川に遠のく思い、などと言つても他人にわかるはずもないだろう。けれど、この感情は僕にとつては大切なもので、こんなフレーズでも形象化しておきたかつた。

寝転べば嬰の世界あり法師蟬

一月に生れた葉菜子はすくすくと成長し、秋口には這々ができるまでになつた。彼女はいろんな仕事、いろんな表情を見せてくれるので、一緒に居るだけで時間を忘れた。
ある日、居間で彼女と遊んでいたのだが、たまたま彼女の横に寝転んだその時、何だか別世界に入り込んだような感覚にとらわれた。彼女と同じ視野の世界だつた。
テーブルも椅子も、テレビも窓もみんな高く、ほとんど葉菜子にとつては未知の世界だ。彼女は畳の上というさながら二次元の世界に動くのだから。
でも、一方で彼女の眼がとらえるこの狭い居間は広々とした大地のように映っているのかもしれない。そんな空想も広がる。
ひととき僕のかいま見た幼子の世界。それは二種の意識が交錯し、空想と現実の融け合うような不思議な空間だつた。

外では、短い季節を惜しむように、ツクツクボウシがしきりに鳴いていた。

縁側に何見る父や草雲雀

父の孝臣は、昭和三年に国東半島の北東部に位置する国見町の小熊毛に生れた。小熊毛は海に面した村で、狭い平地を取り囲む山のいたるところに蜜柑の段々畑が拓かれています。

祖父の吉武勝と祖母のスナヲの次男として生れた父は、戦前戦後の貧しくて食べる事が最も優先の時代に育つたためか、軍属として勤めていた小倉工廠から二十歳そこで帰郷して間もなく、両子で農業を営んでいた田辺家の養子となり、母サエ子との間に僕を含め三人の子を儲けた。父の思い出といえ、僕たちが小学生の頃自ら削った鉛筆を手に持たせ勉強を教えてくれたこと、その後養子の境遇に落胆してか酒をあおるようになり、わが家に一時危機機をもたらした事、家族の必死の訴えで飲酒を断ち兄や僕の結婚式では父親としての立派な挨拶をしてくれたことなどだ。

父方の血筋には、文学や芸術に熱中する性向がつよく出ている。祖父の弟にあたる吉武好孝（一九一〇—一九八二）は、東北帝大で英米文学を学んだ後、特に文体論や米国の詩人ホイットマンの研究をしながら、千葉や東京都内の大学で教鞭をとった。その傍ら、俳号を「一柿」と称し、俳誌「馬酔木」に投句もしていた。その作に、

鷺の来て庭の明るさ茂吉の忌

萵苣の香やふるさと遠き海の外

菜の花や千倉の海に波高く

流星に心ときめく船の上へ渡米の氷川丸船上にて

キヤムデンに眠る詩人や秋の果て

などがある。

祖父の勝は、農業の傍らで一時期、華道の師範をしていたそうだが、また、祖母の実父にあたる鈴木豊溪（本名・専二郎）は南画家で、地元の国東地域にかなりの遺作をとどめている。両子の僕の生家に遺している春夏秋冬一揃いの襖絵は、生家新築の折、十日ほど泊り込んでお祝いのため画き上げたとのことだ。豊溪はまた、地方俳壇の選者をしていたとも南画家名簿に記録されていて、俳号を「花竹」といったとのことだが、作品を見たことはない。豊溪の子も南画を少しくし、「豊洋」と称していた。

そんな血筋からか、父も若い頃俳句をやっていて、俳号を「風信子」と呼んでいた。師事したのは、別府市で俳誌・紫苑を主宰しておられた小池森閑氏だ。

森閑氏については、数年前、ご本人の息女にあたる方から一冊の貴重な句集をお借りし目を通したことがあるが、本格的な俳人で、全国的に有名な句に、
天の原ただ名月と太白と

がある。この句は、同時代の有力俳人だった松本たかし氏が激賞したという句で、いまも別府市内の朝見神社の境内に句碑が建っている。

そんな父の俳号を勝手に横取りしたのが僕だ。だから、僕の俳号の「風信子」は親子二代にわたるもので、優に半世紀は過ぎていく。

父はときに自信作の、

乳牛の背なる白地に蝶の影

を誇らしく聞かせてくれたものだ。いつの頃だったろうか。酒を断って問もない父に、

「俳句をまた一緒にやらんかえ」

と勧めたことがある。その時は一時やる気が出たらしく、

この秋ぞ四季の詩心に揺すぶられ

龍胆の道延々と苦死の夢

これらの二句を葉書に書いて送ってきた。いま考えれば、第二句の内容から推測できるように、父の詩的境涯はすでにそのエネルギーの涸れ尽した状態にあったのだろう。

その後相変わらず父は俳句を作っている様子もなく、年を追うごとに無口になり年齢よりもよけいに老いてしまった。

小題の背景には、そんな父の老いに同情した感情があつた。

たまたま故里に帰省した日、父は草雲雀の声のする縁側で黙って日向ぼっこをしていた。僕

は、嫌だった農業に従事したまま老いた父の背中に、希望と挫折の昭和を見た気がした。

雷雲の襲よ地球も天体か

地球が天体であることは言うまでもないが、僕たちは普段、生活に追われてそんなことは眼中にない。

生活に直接関わりないことや、未来に馳せる夢など全く意識外に置くのが大人の習性なのだろう。

ある時、黒々として深い襲を刻んだ雷雲をまのあたりにし、なぜか自分の踏んで立っている地球のことに思いが及んだ。

「ああ、地球もやはり天体なんだ」

と不思議な安堵感を覚えた。その時なぜそんなことを思ったのか、よくわからない。

地球が宇宙の一部だという認識だから、自分は、大きな宇宙の中に生かされている一つの存在にすぎないのだ。との、自己の存在性を自覚した安らかな感慨だったかもしれない。

人間は、宇宙飛行士以外は地球を客観することなど到底ないのだから、こんな感情を抱くなど稀であって当然だ。

でも、ときとして、赤く映えながら海に沈んでいく太陽を見た時など、そのさまに、

「自分のいる地球もあんな物体なのか」と、客観的に思ったことが過去にもあった。この日の感情は、必ずしも理屈におさまらない稀な体験だろうといまでも不思議に思っているし、幸運だったとも感じている。

土の香の持論さておきとろろ飯

山芋のとろろ汁が好物で、子供の頃はそれがありさえすれば、どんぶり茶碗に三、四杯はか

とろろ汁を作るとき、都会の人は山芋の皮が擦り剥けるくらいに上品に洗うと聞くけれど、僕の場合は皮はもちろんのこと、少し土が付着しているくらいがいいという気持で洗う。土の香が落ちないかと心配するのと、山芋を育んだ土がありがたくて少しばかりその土を自己に同化させたい気持が働くからだ。

いつも故里で掘った芋を播る時、兄と大袈裟な持論を交わす。

「この日もそうだった。芋を播りながら兄と山芋談義をしていたのだったが、ふと、
「そげないつもんしょうもねえ持論な脇に置いちよいち、早うこん旨そうなとろろ汁を飯にか
けち食びようじゃねえかえ」

と、若干の洒落つ気の混じつた感情が湧いた。

僕の山芋好きは、近所の人たちに知れわたつていて、帰省したのを知ってわざわざ山芋を届けてくれた人がいたほどだ。

山芋というと、久保殿山のことが真つ先に頭に浮かんでくる。この山での思い出は数かぎりなく、いまでも秋になると一度は行つて山芋を掘ることがあるくらいだ。

山芋を掘ることも目的には相違ないが、山の木々を吹く風の音を聞くのが楽しい。

風の音のほか何の生活音もない寂寥のなかに身を置く時、時の過ぎゆきを感じるのと同時に、組織人になつて以来、自分は何と心が汚れてしまつたのか。

と、そんな自省の心に戻る。風の音にはそれを許してくれる優しさを感じるのだ。

とろろ汁には、僕の生活体験がこもっている。だから、もはや決して切り離すことのできない精神的支柱だ。

日の当たる菊の大輪身を正す

生れてこのかた「賞」と名の付くものには縁遠い者だ。

小学生の頃、運動会では「逆さまにしたら一等賞」だつたし、習字では金賞を取れずじまいだつた。

昭和五十二年頃、心身の鍛練のためにと八年間ほど熱中したゴルフも、ニアピン賞やドラコン賞はおろか、ブービー賞にも預かった記憶がない。

ましてや俳句や短歌にはお寒いかぎりだ。いまでは、詠草を出した瞬間に緊張してしまい、一転、反動からか自分の作品への拘りまで捨ててしまうほどになった。

そんな中で、小題の作だけは第一席かに預かった数少ない受賞作として思い出深い。

昭和六十一年、中津市の薦神社の大会において、俳誌・馬酔木や沖の同人として活躍されていた地元の有力俳人、江淵雲庭さんが推してくれたものだ。

僕も一時俳誌・沖に所属していたので、雲庭さんの主宰する中津の句会に何度か出たことがあるのだが、雲庭さんはなかなかユーモラスなおおらかな俳人だった。

当時の句会には、地元で製菓の老舗を営む殿畑ただしさんをはじめ、医師で現市長の実父にあたる鈴木菊夫さん、県の教育委員をされていた医師の田口舜さんや同じく医師で病院経営者の神崎正孝さん、また印刷業を営む川原田昭夫さんや雲庭さんのご子息の江淵溪亭さんらが参加していて、なかなか真剣に俳論をたたかわせていた。

そんな雰囲気のほか、指導者の雲庭さんは飄々としていて屈託なく、「この句をどう思いますか」と訊くと、

「うん、佳くもないが、と言つて悪くもない、悪いところもそんなに見あたらないし、うん：

まあ、そんなとこかな」

などと応えて、大変伸びやかな雰囲気を身につけていられたと、印象に残っている。この評を聞いて、やはりどこかに推敲すべき部分があるんだらうと、ほんのりとした刺激を受けたものだ。そんな雲庭さんを尊敬していたのだつたが、思うところがあつてその句会をすぐに退会してしまつた。その二年後の昭和六十三年に雲庭さんは他界された。

僕はこれからも雲庭さんのことを、唯一と言つていい賞を与えてくれた俳人、というよりも古い風格を保つていた本格的な俳人として忘れることはないつもりだ。

雲庭さんの遺句集「山居」より僕の好きな五句を紹介し、ご冥福を祈りたい。

山居（抄）五句 雲庭

山田植ゑいづこより来し人々ぞ

黄落のまぼろしと過ぐ山女魚群

暮れてなほ櫓組む人語雪に洩る

春光を大きく呑みて鯉の口

落ち栗の充実おのが光もち

第
四
章

形
な
き
侵
食

実紫三十路の兄の山暮し

兄は、いまは実家を継いで農林業を営む傍ら椎茸の中間取扱業におさまっているが、もともとはなかなかの熱血漢、というより夢大ぎ青年だった。

高校生の頃はグループサウンズやフォークソングに熱中し、僕と同様拙いながらもギターを弾き、作詞や作曲の真似事もしていた。

兄がいつも大事にしていたフォークソングの詞の一節がある。

悲しい時にや 悲しみなさい

気にすることじゃ ありませぬ

あなたの大事な いのちに

かかわることじゃ あるまいし (以上、表記不詳)

そんな兄だったが、高校を出てすぐに上京した。何でも作曲家を目指すとのこと、そのあまりにも突拍子もない言葉に、僕は啞然とするのみだった。

かく言う僕も、その後自ら進学を断ち福山市内の製鉄所に就職することになるのだが。

さて、兄は東京では何でも三木鳥郎の事務所とかで、自分の作った譜面のいくつかを見せ面接を受けたそうだが、

「もう少し勉強するように」

と体よく弟子入りを断られ、それでも諦めず二年間ほど通信の作曲講座で学びながら、広告代理店の仕事を都内でしていた。

僕が製鉄所を約三箇月で辞めて田舎に帰り浪人生活に入っていた昭和四十五年の歳晩の頃、兄も突然東京から戻ってきて、三箇月余り兄弟ともに両子の親元に居候し、またもや両親を困らせた。

その後、兄は県内の椎茸農協に就職し、それでもなお作曲やレタリングの勉強をしていた。一方、僕の方は辛うじて大学に受かり、卒業後サラリーマンとして再スタートしたのだが、一時、大分市内の南太平寺のアパートに兄とともに住んだことがある。

僕たちふたりの年子の兄弟は、自由奔放というか、わがまま勝手の青春を歩み、相当に親に迷惑をかけてきたのである。

ところが人生は面白いもので、年月が経てばそれ相応に成長し、いまはふたりとも落ち着いた状況にある。僕は短歌に夢中だし、兄も田舎で「れんけい俳句会」なるものを結成して、地道な文芸活動に取り組んでいる。

かれこれ十年余り前の昭和六十一年の秋、兄とふたりで久保殿山へ山芋掘に行ったことがあった。帰りしなに、少し下った所に車を停められるちよつとした平地があるので、その端でいつものように一服した。ふと目をやると、目の前に色鮮やかに熟れた紫式部の実が夕づく日差

に輝いていた。僕は触発されたかのように、すっかり田舎暮しの身についた兄の風貌に、

「ああ、お互いにもう三十路なのか」と、ふたりの青春の紆余曲折を思い起こした。

その日からさらに年月が経って、いまは兄弟ともに五十歳という大台が迫ってきた。僕はここに、兄のこれからの活躍と故里に着実に成長しつつある「れんけい俳句会」の発展を願い、兄の意欲作五句を記して激励する。

作品五句

博充

蜘蛛の囿のなかの西空熟しけり

黒鯛釣このまま漕げば亡命す

春の風邪海底めける山河あり

北斎の絵に飛び込みて波乗りす

青メロン木星の瑕このあたり

冬の大地に引かれて重く日が昇る

冬の太陽は、地球と相対的に南下しているので日差が弱く、徐に昇る感じがする。そのことをある朝ふと、

「冬の大地に引かれていようだ」

と感じた。弱々しい冬の太陽が荒涼と大地を照らしながら昇る時、何とも言いようのない寂寥感が湧く。

そんな時、哲学において論じられる自己と環境の呼応関係はこんな身近にも見られるのだなと思ったりする。石川県の宇ノ気での哲学セミナーに出たりして以来、すっかり西田かぶれになっているのかもしれない。

自と他、あるいは自己と社会、表現は違ってもみんな同じことだろう。

統一される側の自然からみれば、冬という気象が人に不自由な生活を強い、人は心理的に寂しい傾向の気分にはせられるし、そんな心理に行動も狭められていく。つまり、自然が人間を制約、限定するのだ。

ひるがえって、統一する側の人からみれば、自由な意志において対象である自然を感受したり、ときに手を加え改造したりする。人が自然を制約、限定することだ。

冬の太陽を「大地に引かれて重く昇る」とみるのは、僕の自由な意志による一つの限定だと言っているだろう。

ただの判断、ただの感受は限定とは言えないのではないかと、人がいるかもしれないが、それは限定を物理的にしかみない既成観念によるもので、感受自体が精神の作用でもまた身体特に脳の作用でもあることは明らかで、限定と何ら区別されるものではないはずだ。

この世界では、どこにおいてもどんな時においても、必ず主客の関係がつきまとう。そしてそれらの相互限定のなかに人は生き、生かされているのだと思う。

宗教において、

「生かされているのだということを見出し、神に感謝しなさい」

と教えるのも、まさに相互限定の真面目を理解し、おのれの独断で物事すべてに決着がつかないことをいつも忘れないように生きなさい、との教えにほかならないと思う。段々年をとってきた所為か、自力から他力へと思いの傾くのを感じる此の頃だ。

白鳥の歩む滑稽を哀しみぬ

昭和六十二年の早春、家族で別府市の志高湖畔に遊んだ。そこには、渡りをやめて湖に居ついた白鳥がかなりの数居て、泳いだり、渚を歩んで餌をあさったりしていた。

白鳥には、ありきたりの観念で、飛んでいる時の美しさをイメージしていたのだが、この白鳥は僕たちに少しの警戒心も示さず、餌乞いのため近づいてくる。

そんな姿に親近感を覚えたのも事実だが、一面、渚を歩いているさまは何とも滑稽で、人間をあてにして生きていくしかない白鳥にあわれを感じた。

人間たちの生き方をみても、これに共通した一面があるだろうとも思う。

日々の生活に汲々として、しかつめらしい顔をしている人間たち。誰も彼も、白鳥の眼からすればきつと同類で、あわれむべき姿であるに違いない。
白鳥も滑稽なら人間も滑稽、さればこそともに愛し愛されるべき存在ではないか。

里の春貧乏神は去りたまへ

僕の郷里の両子は国東半島のほぼ中央、両子山麓の静かな山里だ。

春になると、川原やいたるところに菜の花が咲きあふれる長閑な山村だが、それはかつて菜種油を採取していた名残で、貧しいながらも嘗々と農業に生きてきた人々の里だ。

いまではすっかり過疎化がすすんで、生家の近くにはお婆さん一人のいわゆる独居老人世帯が数戸もあるといった状況になった。

経済現象という何とも得体のしれない力が、この里から次第に若者を都会へと流出させ、いつの間にかさびれてしまった。

かく言う僕も故里を出てほぼ三十年だから、正義漢ぶつて言える立場にはないけれど、今日まで物質文明において繁栄を極めてきたわが国を、裏面から象徴する一つに、この里は挙げられると言つてもいい。

若者はなぜ、何を求めて村を出ていくのか。

その答は、いまでも明確に見いだされていない。当事者の僕にさえ明言できないのだ。
ある時、そんな心情を背景に、

「貧乏神は去りたまへ」

と祈った。この「貧乏神」は決して村に暮らす人たちをさげすむものではない。僕自身でさえいまだに心のなかで「流浪する両子の民」だと思つていくくらいだから。

貧乏神と抽象したのは、冒頭に言つた「何とも得体のしれない力」にほかならない。

僕はこれからも田舎には帰省するだろう。でも、決して以前のように、
「田舎はいいなあ」

と軽々には言わないつもりだ。その言葉は田舎に住む人たちに対し礼節を欠くものだと思うからだ。

普段は都会で、何一つ不自由なく生活し、自分たちの都合のみでたまに田舎に帰り、田舎を褒める。このことは、そこに一生を過ごす人たちに対して不遜だと思う。

かつて次のような歌を詠んだ。

川原の菜の花は黄にあふれ咲き故里はいつも水の音する

(菜花爛漫所収)

この歌は故里讃歌でもあるのだが、その根底には貧乏神の句と同じような故里遠望の深い思いを込めたつもりだ。

蝌蚪の群なかへ中へと鬩ぎあひ

齋藤茂吉の、

かへるこは水のもなかに生まれいでかなしきかなや浅岸に寄る（あらたま所収）

は、僕の好きな歌の一つだ。この歌には生あるものを尊ぶ人の真心があると、いまも尊敬している。

お玉杓子と言えば、いつもあの可愛いがたとともに、かつて身近にあった懐しい泥の匂が甦る。だから、この歌を読むと何にも汚れることなくただ純粹に自然のなかに溶け込んで遊んでいた頃のことを思い出させてくれるのである。

昭和六十二年の春、故里に帰省したが、田圃の溝のなかに久しぶりにこの懐しい生き物に出逢った。

お玉杓子はそれはそれはひしめきあっていて、一尾一尾は群の中心へ進もうとあがいてみえた、なぜだろう。

彼らには自分の身を守ろうとする意志がすでにあつて、それが最も安全な群の中心へと向かわせるのか。

小題中「なかへ中へと鬩ぎあひ」は、子規の歌の「浅岸に寄る」に追和した表現でもある。

ともかく、命は尊い。

此の頃僕は、お玉杓子のように一所懸命に生きようと思うことが多い。

梟の玩具逆さま目借時

長閑な春の日の午後、東莊園のわが家の居間は全く静かだ。一歳をようやく過ぎた葉菜子は遊びくたびれてしまつて、信子と二階に上り昼寝しているようだ。

さつきまで葉菜子の使つて遊んでいた梟のおもちや逆さまに転がつて、居間の畳の上に放られてゐる。

玩具の滑稽な放られ方は、いかに彼女が快活であるか、わが家の日常が何とてんでこまいであるか、ということを実に表現している。

目借時なんて、むかしの人はよく言つたものだ。蛙に目を奪われるから眠たくなるとは、何と突拍子もない発想だらうか。

それにしても、本当に眠たくてしょうがない。うつらうつらしながら僕は、幸せとは存外こんなものかもしれないな、などと思つた。

投げ苗を泥に滑らしつつ取りぬ

農家で育つた僕だが、田植の記憶もいまでは遙かなものになつてしまつた。田植といつても単なる手伝い程度の思い出しにすぎない。それでも、何となく心の踊るような爽快さと懐しい泥の匂などをいまでも夢に見るくらいだ。

昭和三十五年頃だつたらうか。田舎にもまだ活気があつて、田植などの農作業は「まくり」というご近所同志の労働の等量交換によりお互いを支えあつていた。

幼い僕たちはあまり力になれないとはいへ、手伝いに駆りだされて、代田のなかで苗束を運んだり、塗りたてのまだ軟らかい畦に指で穴をあけ、小豆や大豆の種を大人の指示するままに蒔いたものだ。

その頃は耕運機も田植機もなかつた。牛の引く鋤で起こしトンボで均した代田だつたが、赤白の玉が等間隔についた紐を両方から引つ張つて、人海戦術で玉の位置を目安に苗を植えていくのである。

おじさんたちが勢いよく放る苗を、滑らすように泥の上に受けとめて、それを苗の手持の少なくなつた人の前に放つてあげる。そんなかたちで効率的に田植をすすめていた。

手伝いの僕たちの本当の狙いは小昼だつた。国東地方ではおこびれと呼んでいた。

「そろそろみんな、おこびれにしようえ」と母が声を発すると、田植の作業は一時中断し、全員田圃の脇の草原に集まつてきて腰を下ろす。

人間は幼い頃は本能の世界に生きていて、生来の残酷さを示すのだ。
とでもいうのだろうか。ともかく僕は、悲しいことながら弱肉強食の掟の中にあるこの現実
を、そして現実における命の大切さを葉菜子に早く独力で理解してほしい、傍らでそんなこと
を祈った。

幼子の欲はぐくまる半夏生

俳句の季語集である歳時記によると、半夏生とは「夏至から十一日目の日で、七月二日頃にあたる。この頃には半夏生という毒草が生ずるのでこの名があるともいう」とある。

一歳半になつた葉菜子は、意思表示がはつきりしてきて、そのことが嬉しくもありまた可哀相にも思えるという、実に複雑な気持にさせられるのだつた。

それは、葉菜子に段々欲望が芽生え、仏教にいうまさに求不得苦の世界へと足を踏み入れていくのを切実に感じるからだつた。

欲望は確かに人間が生きるための根源の力ではある。けれども、欲望をめぐって人が一生苦しむ多き人生を送ることもまた、否定できない事実だからだ。

そんな意味と葉菜子への気持を込めて「欲はぐくまる」と言つた。

「育む」とは、普通は「いづくし育てる」といういい意味に使われる言葉なので、「欲はぐくまる」ではちぐはぐに感じる人もいることだろう。

しかし、僕はどうしても「はぐくまる」を使いたかつた。成長しつつかつ四苦八苦の世界へと落ちていくのが、まぎれもない真実だから。半夏生には、歳時記にもあるように毒草のイメージがあり、幼子のもつ欲望のイメージにも

重なるだろう。ともあれ、この時、彼女に對する人生讃歌を詠みたいと心に念じつつ小題の作は生れた。

「どうかこのまま素直に成長して、いつかこうした世の道理も理解しなさい。願わくは、現実に失望しないこと。老荘の教えに《知足安分》がある。自ら苦を招き入れることのないよう、自分の身の上にあつた人生を過ごしてほしい」と、そんなことを僕は考えていた。

もじずりの巻けどとどかぬ空の青

もじずりとはねじ花のことで、初夏の頃から田圃の畦道や芝生などにも可憐な淡紅の花を咲かせる。

花茎の上部に小花片の群が抜れながら、上へと巻き上がるように咲く珍しい花で、この季節の陽気な雰囲気とも相俟つて清々しさを感ぜさせてくれる。

郷里の両子には、小字のサンナイから下の方、僕の生家のあるハライを通つてヨコミネ、トクダイの方へと通じている一本の農業用水路があつて、これに沿つて旧道が付いている。

もともとの道は、杵築藩主の松平侯が両子寺に参詣する際に通つたという伝えがあり、村の主要な街道だつたらしい。

ちなみに、この地区の庄屋元はというとクダイの林家が代々継いでいた。

この街道の沿道にある僕の生家は、殿様一行の立ち寄り休憩所だったとのことで、古くは槍掛などが壁に取り付けられて残っていたそう。

だが、兄や僕が生れたのは、わが家が一時両子川を隔てた向いの川端の土地に移転していた時の屋敷で、万屋を農業と兼業して営んでいたそう。

そこには、いまは家もなく、敷地の大方は県道の拡幅工事に提供してしまつて、古い杉の木二本を残すのみとなつた。

小学校に通つていたある日の朝、ずっと廃屋となつていたわが旧家の終焉をこの目でつぶさに見た。風もないのに、

「ギリギリギリ、バターン」と、すさまじい音を立てて倒れた。そのさまをいまも僕は忘れることができない。

また街道の話に戻るけれど、この道を一里ほど下つた富永という所に、わが国の自然哲学の草分ともいうべき三浦梅園の旧宅が、享保時代の趣のままいまも残つている。

梅園の為人をよく言い当てるエピソードがいくつもある。一つは梅園が二十五歳の頃、森藩主の久留米米通侯から出仕の要請を受けた時の話だ。

梅園はもともと出仕などをするつもりはなかつたらしく、この要請に対し、
「朝ニシ溪ノ水ヲ汲ミ、夕ニシ山ノ雲ニ臥ス。晋ニ於テ力足レリ」

と返答し、やんわりと断ったそうだ。文中の「シ溪」は両子川、「シ山」はもちろん両子山のことだ。「シ」と表記したのは梅園の造った字をあてているからで、「子（ゲツ）」と「子（シ）」の二字を横並べにして「双子」の意に用いている。

もう一つのエピソードは、杵築藩主の松平親賢侯が梅園を引見しようとした時のことだ。この時は単刀直入に、

「虚誉ヲ以ツテ実礼ヲ受クルハ吾ガ志ニ非ズ」

と返答し、しばらく城下に出ることをしなかつたそうだ。これらから察するに、梅園は知足安分ということに徹した実践哲学者であつたこと、また故郷の山河を愛した一人の詩人であつたとも思う。梅園の漢詩の中に「上二子山」というのがあるが、これも自然を愛した梅園の素顔をかいま見させる貴重な証と言えよう。

いずれにせよ、梅園はこの道を何度も歩いたことは確かだ。小題中のもじりには、昭和六十二年の初夏の頃、帰省してたまたまこの道の傍らに咲いているのを見とめたものだ。その日は快晴で暖かつた。淡紅の小花は、どれも青空に向かつて花茎を巻き上つていた。

両子に帰るたび僕がよく歩くこの道は、いまでこそほとんど通る人がないものの、子供の頃の思い出の数々を生んでくれた道だ。それに両子の里の歴史も秘めた道でもあり、決して忘れることはない。

ふるさとに空還る日の百日紅

両子の初夏は清々しい季節だ。東京勤務から昭和六十一年に帰任して一年が経ち、よく両子に帰省していたが、この日は生家の庭に百日紅の花が咲きはじめていて、空の青に吸い込まれるように輝いていた。

僕は新鮮な空気と澄んだ青空を満喫しながら、しばらくその花に見とれていたのだが、突然、既視感のような思いがよぎった。

「この青空は、かつて見た青空とどこか同じだ。もしや空にも循環があつて、かつての空がいま還つてきたのかもしれない。きつとそうだろう」

という感じの、何とも言えずロマンに満ちた不思議な感覚だった。

「空還る日」とは、そんな感情をどうにか表現しようと苦心した賜で、俳句という十七音で言い切るには少々無理な気がしないでもない。だが、僕の内面世界にそんな感受が生れはじめたのは自分にとつて喜ぶべきことだから、稚拙でも敢えて記録に残した。

思ひ出の糸つながらぬ蝉時雨

鳴きしきる蝉の声のなかにわが身を置く時、いつも生家の座敷のことが甦ってくる。

生家の母屋の方の各部屋は、竈や流しやつるべ井戸のある土間の《庭》、食事や団欒をする《居の間》二室、来客をもてなしたり口上を述べあつたりする《玄関の間》、地区の行事であるお籠もりや家での慶弔、ときには映画や浪曲会や来客の宿泊などにも使つた《座敷》と《奥座敷》とがあり、このほかに、布団や衣類などをしまふ《納戸》と父母の寝室や子供部屋にも使つた通称《二階》の二室があつた。こんな田舎屋敷だから数多くの思い出は、その部屋ごとに積み重ねられてきた。

《奥座敷》の手前の、《座敷》にはお縁が付けられていて、一年のうち春から秋にかけてはいつも障子戸を開けつ広げにしていた。

そこは、家人や隣近所の人たちの団欒の場でありつづけた場所だ。夏、涼しい風の吹き通るこの部屋はすこぶる快適で、人が集えばすぐに楽しい語らいが始まり、また蝉の声を聞きながら午睡したり、夕涼みや兜虫などの灯虫を夜に捕える場所でもあつた。

そんな体験からか、蝉の声にはいつからともなく懐しさを呼び起こす響があると思うようになった。

話を少し前に進めたい。

哲学者の西田幾多郎は、「非連続の連続」や「永遠の今」などを理論構築の過程で独自の術語として生み出し使用しているが、その意味を身近なことにあてはめて考える時、小題の作の

なかの感情も一面で相通じたものである。うとい気がする。すなわち、僕の脳裡に刻まれている過去の感情は、当時は《當時の今》の僕《の感情だったのだ。連続する時の流のなかで、瞬間瞬間はいわば心の統一された焦点であり、自己のダーザインであり、「今」だった。「今」は非連続で、つまりその時々独立して、自己の存在を確かなものとする、とも言える。

だが、反面でそれらの点として現れる「今」は、瞬間的にそれを否定して、次の瞬間へと移る。そのようにして、人は連続的に成長していくものだと思う。

少々ややこしい言い方になるけれど、今の僕は当時の僕を抱擁しているのだから、このことが西田の理論「非連続の連続」の主旨に近いものではないかと考えている。

小題中「思ひ出の糸」の糸は、すなわち時の流を指している、

「今と『過去の今』とがどうしても脈絡よくつながらない」

との感受だが、実は「思ひ出の中の僕」は「作句當時の僕における過去の僕」だったのであり、糸はその意味からもつながっていた。そして「非連続の連続」となっていたのだ。

当時、そんなことまで考えていたわけではないが、それに近い感情だっただろうといまも思っている。

茅蝸の施身聞偈のひびきかな

ヒグラシの声の音色は、澄みきつていて美しく、もの悲しい響がある。秋蝉なので活動の間を限定されているためか、全身からしぼり出すような声で、しかもその音色に全生命を傾けているようだ。

僕の故里はさほど幅広くもない山間に長く伸びた村だったので、幼い頃から家に居ても神社に遊びに行つても、また川に居る時も、夕暮時分になるとよくヒグラシの合唱をきいた。だからヒグラシにはいまでも格別の愛着をもっている。

昭和六十二年の初秋の頃、家族ともども久しぶりに両子に帰省して、むかしよく遊んだ畦道を通つて川へ釣に出かけた。数年前に圃場整備を終えていたので畦道や田圃は大方がさま変りしていた。寂しい気持になりながら、かつての地形を思い出し思い出し川へと歩いたのだ。だが、川へ出るとかなりの部分がむかしの形をとどめていたので、ほっとした。

そこは、《イモイゼ》と呼んでいた所で、弘橋から下流の方へ数えて二つめの堰堤のある場所だ。イモイゼでは、堰堤の上流部の深みで八エヤドロバエが釣れたり、下流部だとドンコが釣れたりセドンが金突で突けたりした。

その日は下流部の浅瀬でドンコ釣をして遊んだ。そんなに釣れるというわけでもなかつたけ

れど、水の音を聞いたたり、浅瀬のなかを水に浸つて歩くだけでも楽しいので、時のたつのも忘れるほど夢中になつて遊んだ。

いつの間にか日も暮れかけて、水面に青暗い影が顕つようになつていたが、そんな時、真向いの山の方から一斉に鳴きしきるヒグラシの声が聞こえた。

その鳴き声はすさまじく、青暗い水面に反射して、僕の全身に増幅して響いた。その時、本で読んだことのある仏教説話を奇しくも思い出した。施身聞偈（せしんもんげ）に関する説話だ。

釈迦がまだ修行の身で雪山童子と呼ばれていた頃、仏法の守護神である帝釈天が羅刹という悪鬼に姿を変え、童子の求道の決心を試したという内容だ。「諸行無常、是生滅法」の二句を聞いて歓喜した童子は、その後、二句を聞き悟を開きたいと願ひ出て、ついに羅刹の餌食として自分の身を投げ与えたという話で、続きの二句「生滅々已、寂滅為樂」は諸行無常偈とも雪山偈とも言われているそうだ。施身聞偈とは文字どおり「身を施して偈を聞く」の意だ。その時のヒグラシの切実な声は、まさに真理に身を捧げている声に思えた。ヒグラシの声を聞いたたび、僕はいまでもその日のことを思い出す。

鬼灯へ両手差し出す蒙古斑

葉菜子が一歳半を過ぎた頃、よく両子に連れて帰った。両子では、彼女は庭に出て思う存分に遊び回った。

庭には小さな池があつて、コイやハエを入れてあり、周囲にはシャクナゲやザク口、アジサイやツツジといった木々のほか、草花ではエビネランにサフラン、それにムラサキケマンやミヤマキケマンやカタバミなども生えている。そのなかにホオズキもあつた。

八月になると、ホオズキは袋に包まれた丸い実が赤く熟れてきて、袋自体も朱に色づき秋らしい趣を与えてくれる。

熟れた実の甘酸っぱくて少し苦みのある中身を、針などで生り口の小さな穴からつついて取り出し、丸い皮のみになつたホオズキを口中に転がして鳴らしたものだ。

とりわけ、女の子たちはこれを鳴らすのが上手かつた。

「はなちゃん、そこにホオズキがあるよ。」

と指さしてやると、池に浸かつて夢中に遊んでいた裸んぼの葉菜子はすぐに関心を示して、その実を採ろうと近づいた。

何と稚い姿だろう、お尻のあたりの蒙古斑がとてもしららしい。

僕はそんなことを思いながら彼女の行動をみつめていた。

蒙古斑は、辞書によると「子供の尻などにある青いあざ。蒙古人種に多い」とあり、子の成長とともに消えるものだ。

僕は、蒙古斑に葉菜子の幼さと可憐さを感じるとともに、人種という宿命を生れながらに背負っている人間たちへの哀れを思つたのだつたが、さしあたり彼女が父親の郷里を幼い脳裡にかすかにでも刻んでくれるならばそれだけで十分だつた。

弓なりに日差を曲げて野分ふく

朝から野分が街じゆうに吹き荒れていた。突風はまさに野分らしく晴れているのにそこらじゆうをゴーゴーと音をたてて吹きまくつていた。

ふと、台風とは全く異質の陽性の野分を何とか一句にまとめたい、との意欲が湧いた。だから時間の経つのも忘れるほどにその様子を食い入った。明るく日が差しているのに、絶えず吹いている風。吹いているといつても音だけで、そこには明るい街があるだけだ。

その時、どこか知らない世界から突然響いてくるように、

「日差さえも曲がるほどにつよく、野分は吹いているのだ」
「直喩よりも暗喩でいこう」

と思つた。「野分ふく弓なりに日差曲ぐるごと」と直喩にならないこともないが、俳句は短いので、あまりに順当な言い回しは一句独立の求心力を保ち得ないと思えたからだ。それで、

「弓なりに日差を曲げて」の表現に落ちついた。

はたして、暗喩が成功しているかどうかは第三者に委ねるほかはない。別の観方、虚実の側面から検証してみよう。

小題の作は、上五および中七までの暗喩部分が虚つまり野分をいかに感じたか 受部分になつていて、これに対する実すなわち事実部分を結句が成している。 詩歌、とりわけ最短の韻文である俳句においては、作品の成否は虚実の均衡にかかっている

と思う。特に写生俳句を指すには、このことを念頭に置くべきだろう。 虚実の均衡によつて、例えばこの場合だと、実つまり「野分の吹いている事実」が無限の臨場感を得るとともに、それと相呼応して虚、すなわち感受した僕の命が無限の輝きを与えら

れるといつても過言ではない。 こうして、形象をもたない「僕の内なる生命の本体」は言葉に出てきて、一つの具体的な形

を得たものとして生かされるのだ。 俳句をいまだに第二芸術のように思っている人が多いのかもしれないが、作家たちは各人の

の努力次第で、俳句を自己の生命の本体を具現化する表現形式として活かすことができる。それこそ俳句の真骨頂だと思う。

第
五
章

悠
々
「
田
舎
人
」

山の土すこし掘り込みとろろ汁

山芋のことについて、いますこし付言したい。

僕は他の何よりも山芋が好きで、ほとんど毎年、秋から翌年の三月頃にかけて、自分で掘ったり買い求めたりして食べる。

山芋は、とろろ汁にして特に炊きたたのご飯にかけて食べるのがいい。また味付けの最もシンプルなのが好きで、芋をのぼすためのだし汁は乾椎茸とイリコの醤油だしを好む。

ただ、山芋がとびきり上質なもののときは、生醤油と水と簡易な調味料だけの方が、芋の香りと味がそこなわれることがない。

ふつくらと炊きあがったご飯に多くなく少なすぎない適量のとろろ汁をかけて食べる時、いつも、

「また一年、生きてこられてよかつたな」

などと大げさな感慨にひたる。それにしても、こんな好物をもっている僕は何と幸せ者なんだろう。

山芋を食べる時、僕の心にはさまざま思い出が甦る。子供の頃近所の友だちと、堀切や雑野、久保殿や安岐山、鳥屋迫など、あちらこちらの山へと出かけては山芋を掘った。合間にア

ケビや栗の実なども採った。山の中の日当たりのいい所で食べた粗末な醤油かけイリコ弁当の旨かったことや、久保殿の山で父と兄とともに日の暮れるまで掘ったこと等々、山芋をめぐる思い出は尽きない。

歳月が途方もなく過ぎてしまつたいま、あの頃一緒に山を駆けめぐつた友だちもそれぞれ大人になり、田舎から出て行つた。

僕もそのうちの一人だけれど、勇さん、土信さん、マー君に新ちゃん、弘さんや隆利ちゃんたちはみんな元気でいるだろうか。そんなことをとるる飯を食べながら思う。

山の土は心持ち、とろろ汁に播り込んでおきたい。そんな理の通らないような心情は、僕なりの土に対する感謝の気持だ。僕を育てくれた故里に対するささやかな真心だ。

ふらここに新顔一つ加はりぬ

昭和六十二年を迎え、葉菜子は二歳になつた。わが家の山手側にある大昌ビルのアパートの小公園に小さな砂場やブランコがあつて、そこでよく遊ぶようになった。

子供たちの楽しく遊ぶさまは、我々大人の目にも快くまた羨ましくも見える。さて、彼女はその公園に登場した新顔だつたのだが、見ると遠慮も気兼ねもしていない様子で、数人の仲間に受け入れられているようだ。僕にはそのことがまず一安心だつた。

人間は成長するにつれて、少しずつ行動範囲を広げていく。家のなかで家族からいたわられてばかりいた子が、少しばかり成長するとひとり庭に出て、泥遊びなどをしようになる。そして石や草や虫や風や木々や日差を知る。

やがて小社会である近所のグループへと参加していくと、初めて自分と仲間との関係や行動にあたつての序列、仲間としての行動の善し悪し、危険な行為の認識等々、遊びのなかからいろいろなことを学ぶことになる。

葉菜子はまさに、そんな仲間の一員としてデビューをしていた。

彼女のこととはほとんど信子まかせの僕、でも折りにふれ遠目にとめながら、僕なりのマイホーム主義を育みつつあった。

咲きそめし辛夷は騒ぎあるかたち

辛夷の真っ白な花があちこちに咲きほころぶ頃、春の到来を実感する。その時分はまだ外気に冷たさが残っているものの、体を締めつけるような力はすでになく、その弛緩の間隙を埋めるように真っ白で清廉な辛夷の花が咲きほころぶ。

辛夷の花は、葉に先んじてどの枝となくびっしりとつく。まるで自らが好季の到来に酔いしれているかのようだ。日がないちに春祭に燥いでいるようにもみえる。

寒い冬の間は、街路樹や路傍の草などみんな押し黙って寒さに耐えているのだが、そんな陰鬱を先ず破る役目をするのが梅や辛夷の花だと僕は思う。花たちが自ら沈黙を解禁しような明るさを感じるのだ。それは、ほかならぬ僕の心への春到来だと思ふ。

人は物に即して何かを感じ取る動物だ。花が美しいと感動する時は、西田のいうように僕自身花以外の何者でもない。花と一体のところ、僕が存在があるからだ。

そんなわけで、これからも自然に敬虔な態度で臨み、多くのことを学んでいきたいと思つて

灯の下に金魚日中のごと泳ぐ

初回の東京勤務の余韻も薄れつつあつた昭和六十二年の夏、わが家では金魚を飼い始めた。典子が近くの神社のお祭に子供たちを連れて行つた時、買つて歸つた。

金魚はすぐにわが家の生活に溶け込んで、思いがけない活力を与えてくれるようになった。でもその反面、憐れに思うこともある。こんな小魚まで品種改良をして家で飼うのは、人間の傲慢さが生み出した習慣の一つではないかという思いである。特に、狭い水槽のなかに泳ぐ金魚を見る時がそうだ。

僕たちが明々と電灯をつけてテレビなど見ながら夜更かしする時、金魚たちはその明るさを

昼と勘違いしてでもいるのか、まるで日中であるかのような軽快な泳ぎを見せてくれる。そんな時、人間のわがままに翻弄されて生きる者を憐れまずにはいられない。

この世の中には、人間の生活を中心に環境が作為され、それがためにあわれな宿命を負わされてる者たちの多いことか。

金魚もさることながら、犬や猫などにしてもそうだ。一見、人間と同化して生きているのだが、彼らとて鎖に繋がれたり部屋に閉じ込められたりする事なく、自由に生きたいはずだ。

飼うことが共生だとしても、またすべてが悲観すべきことではないにしても、人間たちがいま少しの自覚が必要だと思ふのである。ときに主人の勘気にふれた飼い犬が保健所送りとなつたり、どこかに平気で捨てられることのないように。

また、人間たちに食べられるために飼育されている禽獣の類は哀れの極みだ。食物連鎖は自然の理であるからやむを得ないにしても、当然のこととして人の意識に上ることさえなく食料として飼われ、あるいは捕獲される禽獣の何と多いことか。植物にしてもまた然り。

人間たちの横暴、飽食、娯楽等々の下に、多くの生き物の生命は支配されてある。

このことが、時には認識され、かつ最小限の倫理は保たれるよう願わずにはいられない。

最近のニユースのなかに、遺伝子操作によるクローン牛やクローン猿のことが報じられていた。人間たちの欲望が際限のないものだとするならば、いまにクローン人間が作られるのも時間の問題ではあるまいか。そうなつてくると、いよいよ世も末の感がする。

人はこの際、冷静な気持ちになって反省し、自然との関わり方について熟慮をすべきだろう。人が便利を追求した結果、わが国だけでも年間約一万人の人が交通事故死しているのをもみても、経済的な過度の商業化がもたらした世の中の「負の流れ」はいまや人間たちの生活を逆に脅かすところまで来ていると思わずにはいられない。金魚は、実に多くのことを語ってくれる。

日盛の渚すなほな吾である

社会に入ると否応なく組織に組み入れられ、物事を集団的、階層的に考えるよう訓練されていく。

特にわが国は「超管理型社会」であるためか、新しい発想をもつことがほとんどいっていいほど認められないのが現状だ。

「出る杭は打たれる」
のが常だ。

僕たちは、「自分らしく生きたい」と、「集団の持続が至上だ」との二つの磁極の狭間での葛藤を余儀なくされている。これをいい方向に打ち破る方策はないのか。

哲学者・西田幾多郎は、人間の存在の一面として「行為的直観」ということを見いだした。

それは、人間が自己をとりまく社会との関係においては、直観ということにより「今」が成り立ち、「今が成り立つ」ことを認識しているその認識主体がすなわち「自己」ということだ。少なくとも僕はそのように理解している。

このことは、存在の基底には直観があり、それが連続していくのが自己の存在の実相だということだ。

また「行為的」とは、人間は対象に対してただ感じたままではなく、感じたら次に「働きかけ」という段階が予定されるという意味合いもあるだろうし、直観そのものが自己の積極的意思をすでに内包している、あるいは厳密には、直観は自己による原初の行為そのものだ、ということも理解できよう。

いまここで敢えてこんなことを持ち出すのは、人の本来的な生き方というものは、社会の風潮にただ盲目的に従わされていくのではなく、そこにおいては必ず「西田の『行為的』」と言うように「自己の積極的かつ創造的な意思をもって行動すべきであると、このことを述べたかたからだ。

自分らしい生き方を求めず社会に流される一面は、往々にして誰にでもある。しかし、自らが本来的な生き方を放棄したからといって、それを他人にまで同調せしめるべきではない。ということだ。

わが国において、集团的ルールを偏重するあまり、全体主義的に個人の主体性の芽を摘み取っていく傾向がみられるのは、いま述べた最も原初のことについて個人個人が自覚することを怠ってきた結果ではないかと、此の頃思う。

さて、そろそろ小題の話に戻りたい。

前に言ったような社会における対立や同調のなかで、僕としても、ときに人の心を傷つけたり、本心では正しくないと思うことを、行きがかり上正当化して主張したこともあつたことを、先ず告白しておかなければならない。

僕はそんな心の有り様に、自ら嫌気をつのらせていた。昭和六十三年の夏、国東の末綱海岸に家族で出かけ、束の間の休日を楽しんだのだが、その時すっかり解放感と幸福感に満たされて、

「こんな気持ちこそが、自己の本来の心の状態なんだろう」と、ひとり思った。

自己の本来性を保つていくには、ときに大きな軋轢を生む。しかし、それを保ちたいという心は少なくとも見失わないようにしたい。なぜならば、それこそが生来の良心であるはずだから。

ずみき食ふ性懲りもなく田舎人

ずいきは「芋茎」と書くのだそうで、字のごとく里芋の茎、正しくは葉柄のことだ。幼い頃、母がみそ汁の具にしてくれたのがいまでは懐しい。食べる時の少し「えぐい」ような味に野性味があつて大変好きだ。

秋になると僕は思いついたようにずいきが食べたくなり、妻に要求する。食べながら、「自分は何と、こんなマイナーなものが好きなんだろう」と思つたりもする。

人はやはり幼い頃からの経験則みたいなものに縛られていて、その範疇でしか生きられないのか、などと思つてしまう。

母はあまり野菜を育てるのが上手いほうではない。だけど、ときに意外なものを収穫して、つつましいながらもわが家の食卓に旬の料理を提供してくれた。

ずいきも大根も、ときにはマクワや形の歪なキウリも、そしてナスもみんな美味しかった。僕はやはり根つからの田舎人だ。そして、性懲りもない田舎人であることをいまは誇りに思う。

たまたまサラリーマンになつて、ネクタイを締めて日々働いているけれど、田舎に育つたがゆえに知ることのできた空の青さや土の匂、水の音の爽やかさや雨の日の独特な部屋の静けさ等々、貴重な体験としていつまでも大切にしたいと思う。

これからも堂々と胸を張つて、「性懲りもない田舎人」でありつづけたい。

柿の秋農ほろぶ日遠からなくに

郷里の西武蔵は、両子山から両子、富永、恒清、糸永の四つの聚落を連ね、瀬戸内海に伸びている旧村だ。村の中央部には両子川が流れていて、流域は狭いながらもどかな水田地帯となっている。

春には芹や蕨、薇、独活などの山菜が豊富だし、夏には源氏螢の乱舞がみられ、田圃は蛙の合唱となる。そしてその時分は川には下流の海から鰻が遡上してくる。

秋になると、稲が豊かに稔り、農家の軒先には柿の実が赤く色づく。稲の収穫が終ると一面の刈田には稲架とこづみが並び立つ。この時期から、農家の人たちは山で自然薯を掘ったり椎茸の椀木にする木を伐つて組むなど、山仕事に精を出す。空気が澄んで青く、山の木々の色づく最も美しい季節だ。

冬は雪が二十センチから三十センチも積もる山里だった。だけど、いまは地球全体の温暖化現象の所為か、あまり雪が降らなくなった。

西武蔵は、いまでも万屋の商店がおおむね半里ごとにあつて合せて数軒、それに役場支所と農協と小学校があるくらいに僻村だ。ただ、この村も昨今は観光ブームの所為もあつてか、かなりの観光客が訪れるようになった。

かつて、役場支所から奥まった所に診療所があったのだが、廃止されていまはない。また、三浦梅園先生の旧宅の南側の高台にあった中学校も廃止されて安岐中学校に統合された。

村の人口もかなりあつた、両子の払という集落だけで二十人くらいの子供会が活動しているほどだつた。子供会では地区の神社の境内を清掃したり、ときには神社で芸能会などをしてお年寄の人たちに観せたりもした。夏休みともなると、川での水泳や朝の体操なども活発で、みんないろいろな遊びを知つていて退屈することがなかつた。

先ず団栗の穴入れがある。地面に適当な間隔に穴を掘つて、ホームの穴からスタートして順番に穴に団栗を指ではじき入れていくゲームだ。一周すると、相手の団栗にぶつけてそれを獲得する権利を得た。上手い子は団栗をたくさん稼いでズボンのポケットいっぱいになつた戦利品を自慢した。

ケン・ケン・パールの地面の区画をタマを入れて進めながら往復する石蹴りも面白かつた。ケンの所は片脚、パールの所は両脚で進む。最初の往復が終わると陣地の近い区画から、瓦の破片などを研いて作つたタマを順に投げ入れて、タマの入つた区画は飛ばして進む。だから、二区画のパーの一区画にタマが入るとその部分は一区画のケンになり、その結果、ケン・ケン・ケンの片脚進みの後やつと両脚のパーになるので、かなりハードだ。陣地の線を踏んだり、復路にケンの状態でタマを拾う時、ぐらついてパーの状態になつてしまふと負けで、例えば二往復到達を達成している者なら、また三往復目からの挑戦をやり直すことになる。秘訣はいいタマを

あらかじめ作っておくことだ。瓦の破片など大きさの手頃なのを見つけると、川に行き大きな石に丹念にこすりつけて角が丸くなるよう研いた。

また、面白い呼び名の遊びでヒマワリネコドンというのがある。ひまわりの花の模様のはヒマワリネコドンと呼んでいた。数人ずつのグループに分かれてひまわりの花片部の陣地と中央の円の陣地に入り、花片陣地のグループが一周するのを中央組が陣地から身を乗り出すようにして阻む、たいていは陣地外に突き出すというやり方のかなり荒っぽい遊びだ。

花片組は突き出そうとする中央組の手を引つ張ったり横から突いたりして負かしてもいい。中央組には一回だけ、円の外に飛んで出る権利があつた。それを使うと円には戻れずその位置に立つて相手を迎え撃つだけだ。むろん相手から突かれて動けば負けで、いわば乗るかそれるか賭となる。確か、花片組の誰か一人でも一周できるか否かで勝敗が決まつたと思う。

花片組としては、要領よく相手の隙をすり抜けて一周するのもよからうし、相手を挑発して引きずり出して勝負をつけるのも面白い。スリル満点の遊びだつた。

このほかに陣取りの類の遊びがある。イライラもその一つだ。地面にクモの巣状の丸い陣地を描いて、その目の一つ一つに硝子製のオハジキを入れて陣地を拡張していくゲームだ。オハジキが線に触れて止つたら陣地に取れない。目の中にオハジキが入ると、その目は自分の陣地になるので、自分の陣地との境の線を手で消して拡張する。最終的に円の内側でそれぞれの陣地が確定して勝敗が決まる。

いままでとりあげたのは、遊びのほんの一部に過ぎないのだが、こんなふうには子供の遊び一つをとつてみても、この頃は田舎に楽しい文化が根づいていたことがわかる。

いまでは村の人口が減り、少子高齢化が進み、むかしのおもかげをとどめていない。なぜ人は街を目指すのか。

何せ田舎には働き場所がない。それで若者は先ず街に出て暮らす、そして家庭を築く。やがて子供が生れ子育てが始まると、もはや僕のような「流浪する故郷遠望族」になるしかないのではないか。なぜならば、生れた子供にとつてはその街が故里となるからだ。居住地を子供の故里に合せるのが親心だろう。

もしかしたら、人間の生活の大原則に「過去と同じ形の生活には二度と戻れない」というのがあるのかもしれない。素晴らしい西武蔵村だけれど、時が遡ることはない。

秋になると柿の実がいまも変わらず色づく両子の里、西武蔵の村。かつての村に戻ることはもはやない。老人から子供まで、そろつて賑やかに勤しんでいた田植の風習もいまはなく、老人がほんの少数で機械を使つて植えているのを見るだけだ。刈田となつたむかしのままの風景にしばらく見とれていた僕に、ふと、「農ほろぶ日遠からなく」との思いがよぎつた。

第
六
章

新
し
い
時
代
へ

深闇がかすかに震ひ去年今年

年の改まる瞬間は、言葉ではいえないような不思議な感じがする。この感情を俳人・高浜虚子は、

去年今年貫く棒の如きもの

と詠んで有名だ。断絶があるようでないのが、時間におけるこの瞬間で、まさに西田のいう「非連続の連続」のようだ。年が明けたとたんに新たな気持になるのは、多分に人間の観念によるものに違いないとは思うけれど、もしかすると実際に国じゅうの人々が活気ある行動を開始するその波動が実体的に響いてくるのかもしれない。

毎年、大晦日のこの瞬間を楽しみに待つ。小題は、昭和六十四年が明けたその瞬間、闇がかすかに震えたように感じ、そう言った。

闇が震えたというのは、厳密には、そのように捉えた僕の《感覚そのものが震えた》とも言えよう。

ところで、人間が生きているというのは「我」という認識主体が時間的に消滅するまで継続することだから、存在 - *sein* - は時間 - *Zeit* - を離れては成り立たない。

存在自体が時間という観念を生むのも事実だが、時間そのものがあってこそ存在を存在たら

しめているのも反面の事実で、両者は分離できない不可思議のものだ。

時間の本質を捉えた詩人の一人に、歌人・佐藤佐太郎（一九一九—一九八七）がいる。佐太郎の有名な歌に、

冬の光移りてさすを目に見ゆる時の流といひて寂しむ

（帰潮所収）

がある。冷厳な詩人の目は、時間を「距離を速度で除したもの」などという血の通わない算式などでなく、「冬の光移りてさす」という、人間の生命と合一した自然の中に見いだした。自然の中に時間を見、ひるがえって時間の中に自己の存在を見ているのだといえる。

前に述べたように、両概念は切り離せないものであり、その前提のなかでこの歌人は自己を捉えようとしたのではあるまいか。

詩というものがザインを表白するものだとすれば、ツアイトとの密接な関係の内になければならないことは自明の理だろう。

僕はこれから、こうした視点で自己をみつめ、佐太郎の歩んだ道を追尋しようと思う。

冬の雨しづかに昭和流れけり

昭和六十四年の人日・一月七日、未明から雨がしずやかに降り続いていった。ついいいでしたが、これまで経験したことのない時代の変遷があつた。昭和天皇が崩御され、

永かりし昭和時代が幕を閉じ、新しく平成時代が明けた。

テレビでは小渕官房長官が「平成」と毛筆で書いた紙を示して、緊張の面持ちで国民に伝えていた。したがって冒頭の「昭和六十四年の人日」は瞬時に「平成元年の人日」となったわけである。

当り前だった昭和の年号が過去のものとなる時、不思議な愛着が湧きそれが寂しさに変る。僕はこの日、そんな心情を何とか未来に向けて残したいと考え、勤からの帰路に見た雨にけむる高崎山を、

高崎の嶺ふる雨にけぶりつつ心寂しも昭和逝く日は

(菜花爛漫所収)

と詠み、夜に小題の句を作った。感慨は当然にして一連のものだ。僕の経験した昭和といえは、戦後の復興予兆期、復興期、および矛盾顕現期に分かれると思っ

っている。それで、自分なりに時代をふりかえってみよう。

一 復興予兆期
まだまだ生活が貧しかったものの、何か言葉でいえないような明るい雰囲気を感じられた時期のことだ。国全体が戦争の重苦しさから解き放され、新しく何かを創っていきこうという空気に満ちていたのかもしれない。

村ではまだ道路という道路は未舗装なのでこぼこ道ばかりで、村じゅうのどの家にも自家用車はおるかテレビ、電話、洗濯機など何もなかった。ときたま、商売用の三輪車が下の方からけ

たたましいエンジン音を響かせて、誇らしげに上つて来るのを見かけたくらいだ。
洗濯といえ、どこの家の主婦も近くの溝や川に出かけて洗濯板を使つてすませていた。
何といつても、食生活がつつましかつた。わが家の場合は農家だつたので、米はあるにはあつたけれど、普段から辛抱が身についていて麦飯が主食だつた。
各家は非常時に備えて、床下に芋釜を掘つていて、その中には甘藷を粉殻に埋めるようにして蓄えていた。また、炊事場はどの家もたいてい土間の隅に作つてあつて、かまども設けられていた。毎日そこで薪を燃やして炊くのだ。土間の降り口にはうどん器械も取り付けられていて、よく小麦粉をこねてうどんを打つた。
その当時のお菜は、たいてい味噌汁に沢庵漬、それに野菜の味噌あえなどの一品が辛うじて付くくらいなもので、魚を食べたくなれば自分で川に行き、釣るか瀬干しや火振り等をするかして獲るしかなかつた。魚屋自体が村にないからだ。ただ、祭や盆や正月には、十数キ口下の方の町からト口箱で仕入れて売りにくるおじさんがあり、買つて食べることもあつた。そんな時は珍しい海魚にありつけた。おじさんは自転車に乗り、自分の生活のための最小限の費用を稼ぐべく悠々と行商していたようだ。
肉は海魚よりもさらに高価だつた。それでも海魚と同じく年に三回程度は、これまた自転車で売りにくる別のおじさんのを買つた。おじさんが近くを通る時は鉦を鳴らしたものだが、どこの人も大方は見過ごすばかり、よほど貧しかつたに違いない。

僕たちは普段、山に針金で罾をかけて兎や雉を獲ったり、ウツツメという竹製の罾で鶉や鶉を仕留めた。また、庭や畑には瓦落しという仕掛をして雀を狙った。この頃はバードウォッチングなどという言葉もなく、バードイティングが普通だった。

通学の様子は、いまの子供たちにはとうてい想像できないだろう。僕はたまたま村で初代の幼稚園生だったのだが、毎日往復八キロの道を徒歩で通った。バスが一日に四往復ほど運行していたけれど、ほとんど恩恵には預からなかった。要はお金がないからだ。

いちばん辛かったのは冬だ。その頃よく雪が降っていたものだが、子供の足で雪のなかを片道一里は厳しかった。とにかく足がこごえて痛いほどだったのを記憶している。子供たちはみんな耳たぶにシモヤケを、両手にはアカギレを作っていた。

通学で楽しかったのは、秋になるとよく山道を通って、栗や犬枇杷などや、椎の実やけんぼ梨などを採りながら帰ったこと、それに、中学生になって通学のための自転車を買ってもらったことなどだ。

以上が、復興予兆期の僕をめぐるおおまかな様子だ。前に「言葉に表せないような明るい雰囲気」といったのは、戦争からの解放感とともに、

人が田舎に多く住んでいて、その頃までは伝統的な家族制度や集落の生活習慣のよい面が機能していた。

そのことが、最大の要因ではなかっただろうか。核家族化へ向かう前の段階で、人々にまだ

自らの労働で自らの生活を少しでも豊かにしようとする心意気が盛んだったことにもよるだろう。

二 復興期

僕は、昭和三十五年頃の、各世帯がぼつんぼつんとはいえテレビを買い始めた時期をその起点とみている。

それまで、二キロも離れた西子寺までテレビを見に徒歩で行ったほどだったが、祖父がテレビを購入し、自宅でプロレスや相撲などを見られるようになったことは驚きだった。

とはいえ、この頃のテレビの映りは気まぐれで、画面がしょっちゅう乱れたり、よく真空管が切れて一時ストップした。最も強いその日の電波を取るためには、長い竹竿の先端にアンテナを取り付けて、その固定場所や方向を毎日のように変えなければならなかった。

一昨日は馬屋の裏、昨日は庭のど真ん中で、今日は屋根瓦の上といった具合だった。おかげでその頃は、屋根の上で遊ぶのが楽しくてならなかった。

電話や自家用車が普及し始めたのは昭和四十五年頃だったろう。田舎ではそれまで、情報交換といえば相も変わらず井戸端会議に頼っていた。

生家に電話がついたのは、僕がまだ大学生だった昭和四十七年頃だ。以前、村には「十へとう」番さん、十番さん、電話が入っています」と交換手から呼びかけられる形の有線電話が置かれたこともあつたけれど、呼出しに手間をとることもあつてかすぐに廃止された。だから、

家にテレビの刑事ものなどに出るようなダイヤル電話がついたことは画期的な出来事だった。そんなこともあつて、僕は電話をかけるのが大の苦手だった。受話器を握ったとたんに頭の中が真っ白になつてしまつて、相手と何を喋つたらいいのかわからなくなつた。本当の意味で違和感なく電話をかけられるようになったのは、恥ずかしながら、就職して約十年も経つた僕が三十三歳の頃だ。昭和の間じゅう田舎者のハンディキャップを引きずつていたわけだ。

自動車も電話と同じ頃父が購入した。それ以前は夢のような話として、
「アメリカじゃ、軒並み車を一台ずつ持つちよるちゆうなあ」
などと話していたのだが、約十年してわが郷里にもその夢が実現したというわけだ。

三 矛盾顕現期

昭和四十年代後半の、第一次オイルショックは、わが国の政治経済体制の矛盾顕現期の端緒として象徴的な出来事だった。その影響は当然に僕の身边をも直撃した。

当時学生だった僕の常食、一袋十六円のインスタントラーメン「これだ！」が、何と一挙に四十八円にまで値上がりしたのだ。それまで細々と学生生活を送っていた僕は呆然としてしまったのだつたが、アルバイトをふやすなどして何とか乗り切つた。

そんなことを機に、外国との関係がわが国しかも身边に直接的に及ぶようになり、学生の身ながら、

「世のなかに磐石なものは何一つない。僕たちのまわりのすべては時々刻々動いているのだ」ということに気づき始めていた。

その後、わが国の体制はさらに矛盾の度を深めていく。農村の衰退、多量生産型経済構造の脆さの露呈、メディアの膨張と頹廢、倫理觀の低迷等々、数え上げればきりが無い。それは、平成のバブル経済崩壊に始まる経済、政治、行政、金融・証券、企業等に対する国民の不信の増大へと続いていく、一つの予兆期だったと考えている。

ともかく、昭和六十四年の人日・一月七日に、静かにかつ重く降る雨のなか、昭和という一つの時代は幕を閉じた。まるで雨とともに流れていくかのように。

一点として冬暁に染みぬたり

冬の明け方のほのぼのとした空を見てみると、心が洗われるような気がしてくる。別府湾を見下ろす高台にあるわが家を出て、前の坂道を海に向って下っていく時、実に見事な冬暁に出くわした。

水平線の上の空が寒さのためどことなく強張った感じに明けかけている光景には、自然の厳しさと冬の日差の瑞々しさがあふれていて、しばらく敬虔な気持ちで見とれていた。自分という一人の人間は、大自然からみれば小さな小さな点にしかすぎない。だから、身の

周りに起こってくる苦しみや悲しみは、動じるに足りないことだ。それよりも、こんなに美しい自然のなかにこうして生かされていることは何とありがたいことだろう。

そんな感慨にしばらく浸った。

新しい時代、平成の夜明け。これからこの時代は、いつたいどんな歴史を刻んでいくのだろう。かすかな命の一つとして冬暁に向かいその光を浴びている僕。しばらく、主も客もなく、時間だけが過ぎていた。

半島の奥山ひくく黄砂降る

国東半島は、海岸に沿って国道二一三号線が走っている。国道からは、半島の中央部に位置する両子山を秀峰とする親しい山々が見える。

両子山の麓が僕の郷里なのだが、この日、国東での勤が終って車を走らせていた時、黄砂にけむる山群がいたく幻想的な様相をみせていた。

山群はいかにも半島の山といったさほど変化のない山並で、黄砂におぼおぼと霞んでいるさまは何ともいえない平穩にあふれていた。だが、そんな平穩とは裏腹に僕にはひとつのわだかまりがあった。農村の疲弊を知りながら郷里に帰るべくもない現実に対するものだった。

黄砂に霞む下には、かつての六郷満山仏教文化が生んだ数多くの野仏たちや仁王像、或いは

国東塔や庚申塚などが、いまもむかしの名残をとどめて散在している。この地域の文化は、いつか東京で会ったジャーナリストも言っていたように、庶民の信仰に支えられて育まれてきたものだ。

いまはその文化も衰退し、すべての町や村が過疎地域と呼ばれるようになった。文化の消長は人々の心の消長でもあろう。

「僕も郷里を出て、はや三十年が過ぎた。平穩すぎるようなこの日の光景はかえって、ああ、これまでこの土地に文化を育んできた力はどこへ消滅したんだろう」

その思いをかき立てた。そんな複雑な思いを内に秘めつつ、この日も、六郷を遠ざかる海沿いの帰路にあった。

雪柳大いに流れぬる日中

雪柳は、春の深まりを象徴するにふさわしい花だ。夕方、暮れなずむなかに花の白さが一段ときわだつて見えるのもいいけれど、日中、町のいたるところにまるで水のたぎちのように見えるのは実に爽快で、春の爛熟を実感させてくれる。

平成元年、僕の住む別府市の駅にほど近い公園通りでそんな光景に行き当たった。それは迎春花とも呼ばれるだけあって、何とも見事に咲きあふれていた。

話とはぶけれど、文章に使う比喩には、暗喩（または隠喩・メタファー、『のようだ』と
言わない型のもの）と明喩（または直喩・シミリー、『のようだ』と直接に言う型のもの）
があることは、誰も知るところだ。

この日の雪柳については、暗喩の方を用いて「大いに流れぬ」と言った。暗喩、明喩とも
に、詩を作る上で有効なレトリックの一部であることはいうまでもないが、その用法に対する
考え方によっては、詩をどのようなものとして追求していくかという、作者の姿勢に影響して
くる。

暗喩は、俳句のような最も短い形式の詩では表現効果があるが、用法を誤れば全く独善の世
界に墮していくきらいがある。

現代俳壇の一考すべき点に、この暗喩濫用による独善傾向があるように思う。作者は自負し
ていようと、読者にはその真意が全く伝わってこない作品が多すぎるのだ。

一方、直喩の方は、詩を幻想から相当に現実へと引き寄せたものだ。いうならば、現実重視
の作風を心がける詩人にとつて大切なものだ。

かといって、これも「甲のようだ」の甲が比喩されるものにふさわしくないと全く物笑いに
なる。面白くも何ともなく、これまた独尊につながるから厄介だ。

いずれにしても比喩は難しい。成功したときは大きな効果を発揮し、作者の喜びにつながる
けれど、上手くいかないときはみじめだ。

ところで、この日の雪柳は「大いに流れて」いたのだろうか。
「安易すぎて、問題にならないよ」
と、誰かが言うのが聞こえてくるようだ。

旅人のごとき寄居虫を拾ひ上ぐ

人生が旅に似ているとは、芭蕉の「百代の過客」とまでは言わないまでも、いつも僕思うことだ。

顧みれば、両子に生れ育ち、十五歳で親元を離れて杵築に下宿し高校に通った。三十年経つたいま考えると、その時が旅の始まりだったのかと思う。

その後、わけあつて自ら進学の道を断ち、昭和四十五年に広島県福山市にある製鉄所に就職した。だから、福山市は県を出て初めて移り住んだ所なわけで、短い期間ながらも思い出深い街だ。

先ず、言葉の壁にぶつかつた。最初の頃だが、電気スタンドを買うため友だちを誘おうとしたが言葉が通じなかつた。

「あんた、ちよいと電気スタンドを買い、街に行つちかっせんかえ」
と言つたが通じないので、

「、ちよつと、 買いに、 行ってかつせんかえ」

と少し言い方を変えてみたが、それもだめで、なぜ理解してくれないのかもわからず困惑してしまつた。それで、最後の手段として言葉を分解して言つてみた。

「あんだ、わしはいまから街に電気スタンドを買いに行くんじゃけど、一緒に行つちくるかえ」

これで辛うじて通じたというのが初めての苦い経験だ。いまに思えばそんなたわいもないことから苦労しはじめたのが福山市だつたわけだ。

この街では、ほんの三箇月の短い暮らしの間にもいろんなことがあつた。

一つは、すでに故里を出ていた兄を訪ねて、初めて関東への旅をしたことだ。僕のずつと憧れてきた東京への旅、それが福山市から実現したのだ。特急富士号だつたらう。寝台車に一泊し、朝早く目覚めると車窓に美しい茶畑がひらけて見えた。直観的に、

「静岡か」

と思つた。初めて見る静岡だつた。それから東京に着くまで、ずつと窓外の景色に感動しながら見入つていた。反面、東京駅で兄が待つてくれているはずだつたのだが、不安でならなかつた。

「本当に兄は迎えに来てくれるだろうか」

と、何度も何度も心配した。いよいよ東京駅に着くといつので、顔を窓にくつつけるように

して外を見ていたが、ホームにすぐに兄の姿を見いだした時は腰が抜けるほどに安心した。お互いに手を振って確かめ合い、やっと念願の東京駅に降り立ち、兄にも再会できた。

そこから地下鉄なるものに初めて乗り、草加市に向かった。途中、電車が地上に出てすぐ後楽園球場かが左手に見えた。草加市には叔母の家族が住んでいて、兄もその隣のアパートに住んでいた。その附近一帯はまだ田圃ばかりで、兄の部屋まで蛙の声が聞こえていたのを思い出す。

僕はやっと都会へ出て来られたという興奮と、兄や叔母の家族に故里遠い地で会えた喜びと、都会に対する一種のコンプレックスを一気に発散したい気分になって、兄のギターを手にとると、当時流行していた「ホルド・オン・ベイビー」を大声で一気に歌った。

翌日、兄や従弟らと銀座へ出た。うかうかすると押し流されそうになるほどの群衆には少々辟易したけれど、有名な音楽喫茶・ACB(アシベ)に入って、ザ・テンプターズのコンサートを観た時は感激した。最も気に入っているいつもギターを伴奏に歌っていた「ジョウク」をシヨーケンが歌ったからだ。兄も僕もずっとグループサウンドズ狂だった。

そんな旅を終えて福山に帰ってきた僕は、間もなく会社を辞めた。

退社の際には、その後の進路を決めていたわけではなかった。漠然と東京に出たいとの願望があつたけれど、とりあえず両親に報告するため田舎に帰ることにした。

帰途、杵築市で浪人中と聞いていた大介君を家に訪ねた。そして、このことが結果としてそ

の後の僕の人生の大きな転機となった。

大介君は、退社して帰郷した僕を親しく迎えてくれた。彼は以前に増していきいきとした顔をしていたが、僕は咄嗟に、それは彼の大学進学への意気込みだとわかった。

僕はその場で進学を決意した。一度決めさえすれば実行は早い。早速大介君とともに母校の杵築高校へ行き、三年生の時の担任だったY先生に面会を申し込んだ。先生は、僕の突拍子もない行動に驚きながらも、決意を本物と察知したのか、懇切丁寧な指導をしてくださった。Y先生の親切はいまでも忘れ得ない。

やつとその後田舎にたどり着いた僕は、驚く両親に進学の決意を伝え、迷惑をかけることを詫びた。そして、いよいよ限定半年間の猛勉強に突入した。

半年間にそれまでの怠惰の空白を埋めるのは大変だった。一日に十数科目ほどを独学でこなし、終った科目は管理帳にマル印をつけて整理するかたちをとった。

とにかく、時間が足りないというのがその時の実感だった。それでも何とか計画を実行し、佐世保市にある大学に合格できた。

約半年の自宅浪人で思い出深いのは、一つに、母から「近所の人に恥ずかしいので、なるべく外に出ないように」と諭され、親に迷惑をかけていることがわかったこと。一つに、通信による全国模試の費用を、祖母が全額快く負担してくれたこと。一つに、浪人期間中にアジアに対する関心が芽生え、中国語を学びたいとの意欲が湧いたこと。もう一つが、努力をすれば何

とか道は開けていくものだということが自覚できた、ということだ。

さて、佐世保に移り住んだ僕は、大学では主に中国語に、下宿ではギターによる作詞と作曲などに力を入れて過ごした。そうして、三年生になった頃、たまたま友人の思いつきに感化され、あり余る時を潰すべく就職試験の勉強を始めた。そして四年生の時、幸運にも地元と九州の二つの団体試験に合格し、さしたる理由もなく地元団体の方を選択した。

就職して大分市に住むようになって以来、社会人に自信をもてない自分に苦しんだ。何とかそれを克服しようと仕事関係の勉強をした。ある程度心に余裕の生れたのは五年後の二十八歳の頃だ。それというわけではないが、結婚して別府市に移り住んだ。

別府に三年ほど暮らした頃、この随想の冒頭に詳述したように東京勤務の発令を受け、横浜市港北区に転居した。東京在任中は、前述のように葛飾に親しんだ。お花茶屋界隈を中心に大介君や彼の友人たちとの楽しい交際が始まったからだ。山歩きや野草の観察や公園巡りなど、僕らの行きつけのスナック喫茶「山」のマスターだった索嶺さんの案内により貴重な体験をすることができた。犬ふぐり、華鬘、一人静、一輪草、二輪草、いかり草、片栗等々いろんな草花を知り、念願の水芭蕉の花に信州で逢うこともできた。

そして、そんな三年間もたちまちに過ぎ昭和六十一年に帰郷、別府市の元の自宅に戻った。何だかわけのわからなくなるほどの僕の旅だが、小題はこの別府への帰郷から三年経った平成元年の作だ。

当時は、なぜか東京への未練心が疼いてしょうがなかった。ある日、日出町の糸ヶ浜海岸に家族で遊びに行った。はや三歳となっていた葉菜子はヤドカリ拾いなどして喜んでいたが、僕の方はというと、拾われるヤドカリを見ながら、

「小さくて姿がどことなく滑稽で親しいヤドカリ君よ、仮居の姿はまるで旅人のようじゃないか。何と君は僕に似ているのか」

など思いつつ、来し方をしみじみ顧みていた。

三歳の葉菜子は、父親がそんな感慨にひたっているとはつゆ知らず、ただただ夢中になって、ヤドカリ君やらカニさんやらを見つけてははしゃぎまわっていた。

暮れてなほめらめらと鳴く油蝉

蝉の命は儂いものときくだけに、その声は切実に響く。とりわけ油蝉の鳴きつぷりには一所懸命さがある。短い季節のなかでありつた力の力をふりしぼって鳴いている声は、健気ともまた哀れとも感じられるのだ。

特に夏の終りが近い頃には、クライマックスのように、昼夜おかまいなしに鳴いている。この日も、日が暮れてからもしきりに鳴いていたのだが、そのひたむきな声を、
「めらめらと」

と感じた。

また、深夜の静寂のなか、突然大きな声で鳴き始めることもあり、そんな時も「めらめらと鳴いている」と感じた。

蝉の消長は季節の移ろいの具体でもあり、また一年のうちの一つの節目でもあると思う。蝉の声がやむと、

「この年もすっかり後半になってしまったんだな」

との感がつよく、夏から秋、秋から冬・歳晩へと時間の速度が一気に加速されていく気がするのだ。

季節、年月、人生等々。それらは確かにみんな移ろいのなかにある。幼い頃の思い出は蝉とともに遠く過ぎ去っていったという思いが、此の頃いよいよ深まっている。

似我蜂もなりはひか巢に出で入りて

大分県地方の方言の一つに、大変ユニークな「いのちき」というのがある。意味は概ね「生活」ということで、小題中の「なりはひ」とほぼ同義だと考えていいだろう。

僕は、「いのちき」の語源は古語「命生く（生きていく）」の名詞型だろうとずっと考えていたが、此の頃読んだわが故郷の哲人三浦梅園の著書に「いのちいき」とはつきり書いている

のを発見し、自説が正しいことを知った。

いのちきは、端的には生活の意だといえるけれど、地元のニュアンスだと「何とか飯を食っていく」とのイメージが込められていて、生活というよりもっと原点に遡った、まさに「命生き」のニュアンスのつよい意味に使われていると思う。

ところで、両子の生家には前に何度も書いたように、近所の人たちや家族・親戚の団欒の場となつてきたお縁がある。僕は帰省するたびにそのお縁で親兄弟らと語らうのが常だ。縁はこの家の新築以来、もうかれこれ四十数年を経ているわけだけれど、ここには似我蜂が巣穴をたくさん作っている。そしてしょっちゅう出入りしている。何代も生き継いできた蜂だと思つと昆虫といえども親しみがある。平成元年のこの日もその蜂を目にして、

「あんたもわしと一緒じ、大変なんじゃなあ。蜂じゃのに人間といっこも変らせん、よう働いち、いのちきをしよんのじゃなあ」

と感じたのだつた。まさに僕に似た、貧乏暇なしの似我蜂だ。

近頃は生家に帰ることも少なくなつてきたけれど、きつとまだこの蜂の子孫たちが、いまもせつせと「いのちき」に励んでいるに違いない。

歳々はくりかへしかな石路の花

季節からみると、幾年月といえど往く年来る年の循環のように思える。ツワブキが咲いて年が押し迫つてくると一層そのように感じる。人はきつと一生をそんな感慨の積み重ねのうちに送るのだから。

だが、理をもつて循環のように思える日々も一日として同じ日はなく、時間にくり返しはない。対象も自己も着実に変化し、着実に老いつつある。

なぜ、小題のような一読矛盾のことを言つたのだから。顧みると、
「また、ツワブキの咲く季節が巡ってきたんだなあ。一年の経つのはこんなにも速いのか」

「この普通の実感とともに、その背景に、
「こうして着実に年を重ねるなか、僕は何を目指していくべきだろう。これから人生をどのように展開していけばいいのだろうか」

との、未来（自己の *self*）を見つめた視点がそこにはあつたように思う。

詩と理。人はたぶん詩を一義的、そして理を二義的とする社会に生きているのではないか。先ず感動のなかに生きているのではないかということだ。とはいえ、今を反省し飛躍を目指すための理が必要なことは言うまでもない。

「私は（単に）私（の本体）ではない。しかして（そのことを自覚した）僕（こそ）は僕（の本体）だ」

これを括弧内を省略して言うつと、

「私は私ではない　しかして私は私だ」
となる。このように自己自体は種々の矛盾の併存のうちにある。そして、そのことを自覚することこそが、自己の内的発展を促す *solien* の源泉になると同時に、

「私は貴方でもある」
との、我執に囚われない高次の生き方へと僕たちを導く、一つの重要な糸口ともなるのではないかと思う。

小題の作に、いま言ったような思いを込めたわけではない。たまたま自作の動機を考えていくうちに、詩には理が混入し易いものだということに気づいて、両者に少しく言及してみたまでである。

理を血肉化した上で、理を滅した世界へと進む早道はないものか。

冬ざれてみな洗礼を終へしもの

冬景色の清浄な感じは、いつたい何がもたらすのか。僕は、冬という季節は、生命そのものがある者は死滅しある者は休眠し、同時に着々と新しい息吹を起こすための力を蓄える時期だと思ふ。

一年の間にもに生長したすべての生物が、低温や乾燥など厳しい条件下に置かれ、弱きは

死滅し、強きは生き残る。そのようにして新たな生物界全体の繁栄が企図されているのではないか。

だから、生物界において一斉に行われる鎮魂あるいは洗礼のごときものと見えるのだ。

荒涼たる冬ざれの景のなかには、そうした意味での新しい息吹を感じ取ることができる。冬ざれ。路傍の草は枯れつくし、小川は枯葦に覆われる。そして、葦群のすきまをちろちろと冷たい水が流れる。小川に見かけていた八エやドロバエ、ニナスイなどの親しい魚たちはどこかに姿をひそめ、音なく澄みきつた水が流れているのは、やはりどこことなくうら寂しい光景ではある。

けれども、一面で、何と安らかな光景だろうとも思える。こんな厳しい時期があればこそ、春に早々と道端に咲くオオイヌフグリの青い小花や、川べりに萌えいずる芹などのすべてが瑞々しく輝いて見え、そのことがみんなの心に夢や希望をもたらししてくれるのではないだろうか。

かつて僕の詠んだ故里讃歌に、

吹く風のさながら光る草山のなだりに熟れし野苺を摘む
があるが、こんな感動も小題に言う洗礼あつての賜物といまでは思える。

(菜花爛漫所収)

風の中這ひつくばつて自然薯掘る

山芋に対する愛着については、前にくり返し書いたとおりだ。ただの山菜ではなく、故里の思ひ出そのもの詰まつた具体と言つていい。

幼い頃、祖父が山に芋を掘りに出かけた日は、家で祖父の帰りを楽しみに待った。夕方、祖父が帰つてくると、隠居の炊事場の板間にはその日の見事な成果がずらりと並んだ。それを見て祖父の頼もしさを感じた。

祖父は、シベリア出兵だかいつの戦争だか定かではないのだが、軍隊に入つていたそうだった。本人から直接聞いた話によると、何でも二頭だての馬車に大砲を引かせて行軍したそうだった。そして大砲を撃つ時は、馬車ごと窪地に据えたとか。発射の反動で大砲が後ずさりするので、そうしたのだそうだった。

戦争から帰還してからは、一時期、大阪で警察官をしていたのだが、その後、長男だったこともあつて、郷里の両子に帰つて家を継いだとのことだ。

祖父は、様々な仕事を経験している。大阪から帰つてからは稲作のかたわら炭焼きをし、また行路権とかいう権利を取得して、いまに言うタクシー業もしたそうだった。

その後、椎茸作りを始めてからは家計が好転したと聞く。その収益で近所の人から久保殿山

を買い、事業をさらに拡張したようだ。また、いまの生家を新築したのも祖父の一代仕事だ。そのほか農業のかたわら村議会議員もし、特に消防団活動の充実に力を尽くしたことが西武蔵村誌から読み取れる。

祖父は、全く明治気骨の頑固者だった。しかし反面では酒飲みで人好きで、よく家に客を招き入れては酒宴をした。僕たち孫はよくその場に引つ張り出されたが、酔うとすぐに、
「歌おうか」

と言い出して、揉み手で拍子をとりながら炭鉦節を歌っていたのを記憶している。そんな豪快でタフだった祖父も、日頃の無理がたたつたのか、六十九歳の時に脳溢血で倒れ、そのまま寝込んだ。家族が懸命に安岐病院に入院を勧めたが、祖父は頑としてこれを聞き入れず、数箇月の病臥の後に自宅で七十歳の人生を終えた。

亡くなる数日前に、ものは言えなくなつてしまつていたものの、母の示す仮名文字表を指さしながら、自分の棺桶と葬式の手筈を指示したそうだ。こんな祖父をいまでも尊敬している。逸れていた話を元に戻そう。

祖父は久保殿山附近でよく山芋を掘つたようで、出かけると一日に二貫目から三貫目ほども掘つて帰つた。そんな祖父を見て育つたからか、僕も小学校の二年生になつた頃から山芋を掘りたいと思ひ始め、先輩たちの仲間に入れてもらい少しずつ掘り始めていた。

四年生になつた頃、兄とふたりで七人家族の一食分を賄うだけの量を掘つて、父母から褒め

られた。褒められるとますます上達するのが子供だ。中学生の頃にはすっかり一人前の山芋掘りになっていた。

中学三年生の頃だつたらうか、蔓の位置を父があらかじめ見つけてくれていたこともあつて片昼に二貫目ほどもひとり掘つたことがある。よほど粒揃いの芋だつたに違いない。その後には、僕たちがクボドンと呼んでいた久保殿山を中心に、安岐町有林やナギノ、ホリキリ、ミヤンオク、トヤンサコから両子山の中腹にいたるまで、思いあたる山という山はほとんど限なく掘つて廻つた。でも最も懐しいのは、祖父のこともあつてこの久保殿山での思い出だ。

久保殿は日当たりがとてもよく、山芋掘の合間に休む時も、お昼に弁当を食べて少し昼寝をするのも楽しくてたまらなかつた。

特に、広々とした櫟林を風がわたつていく音と腐葉土の匂は忘れ得ない。また思い出の多くは兄との共通の思い出だ。

兄は、小学校六年生の時、久保殿山に自分たちが残していた山芋掘の古い穴を見て「穴」という小文を書き、全県のコンクールに入賞した。この山が少しづつ僕たちに感受性を育みつつあつた一つの証だ。

この山ほど愛着のある場所はいまの僕にはなく、今後もあるうとは思えない。

雪の積むあしたやかくも音のなし

雪の積もりつつある未明の静寂には、何とも言いがたい安らぎがある。ときおりガラス窓がかすかに音を立てたり、雪の降りつけるはたはたという音がするくらいで、まさに静寂そのものだ。またそんな時は空気にさえ独特の匂がある。「雪の匂」と言ってもいいくらいだ。

雪の日にまつわる思い出の数々。

囲炉裏の灰の匂、潜って遊んだ厚布団の匂、練炭や炬燵の匂。

口にふくんだ氷柱の味、両子弁では氷柱のことをモウガンコと呼んだ。また、おしくらまんじゅうをした山神社の板壁の冷たさ、踏む雪のきしむ音。

木馬に取り付けた青竹の匂、それぞれの影をもって降ってくる雪の中にぼんやりと見えた太陽の形。

きりもないほどの思い出が雪によって生れた。

そんな過去の出来事と感触を一気に甦らせてくれる雪の朝が、静寂が好きだ。

浅春やゆふぞらは朱の沈殿し

暦の上で立春が過ぎても、まだまだ寒い日がつづく。それでも日の入りが日ごとに遅れてきて、暮方の明るさには心の和む趣がある。

こんな心情は、俳句を詠む者たちにとつては格別だろう。いつもさきがけて季節を感じ、一句をなしたいという気持がつよいはずだ。

春の訪れは、注意して見さえすればどこにでも見つけられる。路傍の日溜まりには着実にオイヌノフグリの可憐な空色の小花が咲きそめているのが見とめられるし、沈丁花は寒いなかにも蕾をふくらませ、二、三の小花はすでに開いて、ほんのりと微香をあたりに発している。

ほかには、梅や辛夷や白木蓮もい。

いま二度目の東京在任で奥沢に住んでいる僕だが、昨平成八年に索嶺さんや啓二君らと葛飾に遊んだ時の梅がよかつた。柴又から江戸川を越えた少し先にある蓴菜池の周辺の梅だ。

池のほとりに梅園があつて、すでにとりどりの色に咲きほころんでいた。そのなかに、ひときわ輝いている紅梅を目にした時は、思わず絶句した。すでに短歌の方に専念している僕は、その光景を、

紅に咲き盛る梅の一木ありこゑなきものの賛嘆のとき

(菜花爛漫所収)

と詠んだ。人間のようには声をもたない梅の木々たちにとつて、美しい花を咲かせる時こそ、季節をそして自らを賛美している時に違いないと、そんな感情を抱いたからだ。

また、辛夷や白木蓮についても、他にさきがけて咲く春の花として好きだ。これらは立春前

後から蕾が目に見えてふくらんでくる。それを見るだけでも楽しいのだが、花の開いた時には一遍に心も開放されたような気分になって嬉しくなる。

辛夷というと、平成四年頃に安心院町に在住する加来進氏のお宅において小歌会が催され一泊させていただいた折、庭にある辛夷の大樹が一斉に花開いていて、夜空を背景におぼおぼとした白光を放っているのを目にした。その何ともスケールの大きく幻想的な情景は、いまでも興奮が甦るほどだ。

ともあれ、早春は僕にとつてとても大切な季節だ。花も、空気も街並も、そして緩やかになつた人の歩みや表情も。

小題を得た平成二年のこの日は、夕空に寒々と滞っている朱の色に早春を感じた。その朱はまるで、冬の名残の沈澱物のように見えた。

春は草花だけでなく、見るものすべてがいきいきとして未来的な輝きを放っている。そのすべてが僕の未来を展いてくれるような、そんな気のする季節だ。

第
七
章

黄
砂
ふ
る
街

早春はダークグリーンの雨が降る

この随想も段々現在へと近づいてくる。平成二年の立春の頃、何日も雨が降り続いてきた。春たけなわというには早いものの、その兆をたえた潤いのある静謐な雨が。色ならダークグリーンだと感じた。冬の名残と、草木の息吹のミックスしたような感じである。

僕にとつて早春は、苦手な寒さを乗り切った後だけに、身も心も伸びやかに。日常の辛かったことや腹立たしかったことなどたちまちに吹っ飛んでしまう。

哲学や芸術論において主体と客体の関係が論じられるけれど、この時期は人が客体である環境の影響を受けていることに気づかされる。

人は環境によつて意識や行動までも限定される。一方、環境にすべて従順のではなく、人は自由な意思をもつて環境に作用している。つまり、

主体と客体は、相互に限定し合つて、均衡の方向へと作用し合うものだ。

ということになる。主客均衡は、歌人の佐藤佐太郎が主に短歌の技法上の観点から提唱した理念だが、前述のように存在論あるいは社会論の分野にまで敷衍できる真理だと思ふ。

人の生き方において主（自己・精神）が勝ればエゴが生じ、思想上の観念論に陥つて独善的になつてしまふおそれがあるし、反面、客（社会・事物）が勝れば、人は社会に呑み込まれ流

されたり、唯物論に陥つて心の大切さを忘れかねない。

人は主と客の狭間において、双方の均衡のとれた視点に立つて対象をみつめ、行動すべきな
のではあるまいか。

主客均衡を念頭に置くことは、真実から目を逸らさない詩人の立場につながるし、意識しな
くとも、人は存在論的にそういつた立場において生かされているのだと思う。

小題の当日、僕は雨音のともなう安らかさに浸っていた。少なくともその時は主客同一、す
なわち自己の真実在にあつた。

二ヶ月や先ふくらみにひかる街

人の感情とは面白いものだ。歳晩になると物事を収束的な気分で捉えるし、春が近づくと、
「いよいよ春か、小鳥は囀り花はとりどりに咲き、楽しい季節になるなあ」

など、物事をふくらんでいくようなイメージで見る。このことが前に言つた相互限定で、ア
プリオリな感受とアポステリオリな経験による内的な備えのもたらす感情だろう。本源的な生
命力に根づく感情だろうと思う。

先ふくらみにひかる、というのはその一例で、日増しに日差がつよくなっていく趣に輝いて
いる、という感受だ。

ただの観念だと言われればそうかもしれないし、言葉上の遊びだと言われても否定はしないが、早春の明るさには、何と言われようと表現せずにはいられない心の躍動がある

人が表現（言語・行動・表情など）しようとするとき、それを駆り立てた本体があるのは確かだ、哲学論などにおいて原始態とも原初態とも、あるいは初元や純粹経験、衝動、衝迫等々と呼ばれているのがそれだ。

この日は、早春の息吹ともいうべきものが僕を感動させ、同時に僕はそれを把捉したのもあった。

前述の感動の本体を生（いのち）とするなら、まさに生を捉えて表現するのが僕たち写生派文芸人にとつての醍醐味でもあろう。

世界は生に満ちみちている。この素晴らしい生の実相を、たとえばうまく表現することができなくても、いつも感じて生きたい。

葛藤のなきごとく街春の霧

平成も二年目となったある春の日のこと、僕は、別府のわが家の二階の小書齋にこもって窓を開け放し、春の街の光景を眺めていた。

僕はその書齋を聴風庵と名付け、大変気に入っていた。そこからは、真正面に鶴見岳が見え

て、山の手の方の街の様子が手にとるようによくわかる。特に二階である所為か風の音がよく聞こえるので、そう名付けた。

聴風庵から見えるこの日の街は、いかにも春らしい穏やかな光景で、春の霧が淡あわとかがつていた。

ふと、この光景に街に暮らす人々の生活のことを考え合せてみた。

「この平穩な風景のもとで、人は誰しも生きるための葛藤から逃れ得ず、暮らしているに違いない」

実相と全くかけ離れた平穩な風景を、僕は「葛藤のなきごとく街」と逆発想的に表現した。普通に目に映る世のなからは、内部に渦巻く人々の主観などを覆い隠しているに違いない。悲しみ、苦しみ、怒り、喜びなどのさまざまな感情が、調和と対立の両極まるごとく包含されているのが現実だ。

僕は生来の「あまのじゃく」のためか、平穩な光景に却って「自己対社会、主観対客観」の内部図式をかいま見たような気がした。

鶴見岳の麓に広がる街の風景、その異様に平和そうなさまにしばらく魅せられた。

音のなく霏るあしたパン焼きをり

黄砂の降る頃は、四季のうちでも最も安寧な趣がある。寒さに身も心も硬直するような冬が
終つて、すっかり春らしくなり、緊張が解けるからかもしれない。

地球は自ずから動き、季節は巡る。そんな自然のなかに、意識をもち喜怒哀楽を感じる人間
が生活している。

しかし、人も自力のみで生きているのではない。春になれば春の心となり、春ゆえの行動を
する。夏、秋、冬もまた然りだ。

この意味から、人が自然のなかに生かされている側面は、断とうとして断ち切れるものでは
ない。

さらに考えていくと、ますます人は環境の恩恵を受けて生きているのだ、ということがわか
る。気圧一つをとつてみても、いまの気圧だからこそ体の機能を維持できているのであつて、
急にエベレスト山の頂上のような厳しい環境に放り出されると命さえ危うい。

また、昼夜があればこそ適度に働き適度に休めるのだし、それは太陽のエネルギーのお蔭、
地球の自転のお蔭とも言える。

僕は此の頃、人は地球の活動そのものに、ひいては宇宙全体を統一する大いなる力につなが
っているのだ、と思うようになった。

無限の宇宙を人は時々思う。無限の広さの中の、いったいどのあたりに銀河系は、地球はあ
るといふのか。それとも「どのあたりにある」という疑問自体が、単なる意味もない観念にす

ぎないのだろうか。

ああ、こんなにも僕は無知、無力なのか。

けれど、僕がこのあるがままにして在る世界に生きていることは動かしがたい事実である。平成二年のある黄砂の降っている朝、僕は生きるためにパンを焼いていた。小題の上五・中七は宇宙を、下五は自己とその生活を言った。

黄塵や支那海とほく激ちるむ

僕の中国に対する思入れは格別に深い。これまでの自分の人生の節目には必ずと言っていいほど中国のことが関わっている。最初は、大学受験を目指していた時のことだった。

高校三年生の途中まではずっと進学を目指していたのだが、五月頃だったろうか、慢性盲腸炎に罹って手術、回復までに十七日間の休暇を余儀なくされた。

学校に復帰してみると、特に数学が随分と先に進んでいて、全く従っていけない状況になっていた。授業は当然のことおかまいなしに進められていく。やりきれない疎外感を受け不満をつのらせた僕は、内心ひとり反発し、一転して進学を打ち切った。担任の先生が諫めるのもきかず就職を断行し、広島県福山市にある製鉄所に就職した。

福山でのことは前に書いたので割愛するが、ともかくこんな動機での就職だっただけに長く
続くはずはない。わずか三箇月余りで退社してしまった。故里にふらりと帰り、そのまま自宅
浪人となっていた僕は、

「大学に行つて何をしようというのか。何を目指して学ぶのか」

などと自問することが度々だったが、ある時少し大げさかもしれないけれど、一種の神の啓
示でもあるかのように、

「これからはアジアの時代になるはずだ。その時代を担うにはアジアの国のことを学ぶことが
必要で、自分としては先ず、日本と歴史上最も関わりの深い中国について学びたい。中国語を
学ぶところから始めよう」と
と思い立った。

こうして、当面の方向性の定まった僕は、運よく佐世保市にある大学に受かった。入学早々
第二外国語に中国語を選択し、本業の経済学そつちのけの中国語学習が始まった。

毎晩ラジオの北京放送を聴きながら眠り、授業では、他の科目はサボタージユしても中国語
の講義は最前列に近い席に陣取った。日記も一時中国語で書いた。

当時、中国語の応用の方の科目は陳先生（後に帰化して村岡先生となられた）という方が担
当しておられ、原則として中国語で行う講義は大変有意義だった。

先生がある時、僕の口頭での回答に対し、

- 「テイエンピエンダ・ファーン・ヘンハーオ」
と褒めてくれたのがとても勉強の励みになつて、いまでも感謝している。当時はまだ日中国交が樹立されてなく、毎晩の中央人民廣播電台の放送は相当に手厳しかった。
- 「米帝国主義の手先である日本の分子は、
などの言葉をよく耳にしていたが、
「いつか必ず国交が樹立されるはずだ」
と思いつながら、ひたすら中国語の修得に励んだ。それが意外にも早く、米中の国交が樹立されると、それに追従するように日中間の国交も実現した。電台の放送は一夜にして、
「親愛なる日本の友人のみなさん、
に変わった。僕はこの時ほど、自分が歴史の中に生きていると感じたことはない。これまで自分で決断して歩んできた道は誤っていないかつたと確信した。
- その後、中国語の勉強を続けながら大学を卒業した僕は、地元の自治体に就職した。二次試験の面接で試験官が、
「あなたは大学で何を勉強したんですか。学部は経済のようですが」
と問いかけたのに対し、
「経済は大して勉強していません。関心のある中国語に力を入れました」
と答えたのをいまでも覚えてい

就職してからも数年は中国語を勉強していたが、段々に仕事が増えるにつれて自然と遠のいた。ただ僕の中の中国熱がさめているわけではなかった。

一度、東北の松島に旅行した時に台湾人旅行者の一行に出会い、そのうちの一人に勇気をふるって話しかけたことがある。その時は、ふたりで話しているうちにみるみる一行が集まってくる。取り囲まれてしまった。よほど珍しい日本人がいると思っただろう。

黄砂は、中国の黄河流域の土の粒子が偏西風に乗ってわが国に飛来するのだという。僕にとってそれは本格的な春の兆であり、同時に大陸から届いた親しい便りのようなものだ。

両国の間に横たわる支那海、その激ちを越えて届いた瑞祥のごときものと僕には思える。かつて、僕の先師・佐藤佐太郎は、中国の偉大な詩人・蘇東坡を人生の友と慕い、日中国交の樹立に臨み、

「国交が成りて思ひいづることばあり、蒼海何ぞ曾て地脈を断たん」
（開冬所収）
と詠んだ。この歌は中国の人々にも親しまれ、現在、黄州市黄岡県の赤壁の公園内に歌碑が建立されている。

それと同じように僕は、

「大海何ぞ曾て黄塵を遮らん」
とも言うべく、黄砂にまた中国に親しみを抱いている。赤壁の同歌碑に関しては、平成六年に十年祭が歩道短歌会の多数の会員の参加のもとに（僕は都合により欠席した）黄州市および

黄岡県の行政府との共催により、当地において盛大に挙行された。その時、両国のさらなる友好を目指す証として「友好之舎」を両国の有志の協力により建設する約束がなされた。友好之舎は平成八年に完成した。僕はこの事業には参加していたので、同年秋に挙行された落成記念式典に参加した。長年の中国渡航の夢がここに叶うことになったのである。

人生は思いがけないことの連続で実に面白い。短歌をきっかけとして中国渡航が実現したことは、思い方によれば佐太郎先生から、
「もう十分に期が熟したので、君も中国に行つてきなさい」

との励ましを天国から賜つた気がして、いまもありがたく思っている。

大介君により索嶺さんを知り、索嶺さんのお付き合いのなかで歩道短歌会を知り入門できた。そして尊敬する佐太郎先生が蘇東坡を慕つたことから、僕としてもより深く佐太郎短歌を追尋すべく必然として蘇東坡を学んだ。これはかけがえのない円環だと思う。

赤壁の友好之舎には佐太郎先生の多数の書のほか、歩道短歌会会員の渡航記念の色紙が収められていて、拙歌の、

礎のひとつが成りて来し町に彼此なく照らす月をおもひき
(菜花爛漫所収)

も俄仕立の色紙のまま収まっている。「彼此なく照らす月」は、一中国に照る月は、日本にも照る同じ月だとの意から、むかし中国の文人たちの愛でた月は、いまも清々しい光を両国にそそいでくれているとの内容で、一時期の両国の不幸な歴史から決して目をそむけることな

く、これから両国民の信頼のもとに新しい歴史をと共に築いていきたいと思います、との僕の心からのエールだ。

平成二年の黄塵の句と八年の彼此なき月の歌、年月は隔たつていても一延長線上の二つの焦点である。

防風を食みつつ話俗を出でず

平成二年の春、俳誌「沖」の若手有力俳人・道夫さんが大分県を訪れた。彼はグラフィック・デザインの仕事の関係で、何でも春のタンポポをカメラに収めんと国東半島一円を巡るというのだ。

僕はそれに同行したのだが、彼は適当と思われるタンポポを見つけると、そこが道端だろうが民家の裏山だろうが、委細構わず撮影の作業に入った。それも花でなく瑞々しく葉を広げているタンポポがいいのだと言う。

彼には助手が二名従っていて、シャッターを押す寸前まで、計器を見ながら光度などの撮影条件を逐一口頭で報告する。彼はそれを聞きながら瞬時にレンズの焦点、照明の位置、明るさなどを判断し、シャッターを押すのである。

かれこれ二、三時間、半島を駆けずり回つたのだが、同行した僕にもいい経験になった。そ

れまでタンポポの花を愛でたことはあつたけれど、葉っぱの色合や張り具合などには注目したことがなかつたからだ。お蔭でタンポポの美しさについて別の見方を学ぶことができた。

予定していた撮影の仕事が無事終了したというので、僕は彼を両子の生家に案内した。生家で彼を兄に紹介しようと思つたからだ。

母にきくと、兄は久保殿山へ春茸を採りに行つていると言つ。そこで、彼とともに山へ行こうということになつた。

久保殿に着くと、兄は寝かせ置いてある楢木にばらばらと生えている春茸を摘んでいるところだつた。遠路、道夫さんが訪ねてくれたというので、僕たちは一緒に山を下り、家で歓迎の意を込めた小宴を開いた。春茸の炭焼をしながらの歓談だ。

道生さんは、その夜は別府のわが家に一泊するということになつたので、僕たちはそれから別府に戻り、先ず市内のスナックに繰り出して酒を飲み歌を唱つた。

彼は何をしても万能の男だ。デザインの仕事も、俳句も俳論も、そして書にカラオケに。かなりいい気分で飲んだ僕たちは、家に帰つてからもまだ焼酎などを飲んだ。僕は酔つた勢いで彼に代表句の、

白魚のさかなたること略しけり

を色紙に書いてほしいと頼んだ。そして、一興ということもあつて、飲みかけの焼酎の水割で墨をすり、安物の小筆で依頼した。彼は、

「こんなので書くの」

と一旦は渋ったのだが、とうとう観念して一筆書いた。

翌日、道夫さんは視察、僕は国東で仕事ということ、午前中は別行動となった。昼前に彼から連絡が入り、午後の飛行機の出発時刻までにかなり時間があるので昼食を一緒にとろうということになった。国東町の海喜荘という旅館を僕は用意した。

海喜荘の女将は東京は青山の出身だそう、奇抜な雰囲気、彼とも話がよく合っていた。

女将は季節に敏感、しかも気配りのこまやかな方で、それまでも、料理には必ず季節の趣をかもすもの、例えば春には菜の花、秋には楓の紅葉、冬には菊の花を刺身の端にさりげなく添えるなどの心遣いをしてくれていたが、その日は早春のものとして、浜防風の新芽が新鮮だった。

食べてみると、口中に早春の香りが広がった。

最初は少しずつビールを飲んでいたが、段々と酔が回ってきて、浜防風という品格のある趣向にもかかわらず、話はますます俗に墮ちていった。自らの信条　人と付き合う時は素顔のまま、という意識が過剰に働いたためだろう。

そんなわけで、昼食というはずが、午後を年休にしてしまう羽目になり、歓談は相当に酒宴に近いものに発展してしまつたことを付言する。

春昼や堂にもたれて焼ぼとけ

歩道短歌会大分支部の加来進氏と船河正則氏とともに僕の郷里・国東半島の寺巡りをしたのは、平成二年の春のことだった。

半島の特に国東地区の寺院には、地元で焼仏と呼んでいる木造の仏像が多数残存している。歴史の詳細は定かではないが、何でも室町時代の末期の頃、国東地区を主戦場とした大友氏と田原氏との壮絶な戦があつて、田原氏が滅亡に追い込まれた。その時に大友氏が寺という寺をことごとく焼き討ちにした名残なのだそう、焼け焦げた木仏が無残な形のまま堂の手摺などに立てかけられているのである。もちろん寺によつては、焼仏のみを一堂に寄せて安置しているところもある。

ともかく、焦げた姿は痛ましいのだが、年月を経ている所為か、春のけだるい趣の中に溶け込んでしまつて、まさに芭蕉の、

夏草や兵どもが夢のあと

を彷彿させる雰囲気だった。

ところで、哲学の術語に「表現」というのがある。人を動かしているのは心で、その意味において、真の存在性はつきつめれば心にあると言える。

だから、目に見えない心、すなわちダイナミックな躍動力である生の本体が具現化すること
を表現といい、人の姿やたちから広く文化そのものも、さらに文化から逆発想的に見える自
然の残存風景も含め、すべて表現ということに尽きると言っても過言ではない。

このように考えるとき、焼仏はまさに時代を、そしてその時代に生きた人々の心を表現した
ものと言えるだろう。

安寧を願う民衆の心の表現として彫られたはずの木仏、一方、戦を押し進めた武士の支配欲
を間接的に反映する焼仏の姿。理想と現実が、人の心の表と裏が同居しているのが、この焼仏
だ。

その日、そんな思索にふけりながら多くの寺院を巡り、故里の両子寺にも立ち寄り、そこか
ら豊後高田市へ抜ける通称「横断線」の曲りくねった道を走水峠へと上った。

峠では、しばらく車を停めて山に分け入り、野苺を摘んで食べた。こうして、この三人だけ
の旅はいつまでも忘れ得ない思い出となった。

子に巣くふわが罪に吹け涅槃西風

昭和五十五年に結婚した僕たち夫婦には、翌年初めての男子、風太が誕生した。最初の頃は
信子も僕もどうして育児をしたらいいのか戸惑うばかりだった。

僕はその頃、本庁に席を置いていたため忙しく、もっぱら彼女に育児をまかせ迷惑をかけていた。ともあれ、ふたりはどうか父親と母親の役目にはまり奮闘し始めていた。

風太が二歳になつたばかりの昭和五十八年、東京への転任辞令が出て、家族ともども横浜市の宿舎に引越した。

初めて暮らす大都市圏、横浜と東京。それは喜びよりも先ず、見知らぬ土地に放り出されたという感じで、不安の方が大きかつた。反面、不安のために却つて家族の絆が強まつたという一面もあつた。

その頃、風太は遠い地に来たことを幼心にも察知していたようで、毎晩夜泣をした。

僕の方は霞が関の事務所で残業ばかり、夜十時過ぎに帰宅して夕食をとり、風呂に入り、俳句の勉強などをしていたので、就寝は午前三時から四時頃、たいていは睡眠不足、よく渋谷のホームを朝によたよた夜にふらふらと歩いた。

僕は当時ひどく疲れていた。それに追い打ちをかけるように彼の夜泣はすさまじく、いらいらしていたのに加え、

「男の子は弱虫ではだめだ」

という考えが若い父親である僕の脳裡を支配していたこともあつて、泣き止まない彼をひどく叩いてしまった。

しかし、そんなことをしても泣き止まず、僕自身がみじめな奈落に落ち込んでいくような気

分を味わった。その後、そのことが原因なのか、彼は九歳になっても夜泣をすることがあった。その夜泣は、僕が東京勤務を三年で終えて昭和六十一年に帰郷してからも治る様子はなく、平成二年になっても続いていった。

僕は、それを聞かたびに心のなかで、かつて彼に對してとつた行為を反省し、無知を恥じ、罪を詫びた。風太の夜泣は、彼の心に巣くっている「僕の罪そのもの」の声だと感じていたからだ。

涅槃西風（ねはんにし）と呼ばれる春風の吹く三月中旬の頃も、相変わらずそれは続いていった。僕は深く恥じ、でき得れば春風がそれを吹き払ってほしいと心に祈った。

小題の真相はこれですべて明らかにした。改めてここに自省の言葉を記す。

「風太君、父親である僕が幼い君に加えた体罰は誤りだった。僕の無知ゆえの行為を君の寛大な心が許すよう謙虚に自省の意を表し、君のこれからのさらなる成長を心から祈る。」

春愁の心さまざま電車ゆく

ある春の日の午後、僕に乗っている電車はけだるい雰囲気に満ちていた。学生たち、老人、子連れの若い主婦など、みんなそれぞれその生活に疲れきっているように見えた。何の目的も、その必要もないような顔をして。

「さまざまな心が、さまざまにこの人たちの仕種や表情に表れているのだ。こんな気分を春愁と言うのだろうか。」

僕はそう思った。

「自分を含めた乗客の全員が、電車の中の春愁を作り出すのだろうか。いや、そうではあるまい。この春愁は僕の心の中でのことだろう。自身が春愁を負っているから、他の人たちにそれを重ね見たのに違いない。」

当時こんな思いをあれこれと巡らしていた。いまこの時のことを思うと、電車の得も言えないけだるさは、実は自他融合の混沌だったのだろうと思う。

人はそれぞれの境遇に生き、お互いに関わりのないような形で間接に関わり合う社会を構成して、社会に働きかけ、働きかけられて生活をしている。

一つの統一力のもとに各々の役割を無意識のうちになして、役割に応じた生活場所を与えられているのだ。

生、老、病、死、怨憎会苦、愛別離苦、求不得苦、五陰盛苦のまさに四苦八苦の修羅場の内に人は生き、それが却って時々なさやかな幸福を感じることもなるのだと言っていていいだろう。

小題中の電車は、そんな社会の一断片であり、実相だった。苦楽を超越することは難しく、喜怒哀楽に流されてしまうのが常である。当時、そんな大衆

のうちの一人の僕が、社会に流れるように生きていくようにみえた仲間たちを、同類相憐れむの情をもつて見つめていた。

石楠花や村には村の時間あり

僕は生家の庭にある池をぼんやりと眺めるのが好きだ。

かつてこの池の辺りは、道路より一段小高い位置に建てられている生家への上り道だった。だから、池はもともとはなかった。

昭和三十六年の頃、道の四、五メートル下手に、薪を貯えている木小屋があつて、小屋の屋根をすっかり覆うようにイチジクの木が茂つていた。そこに上り道を付け替えて旧道の部分には石垣が組まれて屋敷の高さに均された。母屋の方の庭を少しでも広くしてやるうとした祖父の家族愛から出た苦肉の策であつたらうと、いまでは思う。

その後何年かして、近所の家々が共同して近くの谷川から水を引こうといふので、父も加わつて庭に水を引くこととし、それを機に池を作つた。父の軽い道楽だつたらう。以来少しずつ草花や木が植えられて、かれこれ三十年は過ぎていく。

池の囲りには石灯籠が一基と、やや大型で舟型をしたコンクリート造りの盆に据えられた老松付きの石が一基、さらに池の中央に据えられたこれまた松付きの小さな石が一基あるが、そ

れらのもともと、国見町小熊毛の高台にあつてすでに廢れてしまつた父の生家から分与され軽トラツクで両子に持ち歸つたものだ。僕もその作業に居合わせた。

それらの石は、父方の祖父が華道の師範をしていた合間に大事に作り上げたものらしく、すでに六十年は過ぎてゐるだろう。石灯籠はさらに古い。

父の生家は、いまでは古井戸と食料保存用の洞窟一つを残すのみの櫟林となつてしまつた。

そんなわけで、わが生家の小さな池とはいえ、時代の消長と家族の歩み、それに当然にして人々の心が籠もつてゐるといふことになる。

平成二年の晩春に帰郷した時は、とりわけ石楠花の花が真つ盛りだつた。淡紅色の、やわらかそうでした。とりとした趣の花が何とも魅力的で、僕は池のほとりに佇みうつとりと眺めていた。

故里に過ぎた日々は顧みると短いようでもあるけれど、その頃はいまよりも時間が緩やかに過ぎていた気がする。そして、いまも故里はその緩やかさを保つてゐる。

合理的とも思えない時代の潮流に無理やり乗ることはない。大切なのは故里独自の時間の緩やかさだ。

常々そう思う。「村には村の時間あり」とは、まさにそれだつた。

故里を出てサラリーマンとなり、時間に追いかけられて暮らす日々。僕は、「村の時間は、ずうつとむかしのままであつてほしい」

と願う者だ。

幼子のいよいよまるく紫雲英つむ

レンゲ草の花は最も好きな花の一つだ。幼い頃、子供たちで揃ってこの花の咲き満ちている田圃を駆け回り、疲れ果てたらそのど真ん中に仰向きに転がって青空を見上げた。そんな日々がまるで昨日のことのようだ。

葉や茎に足をとられながら走り回った感触や、花を茎ごと摘んで作った首飾りを首にかけた時の冷やかで青臭い感じなど、すべてが楽しい思い出として胸に刻まれている。

葉菜子が四歳になった頃、僕はその感触を体験させておこうと両子に帰った。

僕たちは早速、れんげの花の咲いている田圃へと出かけた。彼女は喜んでれんげの花群へ飛び込んでいくと、女の子らしく静かにその中に坐って、教えられるまま首飾りを作ったり、花を摘んで花束をこしらえたりして遊び始めた。

そんな彼女の様子を見届けて、僕はそうつとその場を離れ、自らがいまもこんな時を過ごせる幸せを感じながら附近の畦道を歩いた。

しばらくして葉菜子に目を向けると、彼女はすっかりれんげ田が気に入らしく、まだ黙々と遊んでいる。

いちめんのれんげの花群と幼子。まさに同化してしまっているような景がそこにはあつた。彼女の体は小さく、花群に屈み込むように遊んでいる。その体はいよいよ丸く、花群に融合していた。

「この貴重な美しい景を一句にしよう」
突然に、そんな考えがどこから湧いて小題の句を詠んだ。故里とれんげの花群と青空と、そしてすべての自然を讃える心の証として。

春宵の音切り替はる冷蔵庫

信子も子供らも寝静まっている春の夜、ペンも抄らず僕はいつものように日記帳に向かつていた。すると、それまで低くて気づかなかつた冷蔵庫の音が突然高い音に切り替わり、騒がしく鳴り始めた。僕は、その音に触発されたかのように、「いまの時代」について思いを巡らし始めた。

いまは、むかしては到底考えられないほど便利なオートメイションの時代だ。電気さえ流しておけば、冷蔵庫はひとりで勝手に温度調節をして、食物を新鮮に保ってくれる。むかしはよく、夏になるとご飯を筥に入れて、部屋のなかの適度に通気性のある高みに吊しておいた。ご飯が饅えないように保とうとした人々の智慧だつたらう。

そのご飯は、表面が少し干からびかけていて匂も変りかけていた記憶がある。味は、いま考
えるにつけ、まさに当時の現実を象徴していた気がする。

いまは、電器釜を保温しておきさえすれば饅えることもなくいつでも温かいご飯を食べら
れるし、冷蔵庫に冷凍しておけばいつでもレンジで温めて食べることもできる。

冷蔵庫の中には牛乳や飲料水や野菜など食料品がたくさん詰っていて、いつでも空腹や喉の
渇きのないようにしてくれている。何ともありがたいというか、いたれりつくせりの世のなか
といおうか。

しかし、ここまで便利になつてくると、かつて感じていた食物に対する感謝の念や旬の野菜
を食べた時の充足感など、僕たちの失つていったものも決して少なくないと思う。

時代は着実に移り変つている。文化も移り変つている。僕たちはとめどない時代の変遷に
埋没するのではなく、時に自らを振り返り、自分たちにとって本当に大切なものは何なのか、と
いうことを自問する必要があるのではないか。

冷蔵庫は確かに便利でありがたい。が、その背景に目に見えない時代の変遷と、ある種の文
化の衰退があると思う。

春風邪の子の吐瀉にしてミルクの香

葉菜子は元氣そのもので、家じゅうを所狭しと遊びまわっていた。また、手をとって何かを教えてやろうとすると、

「はなちゃんがする」

というほど自立心があつて、彼女の成長によりわが家にはいつも活気があふれていた。それでも、そんな彼女とはいえまだまだ幼く、風邪でもひくとたちまちおとなしくなる。

元氣な子が静かになる時ほど寂しいことはない。彼女はこの日風邪をひいてしまつて、朝からずうつとベッドに横たわつていた。時々咳き込んだり嘔吐を繰り返している。

心配してベッドに近づくと、彼女の吐いたミルクの匂が何ともいたましい。吐瀉という汚らしく思うのが常だが、僕にはそんな氣持は微塵も湧いてこない。これが父と娘のつながりというものか、などと思う。

ミルクの甘い匂が何ともせつなく、早く風邪を治してもとの元氣な子に戻つてほしいとただ祈るほかはなかつた。

普通ならば楽しい一日のはず、窓の外から鶯など小鳥の囀りが聞こえる。それが、吐瀉によるミルクの匂と混じつて複雑な雰圍氣を部屋じゅうに充滿させていた。

「臭」と言うべきところを「香」としたのは用語的に少し無理があるかもしれないが、僕の精一杯の心を込めたつもりだ。

「あまり育児に手を出さないお父さんだけれど、病氣の時はいつも傍にいろんだよ」と、そんな精一杯のメッセージを。

第
八
章

樟
の
こ
と

あかつきは遠くの音す慈悲心鳥

「慈悲心鳥は、別名「十一」とも呼ばれていて、その名のとおり、
「じゅういちー、じゅういちー」

と鳴くのだそうだ。僕はそのことを俳句の歳時記を読んで知ってはいたが、平成二年夏のこの日までは、鳴声を一度も聞いたことがなかった。

初めて鳴声を耳にしたのは、深山などではなく、僕が休日に時間の大半を過ごす聴風庵のことだ。

僕は、朝早くに起きて読書などをする癖がある。夜は疲れていることが多いので、体にまかせてすぐに寝てしまうからだ。

この日もそうだった。

まだ夜が明けきらず、窓の外は青葉の頃とはいふものの静まりかえっていた。前日の疲れはすっかりとれて、頭の中がすつきりし、しんしんと音がしながら、身のまわりに耳を凝らしていた。俳句でも作ってやろうかと考えていた。

なかなかいい発想もなく、時間は過ぎて、ほんのりと夜が明けようとしてきた。そんな時だった。それは鶴見岳の方角から遠々に聞こえた。

「じゅういちー、じゅういちー」

最初は耳を疑ったが、何度も繰り返して聞くうちに、
「ああ、これが例の十一なんだ」

と確信した。喜びと同時に、何だかこの声がとても尊く思えてきた。自然の恵み、まさに慈悲心のような響の鳴声に、充実した気持ちでいっぱいだった。

この経験以来、十一の声を耳にしたことはない。平成九年のいまになってみると、もしかしてあの時の声は、僕の願望が聞かせたただの幻聴だったのかもしれないと思うこともあるのだが、ともかくあの不思議な鳴声を忘れることはできない。

いまは素直に、あの出来事は正しかったのだらうと信じて心に温めていたい。いつかまたあの、
「じゅういちー、じゅういちー」
の声を聞く日まで。

その味も片仮名のやうパセリ食む

子供の頃はありもしなかった食材が、いまでは普通に食卓に上がる。その代表的なものにパセリ、セロリ、ブロッコリーなる、三つの「リ」の付く野菜がある。

このうち、一番好きになれたのはプロツコリーだ。湯掻くと青々としていて、いかにも健康にいい感じだ。ソースをかけて食べるとなかなかいける。

最もなじめないのはセロリだ。何と形容していいのかわからないような季節感のない味で、これからも好きになれそうもない。

パセリというと、よく刺身の端に添えられるけれど、その緑色で刺身の新鮮さを引き立てるだけの役目なんだろうか。そのものが美味しいとはちつとも思えないのだ。

ただ、時に健康にいいだろうと思つて食べることがある。とても苦くて、さすがにオランダの芹 Parsleyらしい独特の味だ。

パセリの「セリ」は、誰かが芹にかけて（セリ科だから）本来「パースリー」とすべきところを、作為的に音訳したのではあるまいか。もしそうだったとしたら、その訳者は天才だつただろう。

これから、若い人たちはそれら外国原産の野菜をどんどん日本化していくに違いない。パセリが「巴芹」などと書かれるようになり、懐しい故里の味とされるのはそんなに遠い日のことではないと思う。

すでに僕の故里の川には、これまたオランダ原産のクレソンが、農村の風景に融けこんでいる。世のなかには時の流とともに着実に変化している。

八月の樟の影濃し黄月忌

本庁舎の駐車場の端つこの方に、第二次対戦の砲火をまぬがれたという大きな樟の老木がある。僕は前からこの木の傍を歩いて通勤することがあつて、その度に親しみを感じていた。

夏は木蔭が涼しいし、特に晩春のもみじの頃の葉々の色合と、その後の若葉のやわらかな様子など、樟の木はいつもやさしい姿を見せてくれる。

僕の先師で歌誌・歩道の創刊者である佐藤佐太郎先生（昭和六十二年没）は、とりわけ樟の葉の鳴る音を好んだ方だ。

先生の著書「短歌を作るころ」の、第三章「及辰園歌話のなかには、わざわざ「樟の葉の音」という一節を設けていて、その音が「小鈴の音が降りそそぐようないい音」であることや中国の杜甫の詩にも、

五月髣髴、寒蝉を聞く

というのがあつて、自分と同じように杜甫も同様の感受をしていたことを知った驚きなどに言及し、樟の葉の音を心から讃えている。当節に記している先生の歌をここに挙げる。

色彩のある鎧などさむざむし外の樟の木をわたる風音
つつしみてわが居るときは心かろし風にふかるる樟の葉の音
（形影所収）
（同）

風わたる紀三井の寺の樟若葉すがしき下にわれら憩ひき
ここにても樟の若葉は風に鳴る無数珊々の音をつたへて
足よわくなりて歩めばゆく春の道に散りたる樟の葉は鳴る
限りなき稲はみのりてたもとほる村に老木の樟の葉の鳴る

(開冬所収)
(同)
(同)

このように、佐太郎先生がいかに樟の葉の鳴る音を好んでいたかがうかがえるのだ。どの歌をみても先生の独特の声調があつて、樟の葉の音が先生の境涯を象徴する音であつたと読みとれる。すなわち、先生が樟の葉の音にご自身のいう作者の影を重ねていたことがわかる。

この日八月八日は、平成二年の先生の忌日だつた。僕は、本庁の例の樟の老樹の傍を通りがかつて、広々とした木影に秋の気配を感じ、いまは亡き先生のことを思った。「影濃し」は、先生の教えと生き方が「自分に深くしみている」との感慨を表白したつもりだ。

八月八日は、佐太郎先生の没後、遺志を継承されたご婦人の志満主宰をはじめその門人たちから認知され、黄月忌と命名された。師弟の系譜からいけば、先ず正岡子規の子規忌(九月十九日・糸瓜忌または獺祭忌)に始まり、伊藤左千夫の左千夫忌(七月三十日)、斎藤茂吉の茂吉忌(二月二十五日)、そして先生の佐太郎忌(八月八日・立秋忌)と続く。

不肖、弟子の末端の一人だと思つている者として、今後、多くの人たち特に写生を目指す人たちに、生涯を写生短歌に捧げた歌人・佐太郎の忌日「黄月忌」を句に詠んでいただきたいと思う。拙くも詠んだ「黄月忌」俳句の第一号である小題には、そんな思いを込めた。

埋火のごとくに暮れて曼珠沙華

秋彼岸の頃になると、両子の里ではいたるところに曼珠沙華が咲く。子供の頃よくこの花を摘み、首飾りにするなどして遊んだ。

あの独特の冷やかさの首への感触、またいかにも苦みのあるような切口の匂は印象的だ。この花は、親しみと同時になぜか子供たちの攻撃の対象にもされていて、僕も棒でなぎ払ったりして日暮まで遊んだ。

そんなこともあつて、妙に「日暮にふさわしい花」だとのイメージがつよい。何かの本で読んだことがあるのだが、日本人の遠い祖先がまだ照葉樹林のなかで木の実を食べたり焼畑農業をして暮らしていた頃から、曼珠沙華は人々の生活に深く結びついていたそうだ。

受売りにすぎないけれど、曼珠沙華には毒性があつて通常は何の役にも立たないものの、飢饉がきた場合などは、球根の毒を抜いてやると食用になるのだという。それで、人々は人家の近くに植えておいたのではないかとのことだ。

また、曼珠沙華は株がとびとびに殖えることなく毎年ほぼ同じ位置に咲くのだそうで、僕なさやかな推理が一つ成り立つ。

人々が焼畑をしながら次第に土地に根づき、土地への所有意識が芽生えはじめた頃、この花

の特性に気づいた人たちが土地の境界線に沿って植えたものではないか—ということだ。毎年、季と場所をたがわず秋彼岸の頃に咲く曼珠沙華は、無益な土地争いを防ぐための、われわれの祖先の英知の証だったのではあるまいか。

両子でも、大概、田圃の畦に沿って境界を示すように咲いていた。いまでは圃場整備が進んで、曼珠沙華が整然と咲く光景は見られなくなってしまうた。僕は曼珠沙華の背景にきつとあったらう古き良き文化の衰退を嘆くものだ。

小題の曼珠沙華は、両子の拵から少し下った横峯という聚落の川岸に咲いているのを目にとめた。日暮時分で、この赤い花はまさにうずみびのように見えた。懐しくもあり、また遠く過ぎ去った日々が二度と戻らないことへの、悲しみの象徴のようにも見えた。

爺ちやんの墓のべに亦柚子実る

祖父・学の墓は、両子の拵地区から丸小野越しの山道を少し上ったところの、すぐ右手の畑の傍らにある。

隣の狭い畑は、もともとは田圃だった。畑の山側の斜面には富有柿の老木が一本あって、子供の頃、稲刈が終わると家族そろってこの柿をもちで食べた。

いまは、母が大根やホウレンソウなどを植えていて、端の方にはイチハツが生えている。ま

た、この畑の土はとても肥えていて、採れた野菜はみんな味がいい。特に葱の味が群を抜いていると思うので、それについて少し述べたい。

味の良さは実際にこれを入れた味噌汁を試食してもらうのがいちばんいいのだろうが、いわば、葱自体が堂々と自らの存在を主張したような味だ。

いま、大分県の各地域では平松守彦知事の提唱により、有名な「一村一品運動」が強力に推進されている。そして、この運動はアジア各国はもとより、遠くアメリカやブラジルやアフリカにまで名を轟かせている。

この運動に乗じて栽培しブランド化した武蔵葱は、品質がよく評判もいい。

しかし僕がひそかに思っているのは、母がこの畑からいつも採ってきてくれる葱の味には野性味があつて、それこそまさに日本一の味ではないかということだ。

この畑だけでなく、両子さらに西武蔵全域の土が特に葱の栽培に適しているのではないかと思つている。いつかそれをブランド化することがあるならば、武蔵葱（両子）あるいは武蔵葱（西武蔵）として売り出せば、既存の武蔵葱と競合することなく流通に乗り、武蔵葱全体の評価を上げられるのではないかと思う。

ところで、話をもとに戻そう。
この墓の横には柚子の木が生い茂つていて、毎年たわわに実をつけてくれる。その木は田辺家の墓をここよりも一、二百メートルほど上の古墓から移して累代墓にした時、父母によつて

植えられたもので、妙案だったといまに思う。柚子が実る頃になるとこの墓のこと、郷里の両子を思い出させるからだ。

思い出というのは大概、こんなふうには故里の山や川、果樹や川魚など具体的なものと結びついている。

祖父が亡くなつて早三十年が経ち、平成七年には祖母のサトも他界して、いまでは仲睦まじくこの墓に眠っている。

昨年の平成八年には柿と柚子が豊作だったそうで、母から遠く東京奥沢のわが家までダンボール箱いっぱい詰り込んだ「故里の味覚」が届けられ、家族と祖先、また郷里への感謝の念を呼び起こしてくれた。小題は、その柚子を平成二年の秋に詠んだものだ。僕を育ててくれた人たちよ、そして故里よ、ありがとう！

秋水の反すひかりに道祖神

いまから七年ほど前の平成二年の秋、沖大分支部の句会が両子のわが家において開催され、中津市からは当時支部長をされていた殿畑ただしさん、耶馬溪町から江淵溪亭さん、大分市の瀬戸石葉さんの参加のもと、兄・博充の世話で実現した。総勢十数名の参加だったと思う。句会は終始和やかな雰囲気のもとに進行し、披講や合評も終え歓談に入っていた頃、誰だっ

「たかは定かではないが、せつかくだから、両子寺に吟行にくり出そうじゃないか」と言い出した。そして、その案内役を僕は自ら買って出た。久しく両子寺に行つてなかつたので、すぐにその気になつたのだ。久々に訪れた両子寺はすっかり秋めいていて、境内は爽やかな山の空気に満ちていた。本堂の上手の庭は静まり返つていて、和尚ご自慢の「時雨紅葉」なる楓の古木は少し紅葉を見せはじめているところだつた。庭は、僕がまだ小学生だつた頃よく遠足の時などに集合していた場所で、当時から楓の古木はあつた。庭の一角には、六郷満山仏教文化に関わる石塔やお地藏様などが置かれていて、それらに混じつて道祖神もあつた。道祖神はもともと旅人の安全を願つて建てられたものだから、おそらく他の場所にあつたものをここに移設したものだらう。両子寺はかつて杵築藩の松平侯の菩提寺だつたそうで、よく殿様の一行が参詣したとのことだ。また、いまに伝わる峰入りの行事からもわかるように、山岳信仰とも密接な関係にある天台宗の古刹であるので、かつては「大満坊」の名に残るとおり多くの修行僧を擁していたそう

だから、むかしの両子には旅人も多く、道の要所に道祖神が建てられていただろうと推測できる。

さて、この日の吟行はというと、本堂を拝した後に奥の院に参詣、参道の途中から鎖場を上り、針の耳、鬼の背割などを巡った。

途中、森のなかで自生の椎茸を見かけたりして楽しかったけれど、久しぶりの山行だっただけにかなり疲れた。

散策の順路を一通り終えて境内に下つてくると、午後もかなり闇けていた。秋の日差が境内に遍くふりそそいでいた。ふと道祖神に目をやると、石鉢に湛えた清水に反射する光がその顔にやすらかに揺らいでいた。僕は別作の、

安請合して山案内草じらみ

のとおり、大奮闘のうえ疲れてしまった。それでも、一行の満足そうな顔を見ると心は爽快だった。

どぶろくも相伴となり山の寺

両子寺は生家から約半里ほど上手にあり、さほど遠くもないことから、子供の頃よく親しみ遊んだ寺だ。副住職の寺田豪明ちゃんは三つ四つ年上で、僕にも「ちゃん付け」で親しく呼ん

でくれる。

前題と同じ吟行の日、沖大分支部の面々を案内していると、境内に面する寺務所で御札売場に出ている豪明ちゃん、僕の姿を見つけるとすぐにここにこして、

「セイちゃん、今日は何事かええ」

と、気さくに声をかけてくれた。

一行は俳句を作る人たちであること、そしていまは吟行をしているのだと説明すると、何でもその日は特別に参詣者に対してどぶろくをふるまっているとのこと、僕たちもご相伴に預かることになった。

故里とは本当にいいものだ。自分を忘れずにいてくれる人が、まだまだこの村にはいるのだから。

両子寺は、歴代の住職がその名前に「豪」の字を冠するなど、古い伝統を大切に守ってきている寺だ。住職、つまり豪明ちゃんの父上は豪延さんという方だが、長野の善光寺の副住職ですすでに務められたなど、天台宗系の寺院としてかなりの位置にある（詳しくは当寺編纂の「両子寺縁起」という本を参照されたい）ものと思う。

また、この村に生れた享保時代の自然哲学者・三浦梅園も、自作の漢詩に「上二子山」というのを遺していて、両子寺に親しんでいたことが窺われる。

ただ一つ残念に思えるのは、両子寺や両子山を詠んだ詩歌が極めて少ないことだ。地元の歌

人・財前国雄氏の、

苦しきとき悲しきときにわが向かふ両子嶺ばかり親しきはなし

の歌碑が、無明橋の辺りの仁王像を過ぎた旧参道の途中にあるのと、ほかに金田一京助氏だかの歌碑があるのみだ。

つい数年前には、安心院町の歌人・加来進氏が両子山を詠んだ力作がある。それは、紅葉のまだ衰へぬ高山の両子明るし空につづきて

という歌だ。そんなわけで、故里を愛する者の一人として、この吟行では両子山や両子寺の句をたくさん作ってもらいたいと思いつつ、案内役を買って出た。

さて、この日のみなさん方の成果はというと、いまだに僕も知らないままだ。

ましてら苜置かれて無人販売所

文芸人としての先輩にあたる索嶺さんは、僕と同じく歩道短歌会に属する同人なのだが、俳句の方は結社に所属することなく、長年新聞投句でやっておられた。

索嶺さんの入選句の選者を挙げれば、水原秋櫻子をはじめ富安風生、安住敦、皆吉爽雨、中村草田男、大野林火、楠本憲吉、加藤知世子、石塚友二、加藤楸邨、中島斌雄、原裕、飯田龍太、森澄雄、能村登四郎、鷹羽狩行、金子兜太、石原八束（順不同）と錚々たるもので、そ

のまま俳壇の歴史が見えてくる。

僕が俳句を始めたての昭和五十八年頃、たまたま仕事の関係で三年間東京に勤めたので、それを縁として、当時葛飾のお花茶屋でスナック喫茶「山」を開業していた索嶺さんに、俳句の指南をもらう機会を得た。

索嶺さんは大変に博識な方だ。もともと登山をよくする人で、関東圏の山ならどんな低い山でも登っていない山がないというほどだから、山はもちろんのこと、草花や昆虫や鳥などに詳しく、そのほか特に絵画には深い造詣をもつていられた。

「山」には、近作をなるべく用意して土曜日の半ドンを利用して顔を出し、夜の十時頃まで水割付きの俳句談義をしたものだ。

索嶺さんは、葛飾辺りにまだ蚊柱が立っていた頃から育ったという生粋の江戸っ子で、会話の気づぶがよく、冗談も上手いときているので、店には索嶺さんを慕って集まってくる客が多かった。そして客どうしの友好の輪が広がっていた。

僕に最初に索嶺さんを紹介してくれた大介君や、彼の会社の同僚の松本さん、青野さん、永富さんのほか、葛飾区内の双葉短歌会に所属する平野さんや中埜さん、さらにT誌同人の沼田さんなど多彩な顔ぶれだった。

歩道の大先輩にあたる深山隆さんに会ったこともある。深山さんは初学の僕に対し、
「何でも相談してくださいよ」

と言つて励ましてくれた。

だから僕の文芸に関する創作意欲は、先ず葛飾において育まれたと言つていい。また索嶺さんは、高尾山や秩父の日向山や、山梨の東沢・西沢溪谷などいろんな所へ案内してくれたり、都内のあちこちの公園へも散策に誘つてくれるなど、僕の受けた恩恵は計り知れないほどで、心から感謝している。

平成二年、別府に帰つてすでに四年目になっていたが、東京では大介君たちを発起人として索峰さんの長年のご交誼に感謝しかつ還曆を祝うため、その年の八月に別府市の杉乃井ホテルにおいて開催されることになっていた、歩道全国大会に出席してもらおうという話が持ち上がり実現した。

大会は、遠くは北海道などからを含め全国の会員二六名の参加のもとに盛大に行われ、主宰の佐藤志満先生をはじめ香川美人氏、吉田和氣子氏、和歌森玉枝氏、秋葉四郎氏、青田伸夫氏など中央からの有力な先輩諸氏を迎えての歴史的な大会となつた。

僕は、大会の実行事務局長の加来進氏から事務補佐の役目を仰せつかつていたので大忙しかったが、それでも索嶺さんが別府に來られていたので大張り切りだった。

大会が無事終了した後、索嶺さんには別府のわが家に宿泊してもらい、翌日、国東半島をふたりに巡ることとした。

その日は、朝から秋晴のすがすがしい日だった。別府を出発して、真木大堂から富貴寺、熊

野磨崖仏をみて、両子のわが生家にも立ち寄ってもらった。

その後行つたのが、索嶺さんが以前から大きな関心を寄せていた三浦梅園の旧居だ。中間子パイオンを発見した、ノーベル物理学賞受賞者の湯川秀樹博士も二度ほどここを訪れ、梅園の作つた星宿図や天球儀、さらには木製顕微鏡などを絶賛したという。

旧居には現在も子孫にあたる方が居住されていて、相変らず享保時代さながらの趣を伝えていた。

その日、訪問者の対応の手伝いをされている洲上さんの懇切丁寧な説明を受け、こんなことは恐れ多いのだが梅園先生の位牌を胸に抱くことができ、索嶺さんともどもいたく感動した。梅園先生に直にまみえたような感動だった。

僕たちはこれまでの因縁と友情をお互いに心から祝福し、文芸をそして人生を極め得んことを位牌にお祈りした。

充実した気持で旧居をあとにし、坂道を下ってきた所に、小題の無人販売所があった。しかも珍しいことに別名でましら茸ともいう猿の腰掛が堂々と商品になり棚に載っていた。

文学的気分が高揚していたためか、小題の作は一気に口をついて出て、索嶺さんの前で誦したまま一切の推敲も加えていない。索嶺さんの、

「悪くはないね」

の言葉に氣をよくしながら、次の目的地へと向かった。かくして、索嶺さんの還暦を祝う旅も幕を閉じようとしていた。

第
九
章

心
の
山
河

冬 毎三十路の端にわれの立ち

平成三年一月十二日のわが生日は、三十九歳となりまさに三十路の崖つぶちに立つたという気がしていた。なぜそんな気持ちになったのかさして理由は思いあたらないのだが、あるいはこんな感慨だったのかもしれない。

「いよいよ三十路も最後の年か。四十歳ともなると、五十歳へとまっしぐらなんだろうなあ。人生の下り坂も目前か」

なるほど、僕はいますでに四十五歳になっていて、あの時思ったように五十歳が目前だ。が、当時の心をじっくりと思い起こしてみると必ずしも悲愴感だけではなく、四十歳になったら切実に人生と向き合い一人の男子として何かを為さねばなるまい、との気迫が高揚していた感じもする。

僕はこの年に、それまで両立を目指していた俳句と短歌をどちらか一つに絞るべく熟慮をした。その結果、自分の内に以前から認めている抒情性を生かすためには短歌の方がふさわしいとの考えに至り、俳句を断念することとした。

「これからは一念発起して、持てる力を写生短歌に傾注しよう」
との決断は、ある意味では、それまでと同様、自分の心のなりゆきに素直に従っただけだと

いう気がする。俳句の限界にはうすうす気づいていたからだ。

それまでも、僕は自ら決断し自ら行動してきた。

高校三年生の夏もそうだった。進学クラスにいた僕は、周囲の反対をよそに就職への転向を決めた。また、その揺り返しのように会社人から浪人生への転向も決断した。そして大学後期にそれまで予想だにしなかったホワイイトカラの道に進むための受験をしたのもみんな自らの判断においてしたことだ。

また就職して二年目の昭和五十一年の頃、自分の弱い性格を改造しようと少林寺拳法の道院の門を叩き二年間の猛練習で二段を取得したのも、その五年後に、自分の未知の力を試そうと文芸を志したのもすべてそうだ。

だがとりわけ平成三年の写生短歌への決断は、最も意味に満ちていたといまでは思う。

短歌を通して人格を研ぎ、純粋な心で自分を取りまく社会をみつめてみたい、一生を価値あるものにした、という自己の人生に関わる決断だったからだ。

三十路の端における一つの選択は、単なる趣味上のことではなかった。

春風邪のこれほどの鼻水はどこから

何事もそうかもしれないが、何かを真剣に志向してある域に達すると、

「はこうしなければいけないんだ」

との気持が段々つよくなってきた。しまいには義務感で身動きできなくなることもある。

僕にとつて俳句の場合がそれで、もともと楽しみに勉強していたものが、当初の感動もうすれて心が変に窮屈になつてしまつていた。それが俳句を離れて、

「俳句などは遊び心をもつて、好きなときに好きなように作ればいい。誰からも良いだの悪いだのと言われることはないんだ」

と開き直つた気持になつた時、たまたま小題のような作が生れた。

これは、僕が短歌を志向して俳句の呪縛から逃れた直後のもので、題材もこれまでのと全く異なつた鼻水を扱っている。

「この日、風邪をひいていて、鼻水がとめどもなく出ていた。そんな時、これほどの鼻水はどこに詰つていて、どうしてこんなに出てくるんだらう」

などと、くだらないことを考えつきそのまま俳句にした。

破調にはそのまま僕の自由な気持が出ているし、少し気取つて山頭火のような自由律の調子も入っている。

こんな作は価値を認めない人の方が俳壇にひしめいているに違いないが、僕自身は形式に束縛されないさばさばとした心情が出ていて気に入っている。

さて、最近出版された本に在日韓国人のカン・キドン氏の「身世打鈴（しんせたりょん）」

がある。

これは普通にみれば一般の句集と何ら変りはないのだが、在日と呼ばれて育った作者であるからか、本書はいわゆる「句集」ではない。俳句という表現形式による一人の在日韓国人の自叙伝であり、パンチヨッパリ（半日本人）と呼ばれる男の精一杯の抗いである。との記述を敢えて後記に述べているほどである。

日韓両国の不幸な歴史に呑み込まれ、日本に生れ育ちながら日本文化を受容しがたい心情をもつ作者。一方で、容赦ない運命は作者に、日本語を読み、書き、話さざるを得ない境遇を強いている。

作者はその境遇に目をつむることなく、却って逆手にとって自己の存在性を社会に訴えようとした。作品の一つびとつは僕の心に突き刺さるほど衝撃的だった。五句紹介する。

名を問はれ生姜の姜の字と書く灼け地

燕歸る在日われは銭湯へ

告白の後のむなしさ青林檎

キムチ提げ金借りにゆく野分中

白木槿咲かせ一家の秘密かな

句集と呼ぶか否かにさえ拘らざるを得ない心の屈折と慟哭は、そのままエネルギーとなつて作者の存在感を際立たせている。

この自叙伝を読んでいくうち、俳句形式のもつ強さを逆に感じる一方、現代俳壇の作風に少なからず疑問を抱いた。

平たく言えば、作品に重厚・軽快は当然あってもいいとは思いますが、そこにはやはり作者の生命の響がなくてはならないのではないかと、ということだ。

生命の響のある作品は、巧拙はどうあろうとも、それなりの価値があるのだということを確認する。その意味でこの「身世打鈴」は、今後僕の詩の価値の軽重を自ら判断する上での貴重な尺度になったと考えている。

また、そのことよりも、今後世界において、民族が互いの文化を素直に受容し、かつ国と国とが互いを讃え合えるような関係を築いていかなければならないと感じた。

小題と「身世打鈴」の話題にはかなりの乖離がある。だが、詩というものはきれいごとではなく真の声が必要だとの自覚を促す意味から敢えて引用した。カン・キドン氏の今後のご活躍を心から祈念する。

日脚のぶだらんと停る寝台車

冬から春へと季節が向かい日が少しずつなくなっていくことを、文人は「日脚のぶ」等と言い、古くから多くの詩歌を残してきた。そしてそれらは、人々の春を待つ素朴な心を伝えて

いる。

街路樹の梢にまだ昏れなずんでいる茜の空を見る時や、辛夷の蕾がすっかりふくらんでい
る光景、また路傍に植えられたチューリップが花茎を日毎に伸ばしているのに気づく時など、
「ああ、日がながくなってきたんだなあ」

と感じることが僕にもあった。

厳しかった寒さがやわらいでくると、強張っていた肩や頸の力も緩んで、心もおおらかにな
ってくる。季節の移り変りは、こうして量りしれない感動をもたらしてくれた。寒さに弱い僕

も最近、

「冬の寒さがあるからこそ、こんなに春を素晴らしいと感じられるんだ」

などと、達観したような考えに至ることがある。

平成三年のこの日は、大分駅のホームにおいて、伸びた日差のなかに出発を待っている寝台
車にいたく感動した。

緊張感なくだらんと停っているさまは、まさに春そのものだと感じた。

そして寝台車の放つ独特な旅情と相俟って、一時、不思議な安堵感を与えてくれた。

磯巾着残潮の中とは知らず

県の南部に佐賀関町という漁業と製錬業の共存する町がある。いまではこの小さな町も、ブランド化された鰯と鯖で全国的に知られるようになった。

豊後水道のなかに潮流の速い「速吸瀬戸」と呼ばれている所があつて、その急流でもまれて育つ魚だから身が緊つて味がいいのだという。

「関あじ」、「関さば」がそれで、いまではすっかり高根（高値？）の花になつた。

わが家族は平成三年の頃、町の中心部を少し南に抜けたところの海岸が景色もよく小魚も釣れ、泳ぎもできるので、よく遊びに行つていた。

そこには、かなり大きな岩山が海に突き出た所があつて、手前の渚では一家族くらいならゆるりと泳げるので、休日に来て半日ほどを過ごすには最適の場所だつた。

しかも都合のいいことに、その場所は誰にも知られていないらしく、いつもわが家の独占的状态にあつた。それで、「わが家の専用海水浴場」などと呼んでしばしば出かけてきていた。

この日は、干潮にあつていた。

岩場のたくさんの窪みには海水がとり残され、いわゆる「忘れ潮」になつていた。子らとともに見ると、磯巾着が常と何ら変わらず、触手を悠悠と広げて揺らいでいた。

磯巾着は、自分の世界を僕たちに見透かされていた。

しかも、干潮によつて海からとり残された潮の中に自分たちがいるのだということを知らない。そんな磯巾着が微笑ましく、憐れでもある。

ひるがえって僕たちの日常生活においても、知らないのは自分たちだけ、なんていうのが案外多いのかも知れない。

ともかく、海へ行くとそんなささやかな発見もあって、たまの休日は何倍にも楽しい。

その後、この「わが家の専用海水浴場」にも来訪者が増えてきて、僕たちも自然足が遠のいてしまった。

加えて、いまでは息子が高校二年生、娘が小学六年生にもなり、別府と東京に家族が分離生活を余儀なくされるなど、わが身の生活環境の変化も慌ただし。

そんなわけで、わが家にとつて最も楽しい時期だったのはきつとあの頃だったろうと、そんな気がしている。

山頂のそれも岩の上若葉寒

県北部の、中津市に隣る三光村という小さな山村に、八面山という美しい山がある。

乾椎茸の中間取扱業者をしている兄が、中津の同業者に自分の集荷した椎茸の入札を委託するといので、僕は時間潰しも兼ね、トラックに同乗することにした。

兄も俳句を作っているし、道中のトラックの中ではさぞかし楽しい俳句の話になるだろう、それにちよつとした旅も面白いじゃないか、と思つたからだ。

案の定、道中は俳句談義に終始し、楽しい一時となつた。

中津で積荷を卸し入札の委託をすませた後、近くの八面山にまだ登っていないことを僕が言

いだしたところ、兄が連れていつてくれることになつた。

そんな時間に時間もかからず山麓に着いた。そこは何宗かは知らないが、修験道の修行場を併設しているお寺で、先ず大きな寝釈迦が僕の目をひいた。

客も多かつた。また、近くで滝垢離をしているというので、早速そこへと足を運んだ。白衣の行者が念仏を唱えながら修行の最中だつた。自己を研ごうとしている人の姿は、僕たちの目にも清々しかつた。

山麓の寺をしばらく巡つた僕たちは、いよいよ八面山の山頂へと車で向かつた。曲がりくねつた山道をトラックで上り始めると、折しも若葉の頃で、少しひえびえとした空気も気持ちいい。道の傍らのさほど有名でもない「名水」も通り過ぎた。

突然に視界が開けると、眼下に中津市方面の明るい田園地帯が広がって見えた。しばらくして頂上附近に到着した。トラックを降りて若葉の匂のあふれる山道を頂上と歩いた。季節はずれの底冷だつた。

頂上は、さして展望がきくわけでもなく、大きな岩が横たわっているだけの、狭い原っぱの

ような所だった。

でも、とにかく静かで、ときおり小鳥の囀る声が聞こえる。

「兄弟でこんな旅ができるのも、そうめつたにあることではないな」

そんなことを思いつつ、岩にはい上がってみた。そこは結構広くてふたりでゆつたりと腰を下ろすことができた。

若葉の匂、山の静寂、小鳥の囀り。

山の心地よさを満喫しながら、僕たちはこの日の機会をともに喜んだ。いささか、若葉寒が身にしみつつも。

露草のいづこにもわが生れし村

露草は、深く澄んだ藍色の花がとても印象的だ。そして花の色にはどこか寂しさを湛えているようだ。何かの本に読んだのだが、いにしえ人が初めて手にした青色は、露草の花弁から採りだしたのだそう。

そのむかし、人々は、手にした青色を絵や布の染料に用いたのだろう。

しかし、僕の郷里では、露草は人々にあまり歓迎されない存在だ。なぜかというところ、この植物は繁茂力がめつぼう強く、ひとたび稲田に侵入すると抜いても抜いても殖えていき、ついに

は稲がそれに負けてしまふのだそうだ。それで、稲作を営む農家の人たちには一向に好かれないのである。

でも、僕は夏の終り頃から秋にかけて咲くこの清楚な花が好きだ。露草の咲く西武蔵の、両子の山河が好きだ。

かつて、田舎は活気にあふれていて、特に田植の時などは村人がこぞって稲を植え、子供たちも大勢出て手伝をした。小昼の時などは、代田の一角に筵を敷いて小座を組み、おにぎりや自家製の蒸しパンなどを賑やかにお喋りをしながら食べた。

そんな時代も、いつか機械化が進み家ごとに独立して、やがて都市への人口流出が加速されると、田舎はすっかりむかしの面影をとどめないまでに寂しくなった。

何かしら大きな時代の力が、村を変貌させてしまった。農村においては生活できない状況を作り上げてしまった。

その力はどこから押し寄せてきて、どのように村を蝕んでいるのだろう。西欧の合理主義、実用主義が、仮睡していた日本人の物欲を覚醒せしめて、村の人たちを物あふれる都会へと駆り立てたのだろうか。

露草が繁茂し稲田にはびこっていくように、何かがわが国の古き良き農村にとつともない規模と速さで増殖を続けているように思えてならない。

利害の相反する象徴と考える露草と村、その両方が僕は好きだ。

もしかして農の血の薄れた僕の眼が村を客観し、村の外に生活基盤をもつ人種として、花としての露草を愛でるようになったのだとしたら。そんなことを思うたびにやるせない寂しさと憤りがこみ上げてくる。

故里はいままさに露草の目に顕つ村となつた。そして、これまで村を変貌させてきた力はあまねく風土を支配しているかのようだ。

可笑しともあはれとも夜の法師蝉

夜に鳴く蝉の声はいかにもはかなく、季節の移りゆきを感じさせてくれる。秋の深まりゆく頃、先ず油蝉が熱情的に夜更まで鳴く。その粘りつくような強い声は却って痛々しい。

油蝉が声をひそめると、終章らしく法師蝉が夜の主役を引き継ぐ。夜も更けた頃、突然鳴き始めたかと思うとすぐに鳴きすぼんでしまうものや、遠くの闇のなかでしきりに鳴いているのは、滑稽ともまた哀れとも聞こえる。

時々思うけれど、わが国に俳句や短歌など世界でも稀な短詩型が根づいたのは、四季に富んだわが国の風土が人々に、はかないものを思いやる心を育んできたからではあるまいか。

「はかないゆえに尊い」という、いわば嘆きから悟り、消極から積極、否定から肯定への、現実的で積極的な思慮が

そこには窺える。

そこにこそ短詩型の生れる必然性があつたはずだと、僕はひそかに思っている。

瞬間的な命の感受、それは詩型によつて永遠の生命を得る。だから、これを表現するには間延びは許されない。

詩型の心的カテゴリーに対する客体からの限定の要求に応えるには、それなりの気迫が要るのである。

作者は、広漠たる対象のなから真に自己の實在に働きかけてくるものに耳を澄まし、目を凝らし、把握し収束させなければならぬ。

まさに、詩型を土俵にした主と客のせめぎあいこそが、創作現場の実態であり、作者の生命の燃焼だと言えるだろう。

四十歳代への決意をしてよりほぼ二年の平成五年、僕は専門歌人としての新しい道を歩み始めていた。決断の後、東京上目黒の発行所を訪ねて志満主宰に面会し、佐藤佐太郎先生が新しい境地を拓かれた近くの蛇崩坂を歩いた。その後、自分の決意を込めて書いた歌論「佐太郎短歌と實在論」が歌誌歩道に採用され掲載された。また、自己の境地をさらに深めるため西田哲学への傾倒を敢えて選んだのもこの頃だ。

何かを予感させるようなこの夜の法師蝉、そのひたむきな声をいまも思い出す。

第
十
章

鮫
鱧
鍋
と
真
砂
女
さ
ん

花冷の酒亭いろりにたどり着く

大分市内の中心部に若松通りという洒落た通りがある。この通りは、ここから約七十キロも隔たった両子の里に生れた僕には、かつて憧れの場所だった。

僕がまだ小学二年生だった昭和三十四年頃、初めて父母に大分市に連れて来られたことがある。市内中島に住んでいた父の実兄の許を訪ねた時のことだ。

その日はちょうど七夕の時期で、通りはきらびやかな七夕飾りで装われていた。飾りには百円札や五百円札など本物のお金が吊るされているのもあって、田舎育ちの僕は都会の豪華さにと胆を抜かれた。

その後ずっと行くことがなかったのだが、若松通りの思い出は僕の脳裡にしつかりと刻まれていた。

約十年後の高校三年生の時、バイクに乗り始めた僕は、大分市内の高校に通っていた幼なじみの友人を何度か訪ね、若松通りと一緒に歩いた。

確か通りに面していたと思うけれど、カレーライスの店「アジャント」というのが、友人からの口伝により田舎にも名を馳せていて、そこへ足を運んだ。

映画館では「グランド・ロキシー」がその名の品の良さとともに田舎学童には有名だった。

そんな僕が、大学卒業後、勤めの関係でこの通りを歩けるようになったことは大きな喜びだった。都会の人間になつたと実感できたからだ。

さて、小題中の「酒亭いろり」だが、この店も若松通りにあるのと、僕はつい先頃まで思い込んでいた。ところが、大通りを隔てて少し離れた都町にあるのだと知って、いまさらながら自分の感覚を疑つた。田舎者たるゆえんだらう。

この店はシツクな和風の酒場だ。平成七年に僕は二度目の東京転任となり、慌ただしい日々を始めていたのだが、着任間もない頃用務により帰郷し、職場の古くからの同僚たちと歓談の場をもつた。その二次会でこの店に立ち寄つた。若松通りまでも歩くのかと思ひながら。

この日はちょうど花冷といわれる頃で、肌寒いなかを歩いて、この店の暖かい小座敷に上がり込んだ時はみんなほつとした。

僕たちはすぐに寛いで場は盛り上がり、当然のことながら酒量は増えた。

話が花冷のことに及んでいた時、たまたま女将が挨拶に出てきて話し込んだのだが、何でも女将は俳句に興味があるとのこと、僕が少しかじっていることを話すと、その場で一句を色紙に書いてくれということになつた。

戸惑つたが、かと言って口に出した手前断るわけにもいかず了承した。すると、女将はそれはご丁寧にも立派な色紙に加えて、小さな品のある硯と毛筆を持つてきた。

僕は、その場を凌ごうと必死に作句に努め、辛うじて小題の一句を得て色紙に書き終えた。

句は、いろりという名の本来もつ懐しさと温もりを、花冷のなかを来てこの店に入った時の安堵感になぞらえたものだ。

酒席での安易なお喋りを発端とした作句依頼に対し、僕は何とか面目を保てたのだが、花冷に加えていささか肝の冷えた出来事だった。

サルビアの炎を前に佇ちつくす

平成七年に二度目の東京勤務となったが、前回の勤務との九年間のブランクは大きかった。年齢のためか都会に対する高揚はなく、前に感動した場所だからとわざわざ等々力溪谷を訪ねた時などは、家族で楽しく弁当を食べたことのある公園の草原が整地され、「寺境内」の看板がど真ん中に立っているのに愕然とした。

年月が経ったというより、自分の感性が年齢とともに変ったのだと気づいた。今回の在京生活は、専ら目黒区の蛇崩坂周辺に焦点を置いた。蛇崩坂といえば先師佐太郎にゆかりの深い場所であるし、歩道編集部の仕事を手伝い始めた関係で、この坂を歩いて上目黒の発行所まで通うことが多くなつたためだ。

慌ただしい勤務の合間に歩く蛇崩坂は僕の救いだつた。荒々しい都会への情熱などでなく、もつと大人びた静かな情熱をかきたててくれたから。

さて、小題のサルビアは、僕が出張で帰県した時大分市内で見かけた。この時の真紅の強烈な光を放つサルビアに、僕は若者特有の熱情のような強い印象を受けた。

若い頃、自分の内に滾る熱情はとめどもなかつた。サルビアの放つ炎のような輝きにはそれに似た強さがあつた。

このサルビアを目にした時、僕は、自分の内に残っていないかつての炎のような都会への憧憬を思い、しばらく茫然と佇んだ。

過ぎた日々は二度とは帰らないが、いまの僕にはあの頃とは違った静かに燃える炎がある。それは、幾多の屈折を経て僕の内に新しく起こった炎だ。これからは、この炎を大事に燃やしつつづけたいと、その頃から思い始めた。

桐一葉散る青ければ直に落つ

虚子の有名な句に、

桐一葉日當りながら落ちにけり

がある。大きな桐の葉が、滞空時間をゆったり保ちながら散ったところを捉えたものだ。この虚子の作品は、中七の「日當りながら」が実に空間的な感じが出るように働いていて、リアルでしかも自然の大いなる秩序を背景に感じさせる名句だ。

僕のは、都内を歩いていた時の囁目だ。初秋の頃で、街空は爽やかに晴れわたっていた。勤のちよつとした合間に舗道を歩いていたのだ。突然目の前にガサリと音を立てて、大きな桐の葉が落ちたのである。その葉は、黄葉というよりも緑がかっていたので、あるいは病葉だったのかもしれない。

僕の脳裡には冒頭に掲げた虚子の句がしつかりと刻まれていたので、それとは異なった散り方に遭遇したことが嬉しかった。

まだ生々しい葉は滞空時間が短く一気に落ちた。それを何とか表そうとして、「青ければ直に落つ」が浮かんだ。

僕の気に入っている禅の語に、「忙中閑」というのがある。忙しい日常のなかにも、心の持ちようによつては心のゆとりすなわち「閑」がある、との教えだと理解している。平成八年のこの日、僕はこの一枚の桐の葉の散った音に忙中の閑を感じ、ひととき心が和んだ。

ふるさととは涙ふつつふつ鮫鱈鍋

この頃僕は、職場の人間関係がしっくりいかず、自分の生き方そのものの是非を心の内から問われていた。

自分としては、「自他不二」ということを理想に掲げていたので、自己主張に偏ったり他人を斥けることを敵に戒めていたのだが、にもかかわらず、職場の雰囲気は自分に対して日増しに冷たくなつていくのを感じていたからだ。

僕としても、理想と現実がそんなにたやすく一致するものではないことを理解してはいた。だが、両者がこれほど乖離するなど夢にも思わなかった。

僕は周囲に弱音を見せるわけにもいかず、悶々としつつも表面では必死に明るさと積極を演じようとしていた。

そんな僕の不自然を察知してくれてのことか、古くから親しくしてくれていた職場の先輩の長尾さんから、

「誕生日をしてやるので、家に遊びに来ないか」

との、ありがたいお誘いがあった。僕は、助け船も来るものだ、感謝の念を抱きつつこれをお受けした。

長尾家では、夫妻が心を込めた手料理の鮫鯨鍋を用意して迎えてくれた。僕は、苦しい気持が内に充満していたためか、そんな心づくしにいたく感激し、楽しい酒に一気に酔がまわってしまった。

いつか話が俳句に及んだ時、

「今夜のありがたいもてなしを心にとどめおけるような一句を作りたい」

との衝動に駆られた。それが成ったのは、胸を張って言えることではないが、小用に行つた時、その場においてだった。

この作は、どこで切つて読んだらいいかわかりにくいだろうと思う。僕としては、「涙」の後で切つて、切れたか切れなにかの感じで「ふつつつ」につないだつもりだ。だから、

故里はいまの僕には泪そのものだ、その泪がふつつつあふれてくるようにふつつつと、鮫鯨

鍋が家庭的な温もりのある音を立てている」と言つたことになる。

句の善し悪しはもはや第三者に委ねるほかはないが、ともかくも、長尾家のご厚意に感謝する句の成つたことは、酒鬼の唯一の手柄だつた。泥のごとくに酔つぱらつて調子に乗り、一句が酩酊のうちに半紙に落ちてしまつたことを付言する。

どてら着て子に夢を説く漱石忌

明治、大正の文豪・夏目漱石の忌日は、十二月九日だ。

平成八年のその日、僕は久々に別府に帰省し、例によつて信子の実家、広岡家に泊めてもらった。広岡家には高校生になつたばかりの風太と愛犬ロブの面倒をお願いしていたからだ。

久々に再会した風太は、すっかり高校生らしくなつていた。僕は、自分と対等に話ができるまでに成長した彼にいたく感動しながら、義母から借りたどてらを着て夜遅くまで話をした。

その時、
「風太に教えることはもう何も無い、自分の力で堂々と社会に出ていくに違いない」と思つた。ただ一つだけ、

「とにかく、一生夢は追いつづけるよ」と、きつぱり伝えた。はや四十歳代半ばを過ぎた僕でさえ、いまだに夢を捨てないでいるのだ。未知数の自分、その可能性をひたすら信じて奮闘をつづけているのだ。君のことだから心配してはいないが、早く僕を踏み越えて、さらなる夢へと駆けていってほしい。ということ

何かの本に読んだけれど、夢すなわち理想は、求めつづければ必ずその方向において一部は実現するものだと思つた。

僕もその通りだと常日頃から思っている、それをはつきりと彼に伝えておこうと思つたからだ。

偉大な漱石とまではいかなくてもいい。まずは自分の力で堂々と生活し、夢を絶やさない大人に育つてほしい。

去年今年あはきは四十半ばかな

四十歳を過ぎた頃から、手足の関節に痛みが出たり、両手が朝起きた時にむくんでいたり、しまいには手指の関節にまで違和感を覚えたり、風邪なんかもよくひくようになった。

子供の頃は病氣一つしたことがなかった僕だけに、突然始まった身体の異変には面食らつて

しまった。

いままでは、その頃から老化現象が自覚され始めたのだらうと、当然のことのように受けとめていた。

母もちょうど四十歳の頃、頸や肩などの異常を訴えて別府市内の病院に入院し、よく牽引などの治療を受けていた。

血の濃さはこんなところにも出るのかと思うことしきりだ。母にいつだったか、このことを告げたところ、

「やっぱ親子はよう似ちよんのじゃわ、心配すんなえ、五十になつちからびたつと治るわい」と慰めてくれた。それで、僕もあと数年したら調子が元に戻るだらうと樂觀している。

ところで、ここ数年、大晦日の年越の感動がうすれてきた。両子に帰った時でも、東京に暮らしている前年も前々年も、同じように感動が少なかった。

かつては除夜の鐘を聞きながら一年をふりかえり、感動のなかに新しい年を迎えたものだ。飲む酒は旨いし、家人との団欒も最高に盛り上がった。

老化の触手は何と多岐にわたるのだらう。小題は、四十五歳になつた自分の境涯を「去年今年（年が改まる時の実感）が淡い」との思

いに集約した。いまや五十歳も目前の僕。これから僕はどんな人生へと歩を進めていくのだらう。

「ともかく、
人生を徒に嘆くことなく、新しい境涯を素直に受け容れていこう」
と、そんなことを此の頃思い始めた。

胡麻和の芹も旨しよ真砂女さん

銀座の並木通りのはずれになる一丁目、幸稻荷の近くの路地に小さな小料理屋がある。「卯波」というどこにでもあるような店のだが、暖簾を一旦くぐると、俳句を少しかじっている人なら驚いてしまうに違いない。

有名俳人の真砂女さんが、にこやかに迎えてくれるからだ。

店は昭和三十二年の開店だそうで、真砂女さんがずっときりもりして来られた。言うならば真砂女俳句の原点の場所だ。

最初にこの店に僕を案内してくれたのは、俳人の道生さんだ。平成七年、僕が東京に転任になつて間もない頃、道生さんに転任の旨を電話したところ、一緒に銀座で飲もうじゃないかという事になった。その一次会が卯波だった。

僕は、卯波のことをいぶん前から知ってはいたのだが、実際に行ってみると一種独特の文学的趣が漂っていて、圧倒されてしまった。確か、開店当初の頃は川端康成氏をはじめ多くの

作家が訪れ、その後は有名俳人たちの集まる店になったと聞いていたからだ。

それでも、少し酔がまわつてくると、大先生を前にしかも初めての客だということもわきまえず、俳論をぶつけた記憶がある。

真砂女さんは、そんな荒っぽい僕にも温和な顔と口調で相槌を絶やさなかった。

真砂女さんとすっかりうちとけたのは、僕の郷里・国東半島のことには話が及んだ時からだ。

六郷満山仏教文化の話や椎茸づくりの話にとても関心を示し、中原さんに向かつてまじめな顔で、今度は国東半島に吟行しようじゃないの話をもちかけていた。

帰りぎわに真砂女さんの句集を二冊購入したところ、エッセイの「お稻荷さんの路地」と、当時主宰していられたNHK俳壇の台本を一冊わけてくれた。当然にして目の前で一句を書いた上で、署名をしてくれた。エッセイの方には、

今生のいまが倅せ衣被を、そして台本の方には、

鯖火燃ゆねむりふかきは女かな

をペンで書いてくれた。両方ともわが家の宝だ。

その後、卯波に行く機会を失っていたが、平成十年の三月になって東京での三年の任期も終りに近づきほぼ帰郷が確実になった先日、小説家で僕の上司でもある手嶋大記氏を是非この店に案内しておきたいという気になった。ともに帰郷する可能性がよまっていたからだ。思いつけ

ばすぐ実行。手嶋氏にその旨を話すと、すぐに話はまとまった。前日に予約を入れて卯波に行
った。

真砂女さんは終始にこにことして、お元氣だった。ただこの日は真砂女さんと話そうなどと
いった計らいはせず、ふたりでじっくりと偉大な俳人の店の雰囲気を楽しめることとした。お
湯割の梅干入り焼酎を飲みながら、真砂女さんの心のこもった茹芹のおひたしや薺の煮つけな
どを食べた。静かに飲みながら、

「もう、この店に来ることはないかもしれない」

などと考えていた。店の外では、東京ではめったに聞くこともない春の疾風が夜遅くまで吹
き荒れていた。

「もしかししたら、今夜は僕の内に新しい何かが始まるうとしているのかもしれない」

そんな思いがふとよぎった。僕の文芸活動がもともと東京から始まったのだし、いまは東京
との別離が近づいている、しかも文壇に關係の深い店「卯波」において、この地との内的な決
別も固まりつつあったからだ。

俳人の道生さんもこの店で、詩人の宗左近氏らとの交流を通じて自分の創作基盤を確立して
いったに違いない。彼は今年の十一月にG誌を創刊するときいている。

手嶋氏や僕は、もしやあと二週間足らずで大分に帰ることになったならば、帰郷後は地方か
ら全国に向けて、堂々と自己の主張を発信していかなければならないだろう。それは当然にし

て、地方の文化基盤に根ざした地道とも言わべき活動であるはずだ。
少なくとも僕にとつては、この日の夜はいわば「東京との決別の夜」だとの思いに満ちてい
た。当夜の作を小題を除いて全句ここに記す。

卯波にて

せうちうにしづむ梅干春混沌

木芽酔かも真砂女さん側にゐて

春宵の酒店卯波に時止まれ

茹芹を食ひ内心のわかれ酒

春疾風やみし銀座に夜の更けり

とんからりん銀座稲荷の春の音

これで、この随想のすべてを終える。これから僕は、故里の土に根ざした新しい文芸への道
を歩み始めることとする。

あとがき

ふとしたはずみで、これまで作ってきた俳句を小題に思ふ所を書きたいという気になった。僕がはや四十歳代半ばを過ぎ、自己を顧みる年頃になった所為だろう。

文芸を始めたのは、いまから十五年余り前の昭和五十七年のことだ。別府駅前通りの書店で歳時記の文庫版を買いそろえたのが始まりだ。

きつかけを一言でいうなら、理想と現実とのギャップである。僕は先ず理想を掲げそれに向かつて猪突猛進するタイプだから、理想と現実との乖離を感じ失望感をつのらせて大きく落ち込むことがある。

当時もそうだった。青春の頃から抱きつづけていた、一何か一つでも自己の生きた証となるものを一生をかけて純真に追求したいとの夢が、社会にとつぷりと漬かったことで次第に居場所をなくしつつあった。わが理想が風前の灯火だった。

もやもやしていた僕は、何らかの形で自分を進展の方向に向きたい一心から、人生の軌道を少しばかり文学へとシフトさせようとした。その具体的な一歩が、たまたま文芸、それも俳句に始まっただけのことだ。

いま、このように告白して、過去の自分といまの自分を比較する時、僕はやはり僕以外にはなれないのだと分かるし、前進したか後退したか定かでない自分に忸怩たる思いもある。だ

けど、これからはそんな泣言は言わないつもりだ。僕の内部に未来へ引つ張る理想が消えてしまわないかぎり、全力で進もうと思う。

本書のタイトルは、自己の人生を風になぞらえ、肩を張らない普通の人生を歩みたいとの願いから付けた。

僕の短歌の師・佐藤志満先生が、歌集「身辺」(第一回短歌新聞社賞受賞)において、その奥深い人生観を吐露されたように、さりげない日常生活そのものが貴重な価値となり得るのだということ、いま叫びたい気がしている。成果があつたとするならば、その点に気づいたことだろう。

この随想を書き進むうち、僕の内部にこれまで漠然としていた、たとえば故里に対する認識や、僕を引つ張りつづけている当為や、あるいは最も大切なものとしての家族のことなどが、次第にその本体を現した気がしている。

そんな発見を喜び、これまで僕を育ててくれた多くの人たちや郷里の山河に改めて感謝の念を捧げたい。そして、これからの更なる人間的成長と社会への貢献をお誓いしたいと思う。

《追伸》文中にあるわが小書齋の聴風庵については、平成十年三月奥沢にて 田邊誓司

委員長でいられる秋葉四郎先生が来訪の折、「潮見聴風居、通称「聴風居」と命名してくださいましたので、以後「聴風居」と呼ぶことを付記する。 田邊誓司

小 題 別 索 引

第一章 息吹

- (菜の花の・二)
- (旅遠く・三)
- (荷車の・五)
- (喰はれたる・六)
- (もの干す女・七)
- (山越ゆる・八)
- (朝まだき・一)
- (羽ばたきて・一一)
- (冬晴や・一三)

第二章 望郷

- (日溜りの・一六)
- (ゴム長の・一七)
- (蒲公英の・一九)
- (ひなげしの・二二)
- (蒲田にて・二三)
- (来し方を・二五)
- (水の帯・二八)
- (二つめを・三)
- (逆立てる・三一)
- (返り咲く・三二)
- (一枚の・三四)
- (大海鼠・三六)
- (坐禅して・三七)
- (連凧の・三九)
- (歴史とは・四一)
- (沈丁の・四二)
- (早春の・四四)

第三章 胎蔵の音

- (子燕の・四七)
- (雨ふるや・四八)
- (一ところ・四九)
- (去るものを・五一)
- (葛咲いて・五四)
- (寝転べば・五五)
- (縁がはに・五六)
- (雷雲の・五九)

(土の香の・六)(日の当たる・六一)

第四章 形なき浸食

(実紫・六五)(冬の大地に・六七)(白鳥の・六九)(里の春・七)
(蝌蚪の群・七二)(梟の・七三)(投げ苗を・七三)(子の大き・七五)
(幼子の《欲》・七七)(もじずりの・七八)(ふるさとに・八一)(思ひ出の・八一)
(茅蝸の・八四)(鬼灯へ・八五)(弓なりに・八七)

第五章 悠々「田舎人」

(山の土・九)(ふらここに・九一)(咲きそめし・九二)(灯の下に・九三)
(日盛の・九五)(ずるき食ふ・九七)(柿の秋・九九)

第六章 新しい時代へ

(深闇が・一四)(冬の雨・一五)(一点と・一一)(半島の・一一二)
(雪柳・一一三)(旅人の・一一五)(暮れてなほ・一一一)(似我蜂も・一一一)
(歳々は・一一二)(冬ざれて・一二四)(風の中・一二六)(雪の積む・一二九)
(浅春や・一二九)

第七章 黄砂ふる街

- (早春は・一三三)(二ヶ月や・一三四)(葛藤の・一三五)(音のなく・一三六)
(黄塵や・一三八)(防風を・一四三)(春昼や・一四六)(子に巢食ふ・一四七)
(春愁の・一四九)(石楠花や・一五二)(幼子の《紫雲英》・一五三)
(春宵の・一五四)(春風邪の《吐瀉》・一五五)

第八章 樟のこと

- (あかつきは・一五八)(その味も・一五九)(八月の・一六一)(埋火の・一六三)
(爺ちやん・一六四)(秋水の・一六六)(どぶろくも・一六八)(ましら草・一七〇)

第九章 心の山河

- (冬苺・一七五)(春風邪の《鼻水》・一七六)(日脚のぶ・一七九)(磯巾着・一八〇)
(山頂の・一八二)(露草の・一八四)(可笑しとも・一八六)

第十章 鮫鱈鍋と真砂女さん

- (花冷の・一八九)(サルビアの・一九二)(桐一葉・一九三)(ふるさととは・一九四)
(どてら着て・一九六)(去年今年・一九七)(胡麻和の・一九九)

フォーユー企画出版理念

近年、社会が経済至上の傾向を呈して久しく、この間人々は、生産より消費へ、不易より流行への歩を速めてまいりました。そして、時代の流れは、わが国に営々と培われてきた精神文化をも呑み込み、いまや物的価値尺度が社会に遍く浸透しております。

一面、かすかながら新たな兆しもうかがわれます。明らかに不利な立場から正義を貫く法律家や、人道援助に生涯を掛ける活動家、また身体の不利益を反転し周囲に勇気を与える青年や、地域社会への奉仕に地道に取り組む個人の活動、等々であります。

こうしたなか、私たちはここに、ヒューマニズムあふれる社会の構築を理想にフォーユー企画を興し、地方にあつて文芸、哲学、種々の芸術等に励む人々の活動を、良書の普及刊行等を通して支援すべく歩み始めました。身近に営まれる文化活動を全国の同胞とともに共済し、新しい文化の形成へつなげようとの熱意からであります。この趣意が理解を得られ、新しい時代の潮流となるよう念願してやみません。

二 九年七月

事務主幹

【著者略歴】

たなべ せい
田辺 井

略年譜

- 1952年 大分県に生れる。(本名；誓司)
- 1975年 長崎県立国際経済大学(現長崎県立大学)卒業。
- 1982年 俳句を始める。俳号は実父孝臣が称していた「風信子」を継承。
- 1985年 歌誌「歩道」及び俳誌「沖」に入門。
- 1991年 短歌に専念すべく「沖」を退会。
- 1993年 歩道短歌会同人。
- 2008年 現代歌人協会会員。

著 書

- 句集「草笛」(近代文芸社・日本俳人文庫22集)
- 歌集「菜花爛漫」(短歌新聞社)
- 随想「風立つ村」(れんけい社)
- 写生短歌研究「存在価値固定詳論」(聴風舎)

エッセー 風立つ村(かぜたつむら)

平成21年7月1日発行

著 者 田 辺 井

発行者 ForU 企画

発行所 ForU 企画

〒874-0833 別府市鶴見7組3

(TEL代表0977-25-4320)

電磁製作 ForU 企画

P1000E(本体953円+税)